小稲荷遺跡群西大室七ツ石遺跡

# 七ツ石3・4・5・6・7号墳
# 縄文早期稲荷台式住居

前橋市教育委員会　2018
株式会社　岸土木
株式会社 測研(文化財研究室)

小稲荷遺跡群西大室七ツ石遺跡

# 七ツ石3・4・5・6・7号墳

## 縄文早期稲荷台式住居

太陽光発電施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

前橋市教育委員会
株式会社　岸土木
株式会社 測研（文化財研究室）

赤城山南麓の西大室七ツ石遺跡俯瞰写真（左４号墳・右３号墳）（南から）

七ツ石３・４号墳全景空中写真（真上から）

巻頭２

七ツ石３号墳全景俯瞰写真（南西から）

七ツ石３号墳石室全景（南西から）

七ツ石４号墳全景（南西から）

七ツ石４号墳石室全景空中写真（真上から）

七ツ石３号墳出土遺物（金環・銅製品刀装具・漆土玉）

七ツ石４号墳出土遺物（金環・滑石製臼玉・銅製品刀装具）

## 例言

1．本報告書は前橋市西大室町 421,422-2 番地に所在する小稲荷遺跡群西大室七ツ石遺跡の発掘調査である。
　具体的に七ツ石３・４・５・６・７号墳、縄文早期稲荷台式住居の調査である。
2．発掘調査は株式会社岸土木が計画した太陽光パネル設置工事に伴う事前発掘調査である。
　発掘調査費用は全額株式会社岸土木が負担した。
　発掘調査は株式会社測研文化財研究室が実施した。
3．試掘調査は前橋市教育委員会が平成 29 年６月１日～６日間、第２期として 10 月 26･27 日に実施した。
4．発掘調査期間は平成 30 年１月 22 日～３月 27 日である。
5．発掘調査は株式会社測研文化財研究室の大塚昌彦が担当した。
6．人骨・歯の分析は宮崎重雄氏に依頼した。
7．遺構写真は大塚が、遺物写真は石井克己が撮影した。
8．航空写真は、株式会社測研の割田博之が撮影した。遺跡の測量は株式会社測研の平形信二が実施した。
9．本書の整理は株式会社測研文化財研究室の大塚昌彦・石井克己・石井なみ枝・黒田紀子が実施した。
10. 本書の執筆・編集は大塚が実施した。
11. 出土遺物及び遺構図面・遺構写真はすべて前橋市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査から報告書作成にあたり、下記の関係機関・関係各位からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。
　前橋市教育委員会、株式会社岸土木、株式会社歴史の杜、パリノ・サーヴェイ株式会社
　石井克己、前原　豊、増田　修、山下歳信、永井智教、小島純一、大工原豊、杉山秀宏、文挟健太郎、
　加部二生、三浦茂三郎、高橋　敦、田口一郎、中村博樹、後藤佳一（順不同）

## 凡例

1．本書で使用した座標はすべて世界測地系（測地成果 2011）である。
2．挿図中における方位（N）は座標北を示す。
3．遺構図の縮尺は、各図に明示している。
4．遺構断面の水準値は海抜を示している。
5．遺物実測図の縮尺は、各図に明示している。
6．国土地理院発行５万分の１、２万５千分の１地形図（前橋）を使用した。
7．古墳分布図については群馬県古墳総覧 2017 を参照した。

## 目次


例言・凡例・目次
第１章　発掘調査と遺跡の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 1
　第３節　周辺の遺跡 …… 3
第２章　遺構と遺物 …… 4
　第１節　古墳時代 …… 4
　　七ツ石３号墳 …… 4
　　七ツ石４号墳 …… 26
　　七ツ石５・６・７号墳 …… 39
　第２節　弥生時代 …… 42
　第３節　縄文時代　１号住居 …… 42
第３章　七ツ石３・４号墳出土の人骨・歯 …… 48
第４章　まとめ …… 51

# 図版目次


第 1 図　遺跡位置図　2
第 2 図　周辺の遺跡図　2
第 3 図　遺跡地形測量図　5
第 4 図　遺跡全体図前調査図合成図　6
第 5 図　遺跡全体図　7
第 6 図　七ツ石３号墳実測図　8
第 7 図　七ツ石３号墳土層断面図　8
第 8 図　七ツ石３号墳墳丘土層断面図　9
第 9 図　七ツ石３号墳石室天井石実測図　10
第 10 図　七ツ石３号墳前庭部・墓道実測図　11
第 11 図　七ツ石３号墳石室展開図　13
第 12 図　七ツ石３号墳石室裏込め実測図　14
第 13 図　七ツ石３号墳石室第２床面敷石実測図、第１・２床面遺物出土状況図　15
第 14 図　七ツ石３号墳羨道部展開図　16
第 15 図　七ツ石３号墳出土土器実測図　17
第 16 図　七ツ石３号墳石室出土金環実測図　17
第 17 図　七ツ石３号墳石室出土金属製品実測図（1）　19
第 18 図　七ツ石３号墳石室出土金属製品実測図（2）　20
第 19 図　七ツ石３号墳石室遺物出土状況詳細図　22
第 20 図　七ツ石３号墳出土漆土玉実測図　25
第 21 図　七ツ石４号墳実測図　26
第 22 図　七ツ石４号墳石室展開図　27
第 23 図　七ツ石４号墳石室横断面図　28
第 24 図　七ツ石４号墳石室裏込め実測図　29
第 25 図　七ツ石４号墳墳丘土層断面図　30
第 26 図　七ツ石４号墳石室第２床面敷石実測図、第１・２床面遺物出土状況図　31
第 27 図　七ツ石４号墳出土土器実測図　32
第 28 図　七ツ石４号墳出土滑石製臼玉実測図　33
第 29 図　七ツ石４号墳出土金環実測図　33
第 30 図　七ツ石４号墳出土金属製品実測図　35
第 31 図　七ツ石４号墳石室遺物出土状況詳細図　37
第 32 図　七ツ石５号墳石室展開図　39
第 33 図　七ツ石５号墳石室実測図　39
第 34 図　七ツ石６号墳実測図　40
第 35 図　七ツ石７号墳石室展開図　41
第 36 図　七ツ石７号墳石室実測図　41
第 37 図　弥生土器復元実測図　42
第 38 図　１号住居実測図　42
第 39 図　１号住居及び周辺出土土器実測図　43
第 40 図　１号住居出土石器実測図　44
第 41 図　１号住居及び周辺出土石器実測図（1）　45
第 42 図　１号住居及び周辺出土石器実測図（2）　46
第 43 図　七ツ石３・４号墳人骨・歯出土状況図　50
第 44 図　七ツ石３・４号墳出土人歯写真　50
第 45 図　低墳丘二段築成古墳断面模式図　52
第 46 図　墓道を持つ群馬の古墳集成図　52
第 47 図　漆土玉製作実験考古学　56


# 表目次


第 1 表　七ツ石３号墳　土器観察表　21
第 2 表　七ツ石３号墳　金環観察表　21
第 3 表　七ツ石３号墳　直刀・刀装飾具観察表　21
第 4 表　七ツ石３号墳　鉄鏃観察表　23
第 5 表　七ツ石３号墳　漆土玉観察表　25
第 6 表　七ツ石４号墳　滑石製臼玉観察表　33
第 7 表　七ツ石４号墳　土器観察表　36
第 8 表　七ツ石４号墳　金環観察表　36
第 9 表　七ツ石４号墳　直刀・刀装飾具観察表　38
第 10 表　七ツ石４号墳　鉄鏃観察表　38
第 11 表　縄文石器観察表　47
第 12 表　七ツ石３号墳出土人歯記録表　49
第 13 表　七ツ石４号墳出土人歯記録表　49

# 第１章　発掘調査と遺跡の概要

## 第１節　調査に至る経緯

平成 27 年度に開発事業者である株式会社岸土木（以下「開発者」という。）より、西大室町地内での太陽光発電施設建設に伴う埋蔵文化財の取扱について事前の相談を受けた。前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）では、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地「前橋市０２１８遺跡」であり、開発にあたっては文化財保護法第 93 条第１項の届出が必要であること、また、開発の内容によっては、その取扱いについて協議が必要となることを説明した。

これを受け開発者より平成 28 年２月 29 日付けで文化財保護法第 93 条第１項の届出が提出された。市教委では、提出された事業計画を検討した結果、事業地内での遺跡範囲の確認調査が必要であると判断し、平成 28 年度末に開発者と実施内容（事業地は、立竹木の密集する山林であったことから、確認調査実施可能箇所の選定、樹木伐採箇所の選定等）について検討を行なった。

確認調査については、事業地が広大であることから、古墳検出が想定される事業地南側を第一期調査範囲とし、平成 29 年３月 29 日付けで開発者より依頼が提出された。６月１日から６日にかけて確認調査を実施し、円墳と思われる遺構７基を確認した。なお、事業地北側については、第二期として 10 月 26・27 日に確認調査を実施したが、明確な遺構は検出されなかった。

第一期の確認調査の結果に基づき、事業地南側から検出された古墳の状況を説明し、造成計画を古墳の現状保存が図れるものとするように開発者に検討を依頼した。８月 22 日、開発者より事業計画の変更案が提示され、確認調査で古墳が集中していた事業地西側は、緑地帯として太陽光発電施設は設置しないこととなった。しかし、森林開発に必要な調整池部分については、古墳（２基）の現状保存が図れないことから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで、開発者と市教委は相互に合意した。

平成 29 年 11 月 30 日付けで、開発者から市教委へ埋蔵文化財発掘調査依頼が提出された。市教委直営による発掘調査は、他事業で実施中であり困難であると判断し、民間調査組織による発掘調査実施とした。市教委が作成した発掘調査仕様書を基に、事業者は株式会社測研と発掘調査契約を締結し、平成 30 年１月 22 日に調査着手に至った。なお、市教委は調査監理を行なうものである。

遺跡名称「小稲荷遺跡群　西大室七ツ石遺跡」（遺跡略称：29E52）とした。「西大室」は町名、「七ツ石」は旧小字名を採用した。なお、「小稲荷」は当該地一帯が「小稲荷古墳群」として周知されていることから、エリア名として「小稲荷遺跡群」と付したものである。　　（前橋市教育委員会　文化財保護課）

## 第２節　遺跡の立地と環境

本遺跡は、赤城山南麓の標高 143 ～ 151 mに位置している。

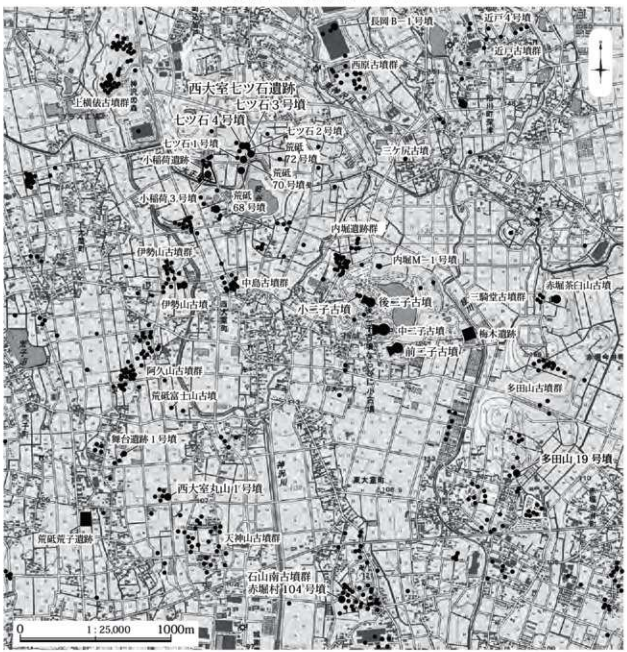
北から南にかけて緩傾斜地を荒砥川、神沢川、粕川が南流し、本支流が縦谷を作り浸食している。これらの各縦谷の間にはさまれた舌状台地の先端部及び台地の頂上部に古墳が群在している。

本遺跡地の東側には国指定史跡である前・中・後二子古墳の３基をはじめ前方後円墳５基を含む 178 基が上毛古墳総覧に記載されており、旧荒砥村では 365 基が確認され古墳の宝庫といわれている。前橋市荒砥地区の中でも著しく多く、古墳を抜きにしては本地区の特色を語ることはできない。

この地には上毛野国第一級の権力者がいたことが想定できる。

この地の古墳群の多くは、６世紀の中頃から７世紀の中頃にかけてつくられたものと思われる。大正用水が東流しており、北側に湾曲した北西に位置する。この湾曲部南側には南北 300 m、東西 350 mの乾谷沼がある。平成の合併前の粕川村・大胡町・前橋市の境の前橋側に位置している。

第 1 図　遺跡位置図（前橋市位置図・1/50000）




第 2 図　周辺の遺跡図（1/25000）群馬県古墳総覧 2017 参照

## 第３節　周辺の遺跡

周辺の遺跡は大室公園にある後二子古墳・中二子古墳・前二子古墳・小二子古墳などに代表される前橋市の中で代表とされる古墳群である。乾谷沼の北側半分の周囲には古墳の分布が認められる。

小稲荷遺跡群西大室遺跡七ツ石古墳の周辺の調査古墳についてみてみたい。

今回調査した遺跡の南東部隣接地は、昭和 54 年に前橋市教育委員会により荒砥 68・70・72 号墳の発掘調査が実施されている。

荒砥 68 号墳は、円墳で古墳規模は盛土の高さは５～７m、周堀内側で 44 m、周溝外縁で 55 m位である。石室は横穴式両袖型石室で耳環（金環）７点、帯金具２、鉄鏃 29、弓飾り５などが確認されている。その他土師器坏 17・高坏１、須恵器提瓶１・平瓶１・細頸壺１などが出土している。石室は玄室のみが残存し、発掘調査が行われた。本墳は調査後も現存している。

荒砥 70 号墳は、円墳で古墳規模は墳丘の高さは６～７m、周溝内側で約 40 m、周溝外縁で 50 m位である。石室は横穴式両袖型石室で前庭から土師器坏 13・高坏１、須恵器高坏２、坏２、短頸壺１、細頸瓶１、玄室出土のものは鉄鏃 29、鈹具１、帯金具２、小刀１、耳環１が出土している。本墳は南調査後、周溝部は道路となったが、墳丘は現存している。また、この古墳の北側には大きな土橋が残されており、この土橋を前方後円墳の前方部と認識し、前方後円墳形とする研究者もいる。

七ツ石２号墳は 70 号墳の西側に隣接しているが、墳形は不明であり、出土遺物は円筒埴輪、土師器甕がある。西側に墳丘状の高まりが認められそうで、通常の円墳となる可能性が高いと考える。

荒砥 72 号墳は、古墳の規模は墳丘が直径 24 mであり、墳丘の高さは 3.5 m、周溝は上幅５m、深さ 1.6 mである。石室は横穴式石室で玄室・羨道・羨門までは残存している。出土遺物は須恵器提瓶１、直刀１、小刀２、鉄鏃 20、馬具轡１、金銅製金具４、耳環４、弓飾り金具３、刀鞘金具２などがある。

七ツ石１号墳は 72 号墳の北側にの墳丘と周溝の間に位置している小石槨である。遺物はない。

なお、荒砥 72 号墳、七ツ石１号墳は発掘調査後、道路工事により完全に消滅している。

七ツ石４号墳周溝の北西に隣接して４m程の盛土が存在しているが、表面に石の破片が多量に存在しており、この土山はその北側に大穴を掘った際の使用しない石を山とした石山と考える。

荒砥 78 号墳は七ツ石２号墳の北側、荒砥 70 号墳の北西、荒砥 80 号墳に南側、七ツ石４号墳の西側に隣接して存在している。現状は高さ 2.6 m位の盛土が確認されており、北側には周溝が巡ることがわかる等高線がある。東南東には周溝の立ち上がりと思われるカ所が認められ、およそ周溝外縁の直径 32 mを測る。

荒砥 80 号墳は荒砥 78 号墳の北側に位置している。現状では３mの盛土が認められる。荒砥 78 号墳とは周溝を分かれて確認できていない。

西側 200 mに隣接した小稲荷遺跡では５基の古墳が調査されており、東にある小谷を挟んだ東台地には円墳２基（荒砥 62・64 号墳）が立地しており、乾谷沼の周辺には古墳群を形成していたことがわかる。

隣接する調査した古墳について記してきたが、古墳という墓を見るのと同時にその地域を治めてきた豪族の館をみてみたい。大室古墳群（前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳）の豪族居館と考えられるのが、大室古墳群の東約 500 mの所に梅木遺跡がある。また、南西 2.3㎞に荒砥荒子遺跡（前橋市荒子町）、南東 2.4㎞に今井学校遺跡（伊勢崎市赤堀今井町）、北西 3.5㎞に丸山遺跡（前橋市泉沢町）などの豪族居館遺跡が存在している。この地域は古墳群の多いことや豪族居館遺跡が多く確認されているエリアである。古墳の集中カ所が幾つもあることから新たに豪族居館遺跡がこれからも確認される可能性があるものと考える。

また、周辺の遺跡地図には西大室七ツ石遺跡に関係する墓道の有る古墳、石室玄室軽石敷石古墳や著名な古墳なども明示する。

# 第２章　遺構と遺物

七ツ石３・４号墳の古墳２基の発掘調査であったが、小石槨など３基が検出され合計５基の古墳を確認した。また、縄文時代の竪穴住居１軒、土坑２基を確認した。

## 第１節　古墳時代（第３・４・５図）

『上毛古墳綜覧』未掲載、『群馬県古墳総覧』未掲載の５基の古墳を調査した。

古墳は字名七ツ石地内に位置することと、荒砥村の古墳は 365 基を頭打ちにしていること、西大室古墳の 70 号墳、72 号墳の北側に所在している古墳が七ツ石Ⅰ・Ⅱ号墳とされていることから今回の２基の古墳に七ツ石３号墳、４号墳命名する。また、３号墳に付随する３基の小石槨・土壙墓は５・６・７号墳として報告する。

**七ツ石３号墳**（第６～ 14 図）

東側の古墳で荒砥 70 号墳の北側、荒砥 72 号墳の北西に隣接して存在している。

調査前の状況は、周溝のくぼみがはっきりした形で直径 50 m位あり、特に北側の立ち上がり、南西側の立ち上がりが明瞭に存在している。この周溝の高さは、北側で２m、南側 1.2 m存在していた。中央に墳丘は直径 20 m北側の高さで１m存在し、南東部は下がっており、高さ４mを測る。墳丘南側は若干くぼみが認められ、礫が散見されるが、石室の天井石は現存している可能性があった。

雑木林となっており、伐採後年輪を数えられたのが最高で 70 年以上経過している。全体的に切り株を抜きながら表土を剝ぐ作業を行った。伐採エリアが古墳周溝外側までが望ましかったが、調査範囲が伐採範囲となっており、少し内側のエリアで調査を行った。

周溝内、封土内も切り株が多く根がかなり深くまで達していたため重機による調査を行った。周溝内に遺物が存在することを考え、慎重に掘り下げながら調査した。周溝の平面形は、不整円墳（不整六角形）である。周溝は南面が直線的で古墳羨門正面と並行で幅 2.8 ～ 3.4 m、深さ 0.8 ～ 1.2 mを測る。堀の内外面ともしっかり角部を持っている。長さ外側立ち上がりで 16 m、内側立ち上がりで 11 mである。

北辺の長さ外辺で 25 m、内辺で 19.3 m、周溝幅は最大 5.8 mである

南西辺の長さ外辺で 21.8 m、内辺で 19.2 m、周溝幅は 2.8 m～ 3.6 mである。

北西辺の長さ外辺で 16.8 m、内辺で 11.2 m、周溝幅は 5.4 mである。

北東辺は一部調査外であるが外辺推定 21 m、内辺の長さは 15.8 m、周溝幅は 5.4 mである。

南東辺の長さ外辺で 22.6 m、内辺で 19 m、周溝幅は 1.8 m～ 3.8 mである。南東部周溝については南面コーナーから約５mは墳丘側に窪んでおり、帆立貝形前方後円墳を思わせる形となっている。

北側半分は周溝内縁の墳丘内に浅く緩い幅１～２mのテラス状の広がりをもっている。

周溝内からは、遺物の出土はなかった。但し、南東部周溝では弥生後期樽式の壺形土器の一括出土があった。

墳丘規模は南壁・北壁間で 30.5 m、南西壁・北東壁間で 30.5 m、南東壁・北西壁間で 31.4 mである。周溝外周で南壁・北壁間で 39.5 m、南西壁・北東壁間で 37.5 m、南東壁・北西壁間で 36.5 mである。

周溝内に人が歩いた道が確認された。幅が 30㎝で踏み固められた厚さ 2㎜で砂状の道遺構が確認された。

墳丘内部には５号墳・７号墳と周溝外に６号墳の３基が存在する。

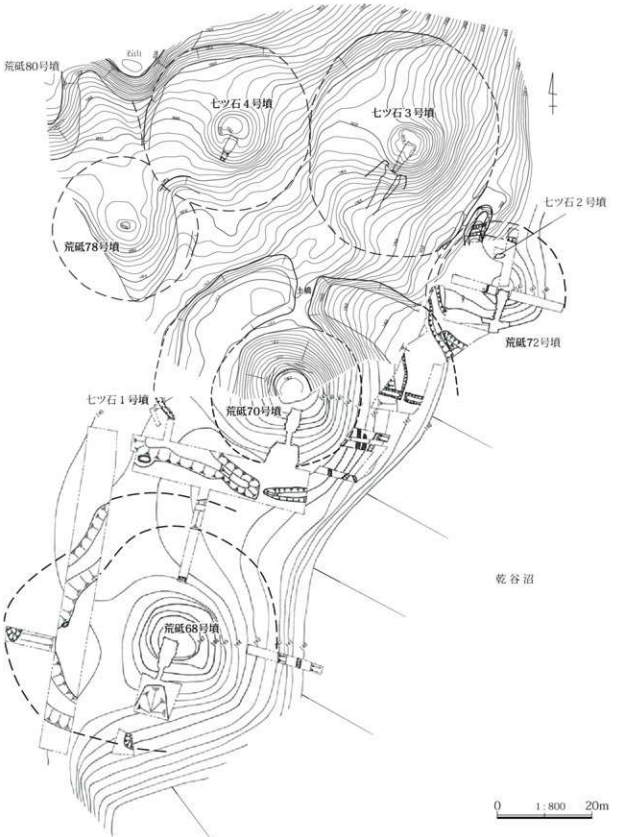
**横穴式石室**（第９～ 14 図）

遺骸埋葬施設は、袖無型横穴式石室である。主軸はＮ―34°―Ｅである。

横穴式石室の天井石は７石がすべて乗った状況で確認されたが、西側の奥壁寄りと玄門寄りの２カ所に側壁の石が取り払われ盗掘口が存在していた。その為、天井石は大きく西側に傾きズレが生じて大変不安定な危険な

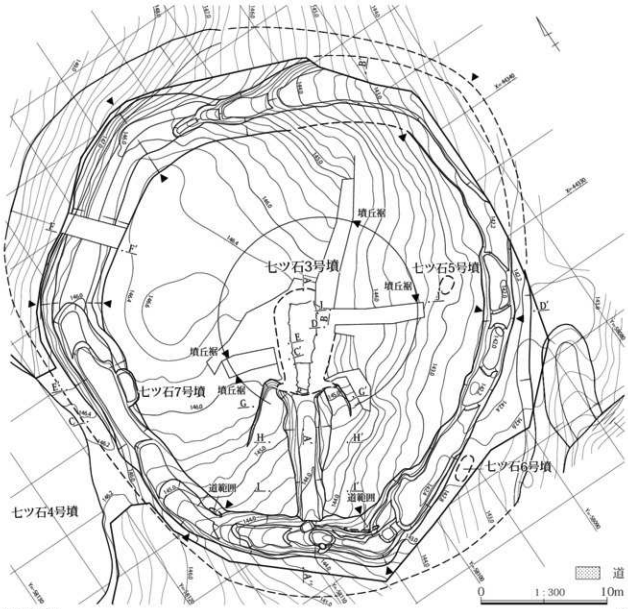
七ツ石3号墳
七ツ石4号墳
七ツ石2号墳
荒砥72号墳
荒砥70号墳
七ツ石1号墳
荒砥78号墳
荒砥80号墳
土橋
石山
Y=-58070
Y=-58100
Y=-58160
Y=-58180
X=-44360
X=-44340
X=-44320
X=-44300
0
1:500
20m

第3図　遺跡地形測量図

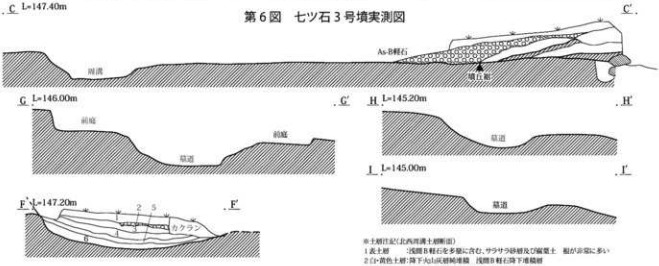



第4図　遺跡全体図前調査図合成図

第5図　遺跡全体図



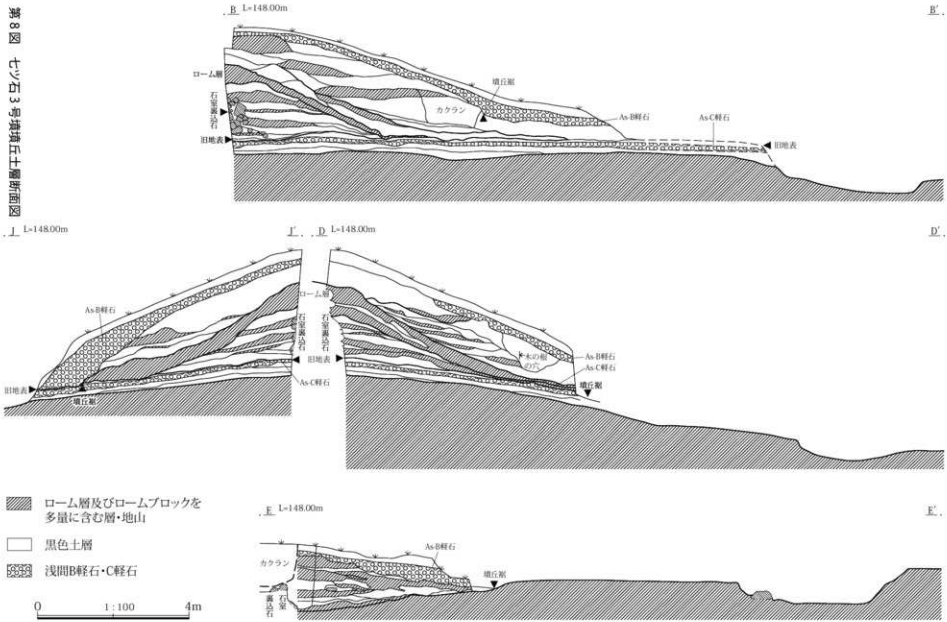

第6図　七ツ石３号墳実測図

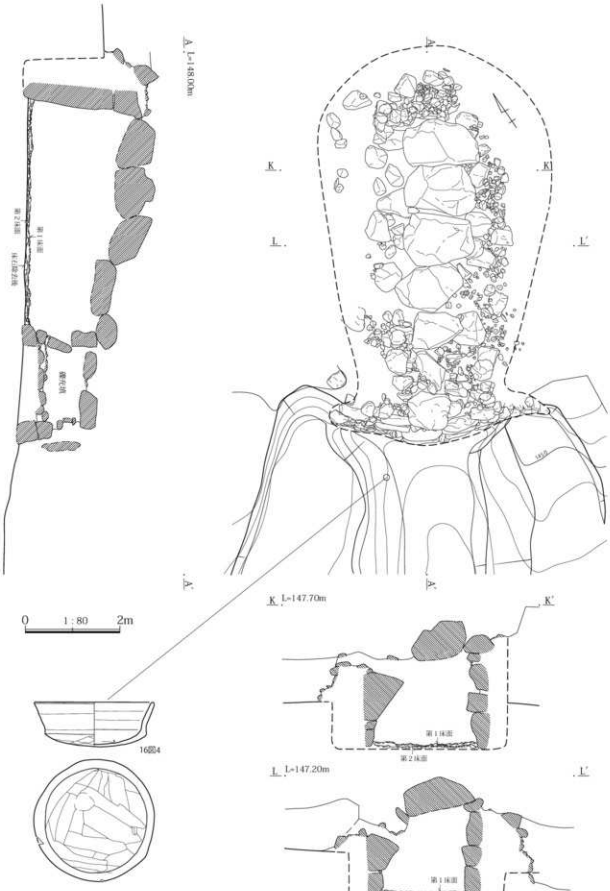



※土層註記(北西周溝土層断面)
1.表土層　：浅間B軽石を多量に含む、サラサラ砂質及び腐葉土　層が非常に多い
2.白・黄色土層:降下火山灰層堆積　浅間B軽石降下堆積層
3.黄色土層　：降下軽石層崩壊層　浅間B軽石降下堆積層
4.黒色土層　：流黒で黒色が一番強い　浅間C軽石を多く含む
5.黒色土層　：4層に比べやや黒色が薄く、浅間C軽石が多く含まれる
6.黒色土層　：4・5層に比べ薄く浅間C軽石は含まれているがやや少ない
7.暗褐色土層：ローム粒子を多量に含む　しまり強い

第7図　七ツ石３号墳土層断面図

第８図　七ツ石３号墳墳丘土層断面図






第9図　七ツ石3号墳石室天井石実測図

第 10 図　七ツ石 3 号墳前庭部・墓道実測図

状況であったため、天井石のある状況で石室天井石平面図、および写真を撮影し重機により天井石を取り外し、古墳北西部に配置順に仮置きした。但し、玄門・羨門の天井石はそのままとした。

石室内部には多くの石が入れられており、石室内に土が流入していない、石室が空洞であった時期に盗掘が行われたと考える。

奥壁は横 2.0 m以上、縦 1.8 m以上の 1 枚石でその上に大石 1 石が載せられ、その上に 3 石を並べて、合計 3 段積の石で設置されている。

石室側壁の東壁はほとんど古墳構築時と同じ状況で残っている。東壁基礎石は 4 石で奥壁側が一番高さのある石で玄門側にかけて背の低く傾斜を持たせている。2 段目の石は同じ高さの石を 6 石並べ、石面の傾斜は同じで、3 段目は奥壁から 3 石は高さのある石で奥壁の高さにあわせて、玄門部は中間の石でランダムに積んで、天井石の配置で傾斜を持たせている。

玄室西壁中央の基礎石から 2 石目が異常に迫り出しがあり、30°内傾していることが確認された。(第 9 図石室横断面 K・L)

玄室床面は 2 面石敷きが施されている。上面の石敷きは榛名山噴火に伴う軽石であり、利根川の転石で円礫となった軽石を全面に敷き詰めている。敷き詰めた当初は軽石の白色が際立ってきれいな石敷きとなっていたものと思われる。大きさは、様々であるが 10㎝を最大として敷き並べている。

下面の石敷きはこの地域の浅間石の角礫があり、敷き並べられている。上面、下面とも厚さ 10㎝である。下面の下はローム層に達していない。

**羨道部**(第 14 図)

羨道内部の閉塞状況を良好に観察することが出来た。羨道部は天井石が残り、両側壁、床面、玄門、羨門が閉塞されており、羨道展開図の 6 面体がすべて完全な形で存在していた。

羨道部の大きさは、長さ 1.75 m、羨門側底面幅 80㎝、中央で 96㎝、玄門側で 1.05 m、天井部側羨門側幅 58㎝、中央が幅 58㎝、羨門幅 86㎝である。高さは 50㎝である。

羨道部は追葬が行われた最終形態の閉塞状況を確認できた。玄門の仕切石から玄門天井石の間が縦 50㎝、横下部 1.1 m、上部 0.9 mの四角い開口部を羨道内側から上下に届く縦長の石を 3 枚で塞ぐ。その後、羨道内に石を詰め羨門の開口部は縦 50㎝、横上部で 50㎝、下部で 70㎝の開口部の面を前庭の面と合わせるように綺麗に詰め込んで平らに仕上げている。その後、羨門の前に 2 枚の細長い石を縦方向に建て蓋石としている。(第 14 図羨道閉塞状況)(写真図版参照)

玄門の仕切石は 2 段積で造られ、羨門の仕切石も 2 段積で造られている。羨道床面は玄門仕切石と羨門仕切石の上面の高さで小石を平らに敷き並べている。

床面は大石の敷石を敷いているが、大石を取り除こうとすると側壁が動き石室の崩壊を招きかねないため、この敷石は取り除くことをあきらめた。よってこの石の下に敷石が存在するのかは不明である。

**前庭部・墓道**(第 9・10 図)

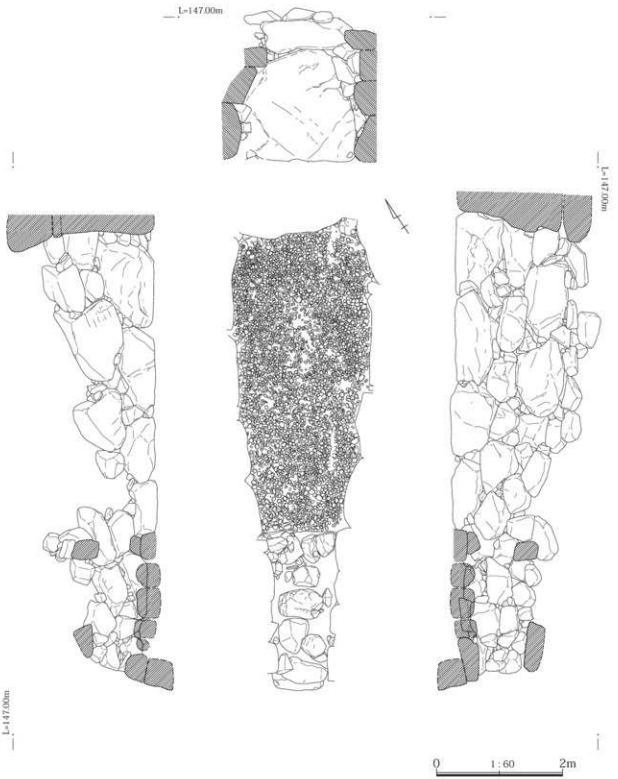
前庭部は、墳丘の盛土にローム層などが綺麗に積まれている。平面的にもその積まれた状況は確認でき、前庭部はそのローム層の積まれた土はなく、黒色土が覆土となっている。土を掘りぬき台形の素掘りの前庭構造が認められた。

しかし、前庭部は墳丘裾部まで確認され、前庭部は平な床面ではなく、中央が窪んでいる。この窪みは、調査が進むにつれ直線的に長さ 10 m、幅 2.5 m、深さ 0.8 mの溝となって周溝まで伸びている。

石室と周溝の比高差が大きいのでどの様な構造になっていたか不明であったが、墓道という構造でこの比高差が処理されていた。

横穴式石室の主軸方位は、N－34°－Eであるが、墓道主軸方位はN－32°－Eで若干ズレている。

墓道と周溝の接点は周溝深さの中間である。墓道先端の周溝内には柱穴状の落ち込みがあり、南側の周溝立ち



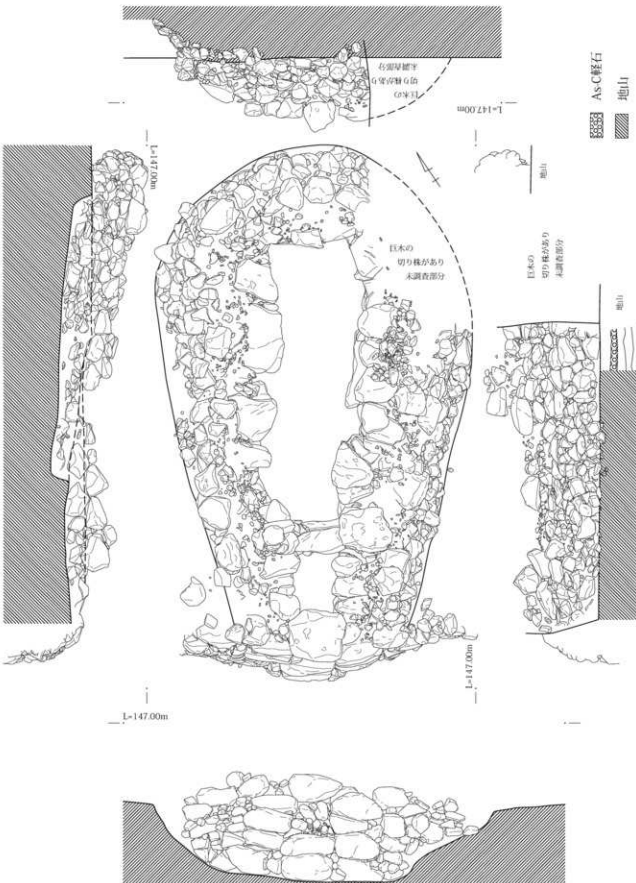

第 11 図　七ツ石 3 号墳石室展開図

上がり部にも柱穴状の落ち込みがあり、木橋のような構造が存在していたことも考えられる。

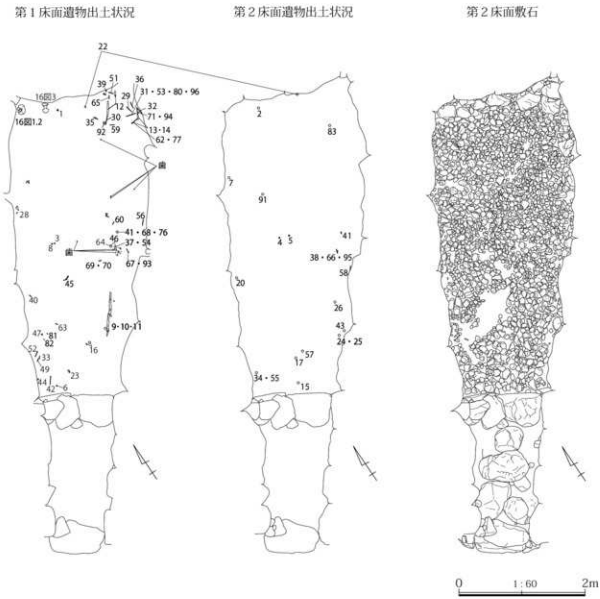
これは、いわゆる墓道で長さは 10 m、床の傾斜角度が羨門から 1.5 mは 12°でそれから周溝までは 4 °である。羨門・前庭部との比高差と周溝との比高差 1.2 mである。

前庭部は羨門と一緒に石積みが施され、正面は幅 5.3 m、高さ 1.35 m、下面は断面緩い「U」字状に 90㎝上がっており、東面は数石が欠損している。上面から見た場合は両側が墳丘と同じように湾曲している。

台形に広がる石積みは無かった。前庭の床面は竹の根によりほとんど残っていなかった。




第 12 図　七ツ石 3 号墳石室裏込め実測図




第 13 図　七ツ石３号墳石室第２床面敷石実測図、第１・２床面遺物出土状況図

**墳丘**（第７・８図）

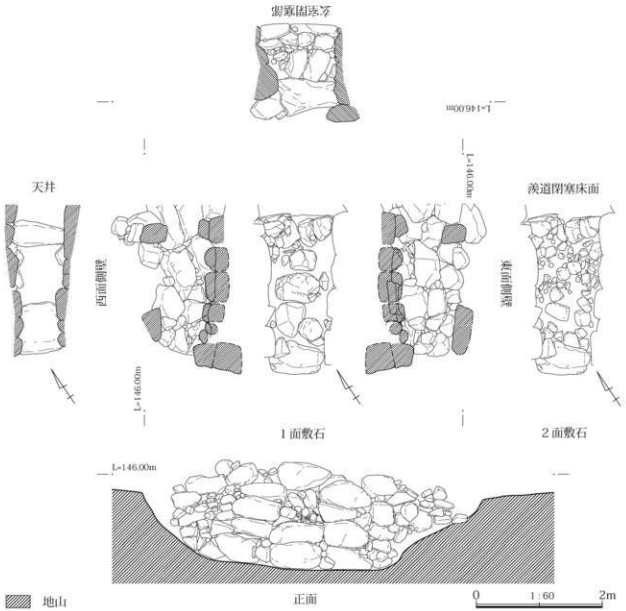
墳丘には、墳輪の樹立は認められない。

墳丘は、 ローム層・ロームブロックを多く含む層と黒色土層が交互で盛土されており、ローム層により石室裏込め層と合わせて作業面を作っていることがわかる。

また、現状の表土での墳丘の有り方は、浅間山のＢ軽石 天仁元年（1108）がこのエリアに厚く降下堆積している。その為墳丘において 1108 年以前の墳丘に浅間Ｂ軽石が多く堆積して墳丘面を嵩上げした形になっており、天仁元年での墳丘はもっと低く、墳丘円形も墳丘断面から浅間Ｂ軽石は墳丘裾部を確認することが出来る。墳丘は古墳中央に直径 16 ｍの高さ３ｍの盛土となっている。

墳丘構築面は旧地表面をそのまま利用している。墳丘断面地層では浅間Ｃ軽石を含む黒色土並びにその上に堆積した黒色土を構築面にしている。

周溝を掘った土で古墳盛土を行っているため周溝内側のテラス部分が作られ、１段目の基壇を構築したことになり、中央の石室を覆う墳丘で２段築成の古墳となる。古墳構築の簡略化が行われたものである。このような古墳の造り方を「低墳丘二段築成古墳」という。




第 14 図　七ツ石 3 号墳羨道部展開図

墳丘土層断面はローム層及びロームブロックを多量に含む土層と黒色土が交互に盛られている。墳丘の盛り土は３工程あり、第１工程は石室裏込め位置から約 3.5 mのところで墳丘を盛り始め裏込め石を積み上げていく各段階でほぼ水平に近い状況で天井石のところまで積み上げていく。第２工程として天井石を積み上げるためローム層を厚く盛り上げ作業面であるスロープを東西北３面に厚く盛り土し、天井石を設置後ローム層で天井石を埋め尽くしローム層の山を作る。第３工程としてロームと黒色土を交互に平坦に盛り上げている。

ここで考えなければいけないのは、純粋なローム層と純粋な黒色土を交互に盛り上げているが、これらの土をどのように盛り上げていたかである。一番可能性があるのは、必要な土を周溝予定地から確実に直接掘り上げて積んでいく方法が考えられる。このことから周溝が不定形であったり、周溝の幅や深さが所々で違っていることが関係しているものと考える。

もう一つは、黒色土とローム層を何カ所かにストックしてから墳丘造りがある。

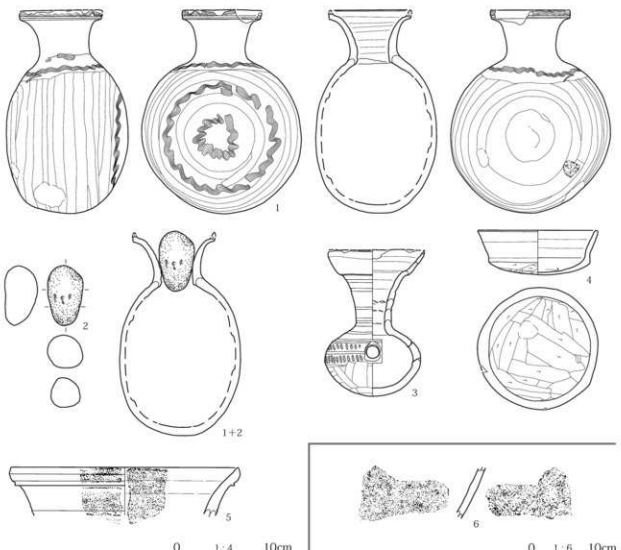
また、今回は浅間Ｂ軽石層が墳丘を含む遺跡全域に 20 ～ 40㎝の厚さで降下堆積しており、調査前の地形測量からこの厚さを引いたものが天仁元年（1108）の地形である。

**出土遺物**（第 15・16・17・18 図）

**土器**（第 16 図）

石室玄室奥壁西側から須恵器提瓶 1 点、鐙 1 点が完形品で出土した。前庭部から墓道に至る羨門の南東部に土師器坏が完形品で正位に出土し、須恵器甕の破片が少量出土している。

1 は須恵器提瓶完形品で壁に立掛けられ直立していた。口径は 8.24㎝、器高 21.6㎝、厚さ 12.6㎝、である。堤部はヘラ削りで調整、頸部はナデ調整、櫛描波状文を口縁部に、胴部には二重の円を描き、頸部には 1 周の他一部に 2 周目を描き始めている。




第 15 図　七ツ石 3 号墳出土土器実測図

第 16 図　七ツ石 3 号墳石室出土金環実測図

2の軽石が1の堤瓶頸部にピッタリ収まっていた。加工して栓の役目をはたしている。そのため石栓をはずすと堤瓶の内部は空洞となっていた。

3は須恵器蹴で口縁部を僅か欠くほぼ完形品である。

4は土師器坏完形品で、口径 12.5㎝、器高 4.7㎝である。器形は平底から明瞭な稜を持ち、口縁は「ハ」の字に開き口縁の中央やや上に僅か稜を巡らしている。底部はヘラ削り調整している。

5は須恵器甕の口縁部である。口径 24㎝、高さ（5.1）㎝である。

6は須恵器甕片で内面青海波当て具、外面は叩き目の跡である。

**金属製品**（第 16・17・18 図）

1～8は金環である。

3号墳の金環の出土状況であるが、石室中央左に 10㎝と近接して1セット、下の敷石上で石室中央に 20㎝で1セットが、奥壁寄りに 20㎝離れて出土しており、被葬者の頭位位置が確定したものと考える。但し、1セットは石室北西部で奥壁寄りと仕切石西壁より出土しており、その距離は 3.4 mも離れており、完全に被葬者が葬られた後、追葬時に動かされたことが考えられる。

このセット関係と実物を並べて見た場合、やや違和感を持つ。これは実際にセットで出土したものと実物は別物できれいに装着していたものがある。装着時に身内で耳飾りの交換などをしていたことも考えられる。

銅地の棒を螺旋状に巻いて切り取ったものと考える例として端部が2段切りになっているものである。

金環は8点の内6点は製品として組み合わせ関係にある。1・2の1組は大きさ・重さ・軸の太さが異なっており、明らかに組み合わせ関係ではない。出土位置関係から見た場合この異なった金環を装着していた可能性がある。

3・4、7・8の4点は第1床面上に置かれたものと第2床面に置かれたものと第2床面に置かれたもので組み合わせが異なっている。5・6は 2.4 m、7・8は 1.22 m離れている。第1床面と第2床面出土の金環は石の隙間に落ちていることが考えられる。

8個の金環は石室西側半分に位置している。

9・10・11は装着された状況で出土している。

9は直刀である。鞘口金具が装着したままのもので全長は 70.5㎝、刀身長は 60.2㎝、棟は 7㎜、刃幅C部が一番太く刃幅も 2.8㎝で刃部は内反りであり、切っ先は直線的である。茎部は直刀軸に対して下方に傾いている。目釘穴は1穴、直径 0.41～0.51㎝、長さ 1.34㎝の目釘がセットされた状況である。

10の鍔は、厚さ 0.47㎝の断面蒲鉾形で鉄棒を丸く曲げた簡単なもので長軸 4.1㎝、幅 2.49㎝である。

11は鞘口金具で、厚さ 1.4㎜の鉄板を縦 4.21㎝、幅 2.2㎝、厚さ 2.6㎝に加工している。

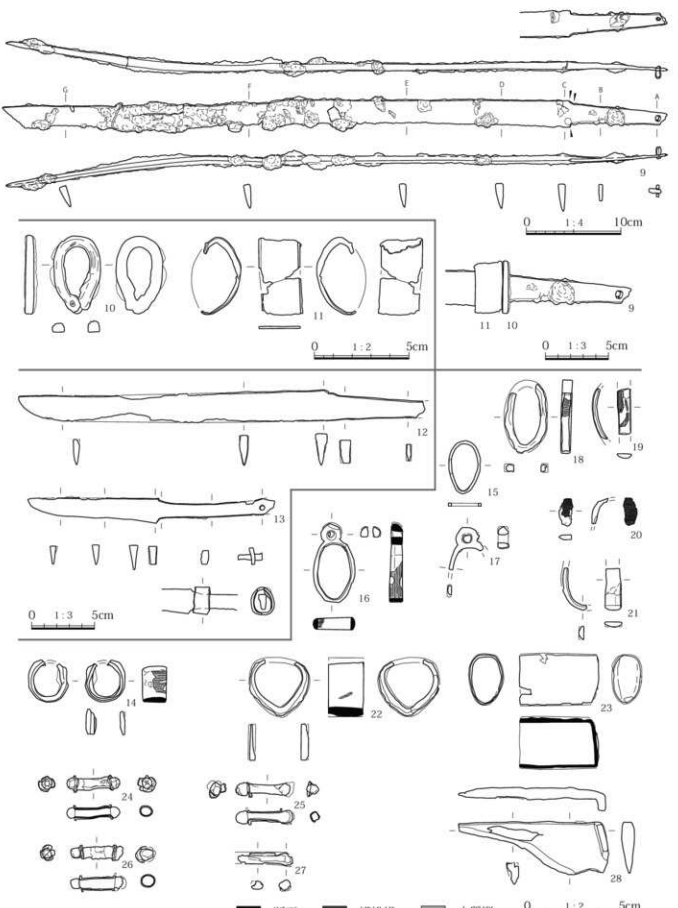
12は刀である。全長 32.3㎝、刀身は 24.3㎝、幅 2.3㎝、棟幅 4㎜、茎部は長さ 8㎝、幅 2.15～1.3㎝、関部は 2㎝× 0.9㎝と厚みがあるが端部は断面は幅 1.1㎝、厚さ 4㎜となる。端部は欠損している。

13は小刀、14は柄口金具であり、13は14を装着している状態であった。13は全長 19.6㎝、幅 1.55㎝、棟幅 0.55㎝、刀身 10.1㎝、茎部長 9.2㎝、目釘は付いている。目釘は直径 0.45㎝、長さ 1.86㎝である。14は直径 2.2㎝、幅 1.35㎝内面には木質が残っている。

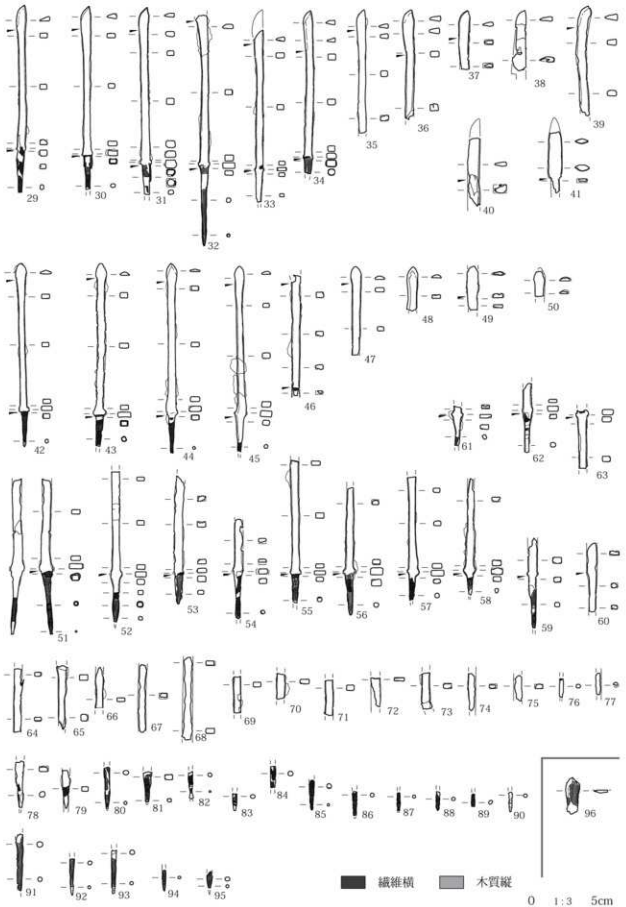
15は銅製品（銅地金に鍍金）で直刀鞘飾金具である。大きさは装着時幅 0.16～0.18㎝、縦 2.78㎝、横 1.67㎝、厚 0.12～0.14㎝である。断面四角形の加工製品である。

16・17は直刀鞘の吊金具でセット品と考える。16は完形品で、大きさは装着時幅 0.68～0.65㎝、縦 4.12㎝、横 2.2㎝、厚さは 0.26㎝である。形状は「8」の字で上部に紐通しの直径 0.34 × 0.32㎝の穴がある。

18～21は直刀鞘金具である。18は装着時幅 0.59㎝、縦 3.66㎝、横 2.21㎝、厚さ 0.37㎝、断面は四角形で裏面には木質が残されている。19は外面が横方向の木質、内面が縦方向の木質が残る。19・21は断面がかまぼこ形であるが本来は長方形である。20は表裏面に木質を残す。




第 17 図　七ツ石 3 号墳石室出土金属製品実測図（1）




第 18 図　七ツ石 3 号墳石室出土金属製品実測図（2）

22 は直刀の鞘金具である。装着時幅 1.8 ～ 1.9cm、縦 2.9cm、横 3.1cm、幅 1.8cm、板の厚さは 0.4cmである。形状は下端が尖っていて横幅は上端は一番広くなっている

23 は直刀の鞘尻である。長 4.2cm、幅 2.6cm、横 1.7cm、鉄板は厚さ 0.18 ～ 0.21cmで、内部に木質が残るが鞘尻金具の半分まで鞘が納められていたことが良く観察できる。

24 ～ 27 は弓飾鋲（両頭鉄製品）である。

28 は鎌である。古墳副葬品に武器、装身具が納められるのは普通であるが、農具が納められたのは非常に珍しい事例である。

29 ～ 95 は鉄鏃である。実測出来たのは 66 点である。

29 ～ 35・37・38・40 は片刃の鉄鏃で刃は断面二等辺三角形である。

40 は片刃が他の資料より長いものである。

41 は両刃で刃長は推定 3.2cm、刃の断面形は菱形である。

42 ～ 50 は刃が両刃であり、断面形は三角形である。先端の刃長が 1 cm以下であり、鉄鏃の刃が退化した究極の形態である。刃を研ぎ刃先が減ったものである。

51 ～ 63 は関部分のある破片である。関の部分から下に木質、繊維による巻いた痕跡がある。

64 ～ 75 は鉄鏃軸頸部分である。軸断面は長方形である。

29 ～ 34、42 ～ 45、51 ～ 63、76 ～ 95 は基部差し込み部分で木質が残り、その他軸部分に繊維を螺旋状に巻き込んだ状況を見ることが出来る。

96 は鉄片である。

1 ～ 8・15 の銅の合計重量は 77.8 g である。9 ～ 14・16 ～ 95 までの重量の合計は 1,044g である。その他、実測出来なかった鉄製品破片は、2.03g を測り、鉄の合計は 1,046g である。銅と鉄の合計で 1,123g である。

**第 1 表　七ツ石 3 号墳　土器観察表**

（ ）: 推定　[ ]: 遺存

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 器種 | 出土位置 | 残存 | 法量　単位 cm | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 16 | 1 | 須恵器 | 提瓶 | 3 墳№ 29 | ほぼ完形 | 8.3 | 16.9 | 21.5 | 緻密 | 良好 | 灰 | |
| 16 | 2 | 石製品 | 蓋石 | 3 墳№ 29 | 完形 | — | — | — | — | — | — | 縦 6.4・横 3.8・厚 3.5、軽石 |
| 16 | 3 | 須恵器 | 𤭯 | 3 墳№ 30 | 一部欠損 | 10.0 | 15.4 | 10.2 | 白色砂粒含有 | 良好 | 灰 | |
| 16 | 4 | 土師器 | 坏 | 3 墳前庭 | ほぼ完形 | 12.5 | 10.7 | 4.7 | 白色砂粒含有 | 良好 | にぶい黄橙 | |
| 16 | 5 | 須恵器 | 大甕 | 3 墳覆土 | 口縁部破片 | (24.0) | — | [5.1] | 白色砂粒含有 | 良好 | オリーブ黒 | |
| 16 | 6 | 須恵器 | 大甕 | 3 墳覆土 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 | 良好 | 灰 | |

**第 2 表　七ツ石 3 号墳　金環観察表**

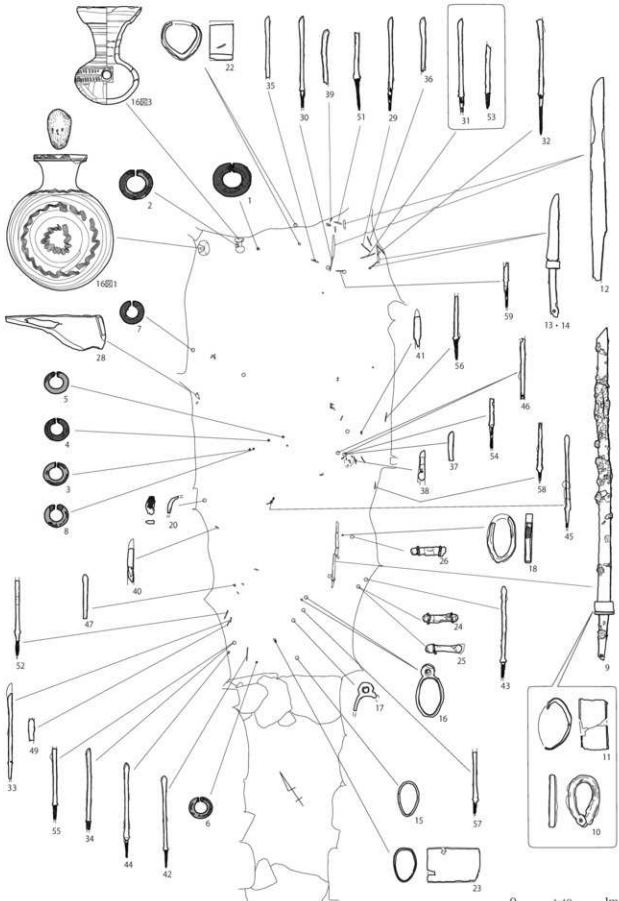
| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 法量　単位 mm | | | | | 重さ g | 地金 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 外径縦 | 外径横 | 内径縦 | 内径横 | 厚（幅×高） | | | |
| 16 | 1 | 金環 | 完全　緑青の被覆 | 27.26 | 30.71 | 13.1 | 15.83 | 7.58 × 8.18 | 23.05 | 銅 | 金と銅の剥離あり |
| 16 | 2 | 金環 | 完全　緑青の被覆 | 23.54 | 26.58 | 13.26 | 15.55 | 5.65 × 6.58 | 11.92 | 銅 | 表面に亀裂・剥落あり　金は白っぽい色 |
| 16 | 3 | 金環 | 完全　金の残り良 | 18.57 | 19.71 | 9.77 | 10.8 | 4.41 × 7.48 | 8.72 | 銅 | 断面楕円　剥離あり |
| 16 | 4 | 金環 | 完全　金の残り良 | 10.28 | 19.76 | 9.78 | 10.9 | 4.5 × 7.33 | 8.8 | 銅 | 断面楕円 |
| 16 | 5 | 金環 | 完全　金の残り良 | 17.52 | 19.15 | 9.7 | 11.16 | 3.87 × 7.24 | 7.27 | 銅 | 断面楕円 |
| 16 | 6 | 金環 | 完全　金の残り良 | 16.9 | 18.76 | 9.36 | 10.53 | 4.02 × 7.52 | 7.11 | 銅 | 断面楕円 |
| 16 | 7 | 金環 | 完全　金の残り良 | 18.23 | 19.12 | 10.23 | 10.55 | 4.3 × 5.32 | 5.8 | 銅 | 断面楕円　剥離あり　金は白っぽい色 |
| 16 | 8 | 金環 | 完全　金の残り良 | 17.78 | 19.08 | 10.09 | 10.48 | 4.28 × 5.27 | 4.78 | 銅 | 剥離あり　金は白っぽい金色 |

**第 3 表　七ツ石 3 号墳　直刀・刀装飾具観察表**

（ ）: 遺存

| 挿図番号 | 図版番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 cm | 刃長 cm | 刃幅 cm | 刃厚 cm | 茎長 cm | 茎幅 cm | 茎背厚 cm | 茎腹厚 cm | 目釘穴径 cm | 目釘長 cm | 目釘厚 cm | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 9 | 直刀金具 | 刀身～茎 | (70.5) | 60.2 | 2.5 | 0.77 | (10.4) | 2.0 | 0.7 ～ 1.3 | 0.39 ～ 0.26 | 0.41 × 0.51 | (1.34) | 0.55 | (506.96) | 刀身は錆・割れ・剥離が著しい　切先は直線 |
| 17 | 12 | 刀 | 刀身～茎 | (32.3) | 24.3 | 2.3 | 0.96 | (8.0) | 2.15 ～ 1.3 | 0.96 ～ 0.31 | 0.39 ～ 0.2 | — | — | — | (129.09) | 刀身は錆・割れ・剥離が著しい |
| 17 | 13 | 小刀 | 刀身～茎 | (19.6) | 10.1 | 1.55 | 0.55 | (9.2) | 1.43 ～ 1.19 | 0.67 ～ 0.37 | 0.46 ～ 0.29 | 0.43 × 0.53 | 1.86 | 0.45 | 49.96 | 刀身は剥離が進み痩せる　柄の側面には木質痕あり |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 装着時幅 cm | 全長 cm | 厚 cm | 断面形 | 外径 cm | | | 内径 cm | | 吊り輪外径 cm | | 吊り輪内径 cm | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 形 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | 横×縦 | | |
| 17 | 16 | 吊金具 | 完形 | 0.68 ～ 0.65 | (4.12) | 0.26 | かまぼこ形 | 卵形 | 2.22 | 3.32 | 1.7 | 2.86 | 1.05 | 0.8 | 0.34 × 0.32 | 4.25 | 鉄製で錆進行　内面に縦方向の木質痕（鞘との間の詰め物痕跡か？） |
| 17 | 17 | 吊金具 | 1/3 残存 | 0.66 | (2.06) | 0.21 | かまぼこ形 | 卵形 | — | — | — | — | 1.01 | 0.71 | 0.38 × 0.35 | 1.86 | 鉄製で錆進行 |




第 19 図　七ツ石 3 号墳石室遺物出土状況詳細図

( ) : 遺存

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 装着時幅 cm | 装着時長 cm | 厚 cm | 膣の断面形 | 外径 cm 形 | 外径 cm 横 | 外径 cm 縦 | 内径 cm 横 | 内径 cm 縦 | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 10 | 鍔？ | 完形 | 0.47 | 4.1 | 0.47 | かまぼこ形 | 卵形 | 2.49 | 4.1 | 1.32 | 2.73 | 9.3 | 直刀９の装着品　出土状態から鍔部分にあたる 鉄製で錆進行 |
| 17 | 11 | 鞘口金具（はばき） | 1/2残存 | 2.2 | 4.1 | 0.14 | — | 卵形 | — | 4.1 | — | — | 3.99 | 直刀９の装着品。出土状態から鞘口の金具にあたる鉄製で錆進行 |
| 17 | 14 | 柄口金具 | 4/5残存 | (1.35) | (2.2) | 0.25～0.3 | — | 楕円形 | 2.05 | (2.2) | 1.45 | 1.75 | — | 小刀 13 の装着品　出土状態から柄口の金具　鉄製で錆進行　内面に柄の木質あり　鉄輪の接合で重なりあり |
| 17 | 15 | 直刀鞘飾金具 | 完形 | 0.16～0.18 | 2.78 | 0.12～0.14 | 四角 | 卵形 | 1.67 | 2.78 | 1.36 | 2.44 | 0.35 | 銅地金で鍍金　外及び内に金残存 |
| 17 | 18 | 直刀鞘金具 | 4/5残存 | (0.59) | (3.66) | 0.37 | 四角 | 卵形 | 2.21 | — | 1.43 | — | 2.9 | 鉄製で錆が進行し痩せつつある |
| 17 | 19 | 直刀鞘金具 | 1/3残存 | 0.7～0.72 | (2.8) | 0.25 | かまぼこ形 | 卵形 | — | — | — | — | 1.0 | 鉄製で錆進行　内面に縦方向の木質痕（鞘との間の詰め物痕跡か？） |
| 17 | 20 | 直刀鞘金具 | 1/5残存 | (0.7) | (1.42) | 0.27 | 四角 | 卵形 | — | — | — | — | 0.4 | 鉄製で錆進行　内外面に横方向の木質痕 |
| 17 | 21 | 直刀鞘金具 | 1/4残存 | 0.7～0.9 | (2.13) | 0.24 | 四角 | 卵形 | — | — | — | — | 1.3 | 鉄製で錆進行 |
| 17 | 22 | 直刀鞘金具 | 4/5残存 | 1.8～1.9 | (2.9) | 0.4 | 四角 | 楕円形 | 3.1 | — | 2.5 | — | 10.63 | 鉄製で錆進行　内面に横方向の木質痕 |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 長 cm | 幅 cm | 厚 cm | 口径cm 形 | 口径cm 横 | 口径cm 縦 | 尻径cm 横 | 尻径cm 縦 | 底板厚み cm | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 23 | 鞘尻（石突） | 4/5残存 | 4.2 | 2.6 | 0.18～0.21 | 卵形 | 1.7 | 2.6 | 1.5 | 2.4 | — | 14.17 | 鉄製で錆進行　外面剥離が目立つ表面に１点銅錆あり　尻は卵形に切った鉄板を接合 |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 mm | 筒長 mm | 筒径 mm | 筒厚 mm | 左花弁 花弁数 | 左花弁 縦×横 | 右花弁 花弁数 | 右花弁 縦×横 | 左鋲頭 縦×横 | 左鋲頭 鋲高 | 右鋲頭 縦×横 | 右鋲頭 鋲高 | 鋲の軸長 mm | 重さ g |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 24 | 弓飾鋲 | 腐食強い、筒金及び鋲密着 | 28.0 | 19.97 | 6.92 | 0.76 | 4 | 8.46 × 9.67 | 3? | 8.27 × 9.83 | 5.72 × 5.77 | 5.05 | 5.82 × 6.15 | 5.31 | 17.76 | 2.96 |
| 17 | 25 | 弓飾鋲 | 腐食あり、筒金及び鋲密着 | 31.28 | (17.05) | 5.8 | 0.72 | 2 | 8.15 × (6.83) | — | — | 6.54 × 5.67 | 6.29 | — | — | 22.18 ? | 1.84 |
| 17 | 26 | 弓飾鋲 | 腐食あり、筒金及び鋲密着 | 27.9 | 18.18 | 6.43 | 0.91 | 4 ? | 6.62 × 7.62 | 3 | 9.72 × 7.33 | 5.91 × 4.97 | 8.56 | 6.96 × 6.66 | 6.96 | 17.38 | 2.18 |
| 17 | 27 | 弓飾鋲 | 腐食強い、筒金及び鋲密着 | 29.0 | — | — | 0.85 | — | — | — | — | — | — | — | 6.87 | 18.24? | 1.44 |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 cm | 刃長 cm | 刃幅 cm | 刃厚 cm | 折り曲げ高 | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 28 | 鎌 | 完全 | 7.95 | 6.5 | 0.43～2.63 | 0.54 | 0.98 | 20.9 | 鉄製で錆進行　刃は片面研ぎで使用が激しく後退 |

## 第４表　七ツ石３号墳　鉄鏃観察表

( ) : 遺存

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 cm | 刃部 形状 | 刃部 刃部長 cm | 刃部 幅 mm | 刃部 厚み mm | 頸部 頸部長 cm | 頸部 縦×横 mm | 茎部 茎部長 cm | 茎部 縦×横 mm | 茎部 径 mm | 茎部 厚み調整 | 茎部の留め 形状 | 茎部の留め 縦×横 mm | 茎部の留め 幅 高さ mm | 重さ g | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 29 | 長頸片刃 | 刃～茎部 | (14.85) | 片刃片研ぎ | 1.9 | 8.0 | 3.83 | 9.5 | 4.12 × 5.5 | 3.45 | 3.7 × 5.0 | 3.2 × 3.72 | 有 | 突起 | 4.42 × 8.0 | 1.8 × 1.0 | 10.8 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は木質の繊維痕、その下の幅 3㎜の紐の巻きつけがある　茎の留めには方向をかえて巻きつけられる |
| 18 | 30 | 長頸片刃 | 刃～茎部 | (14.5) | 片刃両面研ぎ | 1.8 | 7.5 | 4.18 | 9.5 | 3.94 × 5.85 | (3.2) | 3.5 × 4.5 | 3.53 × 3.07 | 有 | 突起 | 4.45 × 8.05 | 1.2～2.0 × 1.0 | 9.8 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は厚く木質の繊維痕、その下に幅 3㎜の紐状の巻きつけがある　留めの近くでは木質の上に横に巻きが確認 |
| 18 | 31 | 長頸片刃 | 刃～茎部 | (14.75) | 片刃両面研ぎ | 1.75 | 8.27 | 3.45 | 10.65 | 4.41 × 6.01 | (2.35) | 5.6 × 6.84 | 3.45 × 4.23 | — | 小突起? | 6.38 × 8.95 | 2.0 × 2.0 | 12.1 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は厚く木質の繊維痕 |
| 18 | 32 | 長頸片刃? | 刃～茎部 | (18.35) | 片刃片研ぎ? | (0.95) | 9.5 | 3.88 | 11.2 | 4.38 × 5.66 | 6.2 | 4.86 × 6.52 | 2.74 × 2.49 | — | 突起 | 4.53 × 9.7 | 1.0～2.0 × 1.5 | 13.8 | 刃は不明だが片刃の片研ぎか　茎の表面は木質の繊維痕 |
| 18 | 33 | 長頸片刃 | 刃～茎部 | (13.55) | 片刃両面研ぎ | 1.1 | 7.11 | 3.65 | 10.05 | 3.58 × 6.23 | (2.5) | 2.96 × 5.02 | 2.77 × 3.82 | — | 突起 | 2.97 × 7.1 | 2.8～2.5 × 1.0 | 7.7 | 側面に木質の繊維痕、紐状の巻きつけ痕がある |
| 18 | 34 | 長頸片刃 | 刃～茎部 | (12.85) | 片刃両面研ぎ | 3.15 | 7.44 | 3.49 | 8.5 | 4.61 × 6.36 | (1.2) | 5.12 × 6.2 | 4.15 × 5.27 | — | 突起 | 5.04 × 8.2 | 2.0 × 1.0 | 10.3 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は木質の繊維痕、留めの近くでは木質の上に横に巻きが確認 |
| 18 | 35 | 長頸片刃 | 刃～頸部 | (9.75) | 片刃両面研ぎ | 1.6 | 3.64 | 7.57 | (8.15) | 4.53 × 5.81 | — | — | — | — | — | — | — | 6.5 | 刃は研ぎで後退 |
| 18 | 36 | 長頸片刃 | 刃～頸部 | (8.65) | 片刃両面研ぎ | 3.2 | 9.02 | 4.13 | (5.45) | 5.27 × 6.6 | — | — | — | — | — | — | — | 7.7 | 刃は研ぎで後退 |
| 18 | 37 | 長頸片刃 | 刃～頸部 | (4.7) | 片刃両面研ぎ | 2.2 | 8.44 | 3.28 | (2.5) | (3.9) × (8.0) | — | — | — | — | — | — | — | 2.3 | 刃は研ぎで後退 |
| 18 | 38 | 長頸片刃 | 刃部 | (4.7) | 片刃両面研ぎ | (4.7) | 11.36 | 4.2 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 2.6 | |
| 18 | 39 | 長頸片刃 | 刃～頸部 | (8.7) | 片刃両面研ぎ | 1.7 | 9.55 | 5.08 | (7.0) | 4.49 × 7.29 | — | — | — | — | — | — | — | 7.6 | |
| 18 | 40 | 長頸片刃 | 刃～頸部 | (5.4) | 片刃両面研ぎ | (3.35) | 9.41 | 3.81 | (2.05) | 6.67 × 9.43 | — | — | — | — | — | — | — | 4.6 | |
| 18 | 41 | 長頸柳葉 | 刃～頸部 | (4.3) | 断面菱形 | (3.7) | 10.87 | 4.78 | — | — | (0.6) | 3 × 8 | — | — | — | — | — | 1.5 | |
| 18 | 42 | 長頸三角形 | 刃～茎部 | 14.45 | 断面三角形 | 1.3 | 9.04 | 3.09 | 10.4 | 3.67 × 5.57 | 2.75 | 3.93 × 5.71 | 2.91 × 2.63 | 有 | 突起 | 3.53 × 8.31 | 2.0 × 1.0 | 12.2 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は幅２～3㎜の紐状の巻きつけがある |
| 18 | 43 | 長頸三角形 | 刃～茎部 | (14.35) | 断面三角形 | 1.15 | 7.98 | 2.82 | 10.9 | 3.91 × 7.29 | (2.3) | 3.66 × 4.84 | 3.96 × 4.84 | 有 | 突起 | 4.27 × 11.56 | 2.0 × 2.0 | 10.7 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は幅 3㎜の紐状の巻きつけがある |
| 18 | 44 | 長頸三角形 | 刃～茎部 | (15) | 断面三角形 | 1.4 | 7.93 | 1.85 | 10.6 | 3.56 × 6.4 | 3.0 | 3.97 × 7.09 | 2.74 × 2.65 | 有 | 突起 | 4.39 × 9.70 | 2.2 × 1.5 | 8.5 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は幅 1.84～2.53㎜の紐状の巻きつけがある |
| 18 | 45 | 長頸三角形 | 刃～茎部 | (14.6) | 断面三角形 | 1.4 | 7.2 | 2.29 | 10.5 | 4.79 × 6.31 | (2.7) | 4.0 × 5.5 | 3.01 × 3.64 | 有 | 突起 | 5.34 × 9.56 | 2.0 × 2.0 | 10.8 | 刃は研ぎで後退　茎の表面は紐状の巻きつけがある |
| 18 | 46 | 長頸不明? | 刃～茎部 | (9.55) | 不明 | (0.6) | — | — | 8.25 | 3.5 × 6.0 | (0.7) | (3.0) × (6.0) | — | — | 無 | — | — | 18.1 | 茎の表面は紐状の巻きつけがある |
| 18 | 47 | 長頸三角形 | 刃～頸部 | (7.0) | 断面三角形 | 1.3 | 7.85 | 2.65 | (5.7) | 3.6 × 6.28 | — | — | — | — | — | — | — | 4.1 | 刃は研ぎで後退 |
| 18 | 48 | 長頸三角形 | 刃～頸部 | (3.5) | 断面三角形 | 0.9 | 7.94 | 2.24 | (2.6) | 2.92 × 6.9 | — | — | — | — | — | — | — | 2.3 | 刃は研ぎで後退 |
| 18 | 49 | 長頸三角形 | 刃～頸部 | (3.5) | 断面菱形 | (2.4) | 8.71 | 2.58 | (1.1) | 2.73 × 7.5 | — | — | — | — | — | — | — | 2.0 | |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 ㎝ | 刃部 形状 | 刃部長 ㎝ | 幅 ㎜ | 厚み ㎜ | 頸部 頸部長 ㎝ | 縦×横 ㎜ | 茎部 茎部長 ㎝ | 縦×横 ㎜ | 径 ㎜ | 厚み調整 | 茎部の留め 形状 | 縦×横 ㎜ | 幅 高さ ㎜ | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 50 | 長頸三角形 | 刃～頸部 | (1.95) | 断面三角形 | (0.8) | 8.2 | 2.59 | 1.15 | 2.04×6.58 | — | — | — | — | — | — | — | 1.1 | |
| 18 | 51 | 長頸? | 頸～茎部 | (12.2) | 不明 | (12.2) | — | — | (7.25) | 3.83×6.50 | 4.95 | 6.36×7.55 | 1.44×1.55 | 有 | 突起 | 5.38×10.57 | 3.0×2.0 | 9.0 | 茎の表面は厚く木質の繊維痕、その下に紐状の巻きつけがある　留めの近くでは木質の上に紐の巻きが確認 |
| 18 | 52 | 長頸? | 頸～茎部 | (11.8) | 不明 | — | — | — | (8.05) | 3.65×5.69 | (3.75) | 4.13×6.14 | 2.92×3.33 | 有 | 突起 | 3.91×8.91 | 2.0×1.5 | 10.1 | 茎の表面は厚く木質の繊維痕、その下に幅3㎜の紐状の巻きつけがある |
| 18 | 53 | 長頸? | 頸～茎部 | (10.5) | 不明 | — | — | — | (7.75) | 4.35×6.6 | (2.75) | 4.63×6.73 | 3.41×5.17 | — | 突起 | 3.79×7.53 | 1.5×2.0 | 7.2 | 茎の表面に木質の繊維痕、突起近くでは巻きつけがある |
| 18 | 54 | 長頸? | 頸～茎部 | (7.9) | 不明 | — | — | — | (4.35) | 4.0×6.09 | (3.55) | 4.4×6.2 | 2.9×3.0 | 有 | 突起 | 4.17×10.0 | 2.0×1.0 | 3.2 | 茎の表面は幅3～3.5㎜の紐状の巻きつけがある |
| 18 | 55 | 長頸? | 頸～茎部 | (11.25) | 不明 | — | — | — | (8.95) | 4.57×6.47 | (2.3) | 3.48×5.84 | 3.0×3.68 | 有 | 突起 | 3.07×8.55 | 2.5×1 | 9.4 | 茎の表面は木質痕と紐状の巻きつけがある |
| 18 | 56 | 長頸? | 頸～茎部 | (10.05) | 不明 | — | — | — | (6.8) | 4.0×5.6 | (3.25) | 5.25×7.84 | 3.72×4.19 | 有 | 突起 | 5.25×7.84 | 2.0×1.5～2.0 | 7.2 | 茎の表面は木質痕　その下に紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 57 | 長頸? | 頸～茎部 | (9.8) | 不明 | — | — | — | (7.6) | 3.79×5.71 | (2.2) | 3.63×6.0 | 3.61×3.61 | 有 | 突起 | 4.45×10.39 | 2.0×1.5 | 7.8 | 茎の表面は紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 58 | 長頸? | 頸～茎部 | (9.1) | 不明 | — | — | — | (7.4) | 4.0×6.54 | (1.8) | 4.26×6.1 | 3.69×2.6 | 有 | 突起 | 5.47×8.87 | 2.0×1.05～2.0 | 6.6 | 茎の表面は木質痕　その下に紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 59 | 長頸? | 頸～茎部 | (7.1) | 不明 | — | — | — | (3.0) | 4.0×7.0 | (4.1) | 4.0×5.5 | 2.73×2.99 | 有 | 突起 | 4.76×8.48 | 1.0～1.2×1.0 | 4.0 | 茎の表面は木質痕　その下に紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 60 | 長頸? | 頸～茎部 | (5.5) | 不明 | — | — | — | (2.4) | 3.14×7.36 | (3.1) | 4.0×5.5 | 3.26×4.95 | — | — | — | — | 2.5 | |
| 18 | 61 | 長頸? | 頸～茎部 | (3.01) | 不明 | — | — | — | (0.8) | 2.11×6.31 | (2.3) | 3.73×6.5 | 3.46×3.73 | — | 突起 | 2.88×5.93 | 1.0～2.0×1.5 | 1.5 | 茎の表面は木質痕 |
| 18 | 62 | 長頸? | 頸～茎部 | (5.5) | 不明 | — | — | — | (2.4) | 4.6×6.88 | (3.1) | 4.01×5.81 | 3.79×4.11 | 有 | 突起 | 4×8.77 | 1.5～2.0×1.0 | 3.7 | 茎の表面は紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 63 | 長頸? | 頸～茎部 | (4.65) | 不明 | — | — | — | (4.65) | 4.4×8.0 | (0.55) | 4.0×7.0 | 4.22×6.55 | — | 突起 | 4.0×10.1 | — | 4.2 | 突起近くに紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 64 | 長頸? | 頸部 | (5.05) | 不明 | — | — | — | (5.05) | 3.5×5.5 | — | — | — | — | — | — | — | 2.3 | |
| 18 | 65 | 長頸? | 頸部 | (5.05) | 不明 | — | — | — | (5.05) | 5.0×6.0 | — | — | — | — | — | — | — | 3.6 | |
| 18 | 66 | 長頸? | 頸部 | (3.25) | 不明 | — | — | — | (3.25) | 3.2×6.22 | — | — | — | — | — | — | — | 1.9 | |
| 18 | 67 | 長頸? | 頸部 | (5.35) | 不明 | — | — | — | (5.35) | 4.5×6.5 | — | — | — | — | — | — | — | 2.2 | |
| 18 | 68 | 長頸? | 頸部 | (9.6) | 不明 | — | — | — | (9.6) | 4.0×7.0 | — | — | — | — | — | — | — | 3.5 | |
| 18 | 69 | 長頸? | 頸部 | (2.9) | 不明 | — | — | — | (2.9) | 3.95×6.27 | — | — | — | — | — | — | — | 2.3 | |
| 18 | 70 | 長頸? | 頸部 | (2.1) | 不明 | — | — | — | (2.1) | 3.8×7.05 | — | — | — | — | — | — | — | 1.7 | |
| 18 | 71 | 長頸? | 頸部 | (2.7) | 不明 | — | — | — | (2.7) | 4.37×5.96 | — | — | — | — | — | — | — | 2.1 | |
| 18 | 72 | 長頸? | 頸部 | (2.3) | 不明 | — | — | — | (2.3) | 2.7×7.8 | — | — | — | — | — | — | — | 0.6 | |
| 18 | 73 | 長頸? | 頸部 | (2.9) | 不明 | — | — | — | (2.9) | 4.0×6.34 | — | — | — | — | — | — | — | 1.7 | |
| 18 | 74 | 長頸? | 頸部 | (2.9) | 不明 | — | — | — | (2.9) | 3.8×6.0 | — | — | — | — | — | — | — | 0.8 | |
| 18 | 75 | 長頸? | 頸部 | (2.05) | 不明 | — | — | — | (2.05) | 4.0×6.54 | — | — | — | — | — | — | — | 0.6 | |
| 18 | 76 | ?鏃 | 茎部 | (1.5) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.5) | — | 2.88×3.68 | 有 | — | — | — | 0.3 | 茎の表面は紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 77 | ?鏃 | 茎部 | (1.73) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.73) | — | 4.0×4.0 | 有 | — | — | — | 0.2 | |
| 18 | 78 | ?鏃 | 茎部 | (3.65) | 不明 | — | — | — | — | — | (3.65) | 4.5×7.5 | 4.34×4.42 | 有 | — | — | — | 2.1 | 茎の表面は紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 79 | ?鏃 | 茎部 | (3.0) | 不明 | — | — | — | — | — | (3.0) | 3.56×5.0 | — | 有 | — | — | — | 1.1 | 茎の表面は紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 80 | ?鏃 | 茎部 | (3.3) | 不明 | — | — | — | — | — | (3.3) | — | 4.61×4.04 | 有 | — | — | — | 1.0 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 81 | ?鏃 | 茎部 | (2.35) | 不明 | — | — | — | — | — | (2.35) | 4.3×6.15 | 2.79×3.33 | 有 | — | — | — | 1.0 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 82 | ?鏃 | 茎部 | (2.2) | 不明 | — | — | — | — | — | (2.2) | — | 3.44×3.32 | 有 | — | — | — | 0.3 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 83 | ?鏃 | 茎部 | (1.35) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.35) | — | 3.37×3.85 | 有 | — | — | — | 0.3 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 84 | ?鏃 | 茎部 | (1.65) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.65) | — | 3.77×4.04 | 有 | — | — | — | 0.5 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 85 | ?鏃 | 茎部 | (2.4) | 不明 | — | — | — | — | — | (2.4) | — | 4.0×3.87 | 有 | — | — | — | 0.4 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 86 | ?鏃 | 茎部 | (1.9) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.9) | — | 3.23×3.26 | 有 | — | — | — | 0.2 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 87 | ?鏃 | 茎部 | (1.45) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.45) | — | 2.75×2.59 | 有 | — | — | — | 0.1 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 88 | ?鏃 | 茎部 | (1.5) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.5) | — | 2.86×3.17 | 有 | — | — | — | 0.3 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 89 | ?鏃 | 茎部 | (1.0) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.0) | — | 3.14×3.38 | 有 | — | — | — | 0.2 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 90 | ?鏃 | 茎部 | (1.6) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.6) | — | 2.95×3.15 | 有 | — | — | — | 0.1 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 91 | ?鏃 | 茎部 | (4.45) | 不明 | — | — | — | — | — | (4.45) | — | 4.35×4.75 | 有 | — | — | — | 1.1 | 茎の紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 92 | ?鏃 | 茎部 | (2.99) | 不明 | — | — | — | — | — | (2.99) | — | 3.0×3.4 | — | — | — | — | 0.5 | 茎の表面は木質痕 |
| 18 | 93 | ?鏃 | 茎部 | (3.5) | 不明 | — | — | — | — | — | (3.5) | — | 3.65×3.9 | 有 | — | — | — | 0.8 | 茎の表面は木質痕　紐状の巻きつけが見える |
| 18 | 94 | ?鏃 | 茎部 | (1.65) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.65) | — | 2.18×2.68 | — | — | — | — | 0.1 | 茎の表面は木質痕 |
| 18 | 95 | ?鏃 | 茎部 | (1.3) | 不明 | — | — | — | — | — | (1.3) | — | 3.32×3.90 | — | — | — | — | 0.2 | 茎の表面は木質痕 |
| 18 | 96 | 鉄片 | | (2.95) | 不明 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0.9 | 茎の表面は木質痕 |

漆土玉（第 20 図）

漆土玉は調査段階では発見できなかった。

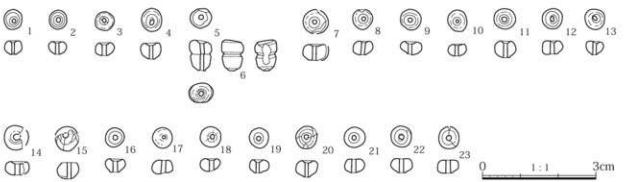
古墳玄室床面の調査時の土を土嚢袋に入れ事務所に持ち帰り、篩作業中に 1 つの土嚢袋でから発見されたものであり、一カ所からまとまって出土していたものと考える。

臼玉状の平坦な玉で、1 つ目が発見された際、触っただけで割れてしまったが明らかに玉製品であり、慎重に篩作業を行った結果合計 23 点の漆土玉が発見された。

5・6 は連なった状態の資料で、残りはすべて単品である。割れた資料の断面写真から粘土を焼いていることが観察でき、表面には黒い塗膜が施されている。

これが漆である。

漆土玉の計測平均は縦 5.6㎜、厚さ 4.0㎜、孔径 1.2㎜である。




第 20 図　七ツ石 3 号墳出土漆土玉実測図

第 5 表　七ツ石 3 号墳　漆土玉観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 器種 | 残存 | 出土位置 | 重量 g | 寸法　単位 ㎜<br>縦 × 横 × 厚 × 孔径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20 | 1 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.13 | 6.04 × 5.78 × 3.80 × 1.26 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 2 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.09 | 5.65 × 5.53 × 3.41 × 1.19 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 3 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.12 | 5.83 × 5.62 × 3.56 × 1.37 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 4 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.14 | 5.87 × 6.62 × 4.19 × 1.31 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 5<br>6 | 土製品 | 漆玉 | 二つ連結 | 3 墳玄室 | 0.22 | — × — × 7.84 × —<br>上 3.53 × 5.43 × 3.44 × 1.23<br>下 4.31 × 5.03 × 4.40 × 1.22 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 7 | 土製品 | 漆玉 | 一部欠損 | 3 墳玄室 | (0.12) | 6.26 × 6.04 × 4.05 × 1.14 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 8 | 土製品 | 漆玉 | ほぼ完形 | 3 墳玄室 | (0.11) | 5.46 × 5.35 × 3.82 × 1.04 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 9 | 土製品 | 漆玉 | 一部欠損 | 3 墳玄室 | (0.08) | 5.49 × 5.16 × 3.70 × 1.22 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 10 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.08 | 5.58 × 5.04 × 3.37 × 0.95 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 11 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.11 | 5.36 × 5.57 × 4.02 × 1.35 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 12 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.10 | 5.66 × 5.38 × 3.53 × 1.11 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 13 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.10 | 5.77 × 5.74 × 3.56 × 1.24 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 14 | 土製品 | 漆玉 | 2/3 残存 | 3 墳玄室 | (0.11) | 6.33 × (5.11) × 3.93 × 1.31 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り・4つに分割一接合 |
| 20 | 15 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.09 | 4.35 × 5.07 × 4.76 × 1.13 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り・3つに分割一接合 |
| 20 | 16 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.10 | 5.45 × 5.12 × 3.43 × 1.22 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 17 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.10 | 5.61 × 5.49 × 3.83 × 1.01 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 18 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.09 | 5.45 × 5.52 × 3.36 × 1.14 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 19 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.09 | 5.21 × 5.17 × 3.45 × 1.15 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 20 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.11 | 6.17 × 5.73 × 4.24 × 1.36 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り・3つに分割一接合 |
| 20 | 21 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.11 | 5.34 × 5.70 × 3.63 × 1.29 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 22 | 土製品 | 漆玉 | 完形 | 3 墳玄室 | 0.10 | 5.68 × 5.75 × 3.64 × 1.20 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り |
| 20 | 23 | 土製品 | 漆玉 | 一部欠損 | 3 墳玄室 | (0.09) | 5.52 × 5.61 × 3.37 × 1.32 | 色調：表面黒・孔一方向・一個作り・3つに分割一接合 |

**七ツ石４号墳**（第 21 ～ 26 図）

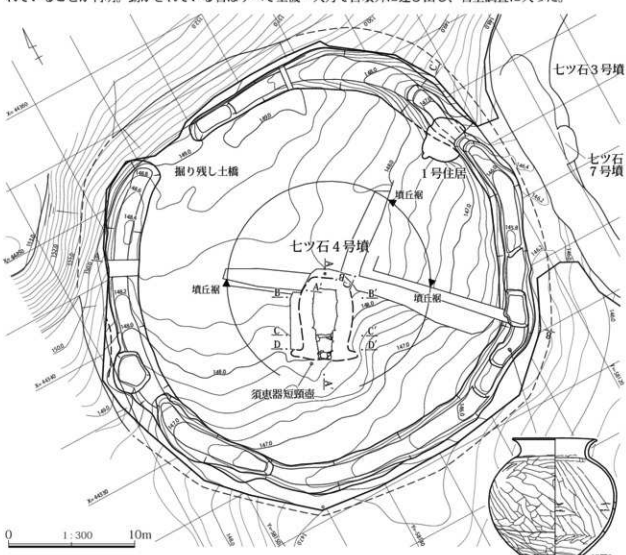
本古墳は荒砥 70 号墳の北西で荒砥 78 号墳が南西側、荒砥 80 号墳が北西、七ツ石３号墳が東に隣接している。七ツ石３号墳との間は 1.5 m と近接した形であり、表土の位置まで復元した場合、ほぼ接していたか、切りあい関係があったものと考えられる。

調査前の状況は、周溝のくぼみがはっきりした形で直径 40 m位あり、特に北側立ち上がり、南西側の立ち上がりが明瞭に存在している。この周溝の高さは、北側で 1.4 m、南側 0.6 m存在していた。中央に封土は直径 14 m北側の高さで１m存在し、南東部は下がっており、高さ３mが認められる。南側は若干くぼみが認められ、礫が散見される。盗掘を受けている可能性が高いと思われた。

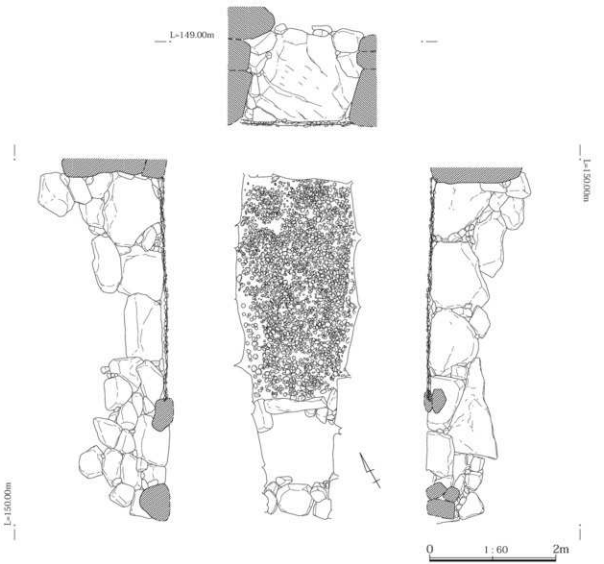
竹林となっており、切り倒された竹が散乱している状況であった。竹の切り株は根が深さ 60 ～ 70㎝の深さまで達しており、竹を抜きながら表土を剝ぐ作業を行った。伐採エリアが古墳周溝外側までが望ましかったが、少し内側になってしまい表土剝ぎエリアで調査を行った。

周溝内、封土内も竹根が多く根がかなり深くまで達していたため重機による調査を行った。周溝内に遺物が存在することを考え、慎重に掘り下げながら調査を実施した。

墳頂部から人力で石室調査を行ったが、頂部からは大量の石片が現れ、その中に大きな石も出てきたが石割りの矢穴が連続している個所が随所に現れているため、石室の天井石など大型石は後世に石屋等に欠かれて持ち去れていることが判明。動かされている石はすべて重機・人力で古墳外に運び出し、石室調査に入った。




第 21 図　七ツ石４号墳実測図




第 22 図　七ツ石 4 号墳石室展開図

4 号墳は円墳で規模は、第一基壇面で南北 30.8 m、東西 30 mである。周溝を含む規模は、南北 35.6 m、東西 33.8 mである。

北側は発掘調査前に周溝があることがわかる 1.6 mの高低差のあるもので、その周溝端は 2.8 m実際の周溝外縁に存在している。本来の周溝を含む規模は南北 38.2 m、東西 37.2 mである。周溝の北西部には溝は全周しないで掘り残しによる土橋が存在する。

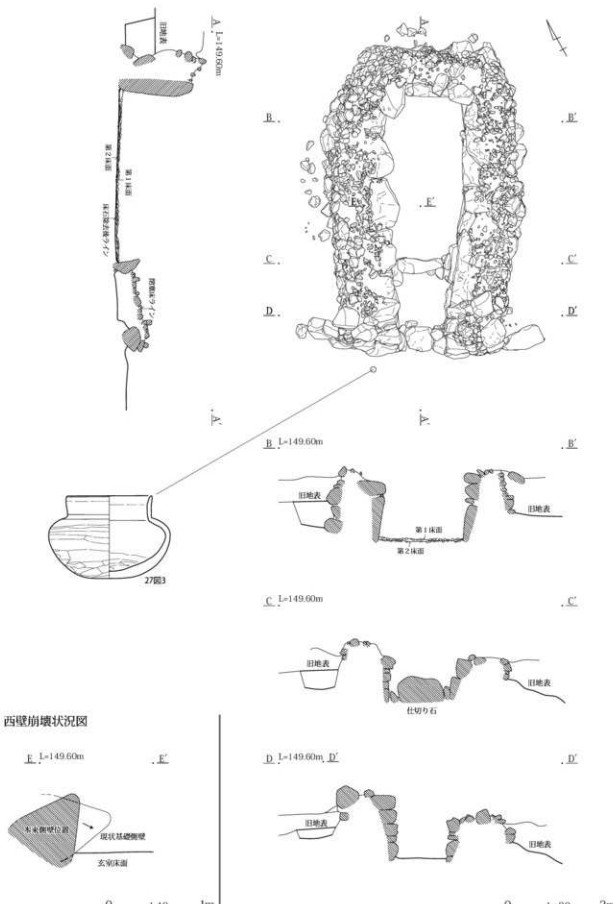
土橋の上面で最狭い幅 3.8 m、最広長は 5.0 mで、周溝の底面との高さの差は東側で 40㎝、西側で 80㎝である。この土橋については、北側に所在する石山から古墳用材の石材を搬入したものと考える。それと同じような土橋は、南側に隣接している荒砥 70 号墳にも北側に土橋の存在がある。

周溝幅は、1.6 m～ 3.4 m、深さは 0.3 m～ 1.0 mである。

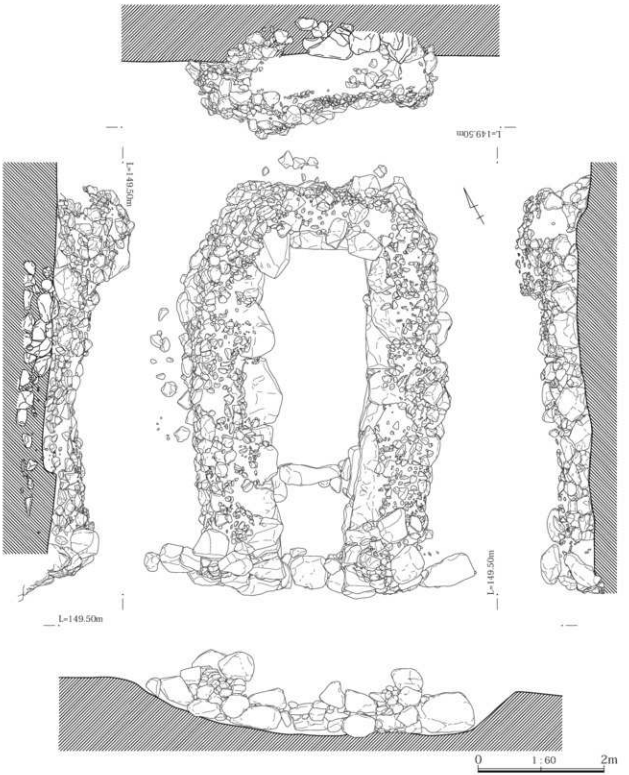
東側周溝内の底面に底部穿孔の土師器甕の完形品が 1 点正位で置かれていた。

**横穴式石室**（第 22・23 図）

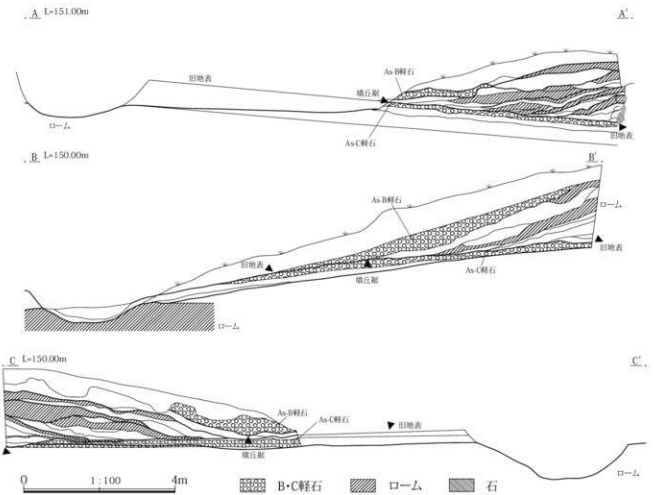
主体部は袖無型横穴式石室である。石室の主軸方位はN―29°―Eである。石室内部の大きさは奥壁から羨門まで 5.4 m、玄室の大きさは長さ 3.52 m、奥壁側幅 1.7 m、中央幅 1.9 m、玄門部 1.35 m、高さは 2.4 m残存している。




第 23 図　七ツ石 4 号墳石室横断面図




第 24 図　七ツ石 4 号墳石室裏込め実測図




第 25 図　七ツ石 4 号墳墳丘土層断面図

奥壁は一枚石で縦 1.5 m、横 1.8 mが設置されているが、その上にもう 1 石をのせていたと思われる。

側壁の東側は大石 2 段までが残存、西壁も大石 2 段が残っている。両側壁とも奥壁寄りは 2 段多く残っている。羨道部側壁は小ぶりな石材となるが東壁で 3 段、西壁で 4 段が積まれており、奥壁に接する左壁の高さは 2.4 mであり、奥壁の高さも 2.4 m以上あったものと思われる。

側壁で特徴的なものとして挙げられるのが、西側壁中央の 1 石が本来設置されていた石室西壁面が内部に傾き西側側壁の崩壊が認められる。この石のズレた角度は 50°以上で、石室内部に傾いている。それに伴う周辺の石積みも内傾が非常に大きくなっている。

西壁の玄室中央部が基礎石から傾き、石室が西側からの強力な力を受けていることが確認された。

この現象は尾崎喜左雄氏が『横穴式古墳の研究』で「赤城山南麓地帯横穴式古墳左壁崩壊石室の研究」として昭和 41 年の段階に発表している。その追加資料となるものと考える。

**羨道部**

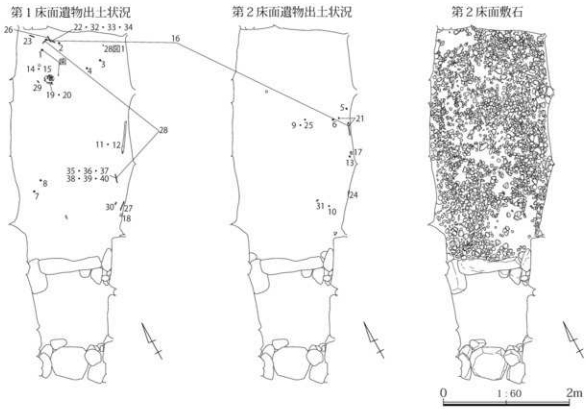
羨道の規模は間仕切石間で南北 1.18 m、玄室仕切石から羨道出口で 1.8 m、東西羨門部で 1.1 m、北側仕切石で 1.3 mである。羨門の冠石はなく、門石は礎石 2 石ずつを残すのみである。

羨門は基部で幅 95㎝、仕切石は中央に大きな 1 石、両側に 1 石ずつ合計 3 石で形成している。

玄門仕切石は、中央大石の両側に 1 石ずつ据え置かれた変則的な形で仕切っている。

羨道部の側壁は東壁で 2 石、西壁で 3 石が認められる。

羨道の敷石はほとんどが外され、閉塞石が地山から付設されていた。敷石は玄門仕切石の南東に 3 石の扁平な石が存在しており、本来はこのような山石により全面敷き詰められていたものと考える。




第 26 図　七ツ石４号墳石室第２床面敷石実測図、第１・２床面遺物出土状況図

羨道部での遺物出土はない。

**前庭部**

前庭部は羨門と一緒に石積が施され、正面は幅 5.4 m、高さ 1.4 m、下面は断面緩い「U」字状に 90㎝上がっており、東面は数石が欠損している。上面から見た場合は両側が墳丘と同じように湾曲している。

前庭の平坦面は台形の広がりを考えられるが竹の根の影響で本来の構築面以下まで攪乱を受けており不明である。羨門近くに多くの礫が掻き出されていたが、その中には須恵器大甕の破片が出土している。完形品の須恵器短頸壺が１点正位で置かれていた。

**墳丘**

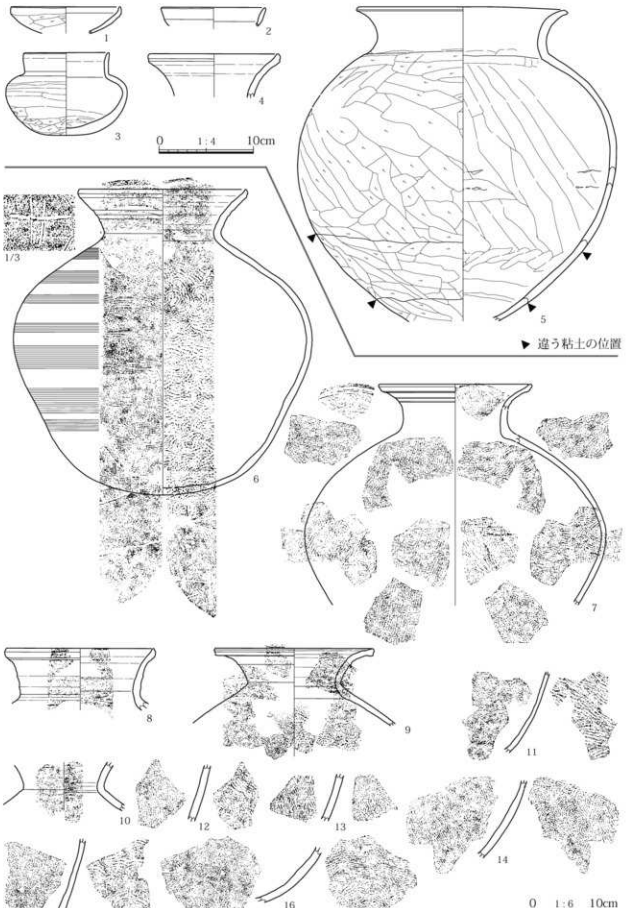
墳丘は、 ローム層・ロームブロックを多く含む層と黒色土層が交互で盛土されており、ローム層により石室裏込め層と合わせて作業面を作っていることがわかる。３号墳の墳丘の盛土はローム層と黒色土が必ず交互に盛土されているのに対し、本墳は交互を正確にあまり意識していないようである。

また、現状の表土での墳丘の有り方は、浅間山Ｂ軽石天仁元年（1108）の軽石がこのエリアに厚く降下堆積している。その為、墳丘において 1108 年に墳丘据は、この辺りまでという予想が可能となり、墳丘は古墳中央に直径 16 mの高さ２～３mの盛土となっている。

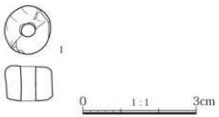
墳丘構築面は旧地表面をそのまま利用している。旧地表に構築面はほとんど整形を加えないで浅間山Ｃ軽石の上にある黒色土を基盤層としている。

墳丘断面地層では浅間Ｃ軽石の含む黒色土並びにその上に堆積した黒色土を構築面は約９°の緩傾斜で南東側に下がっている。

周溝を掘った土で古墳盛土を行っているため、周溝内側のテラス部分が作られ、１段目の基壇を構築したことになり、中央の石室を覆う墳丘で２段築成の古墳となる。



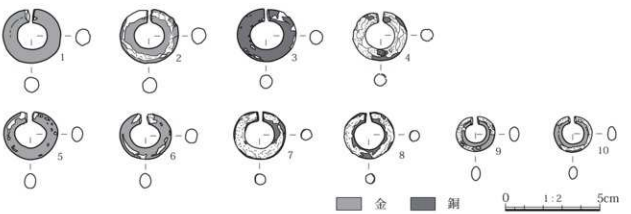

第 27 図　七ツ石 4 号墳出土土器実測図




第 28 図　七ツ石４号墳出土滑石製臼玉実測図

第６表　七ツ石４号墳　滑石製臼玉観察表

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 器種 | 残存 | 出土位置 | 重量 g | 寸法　単位 mm<br>縦 × 横 × 厚 × 孔径 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 1 | 滑石製品 | 臼玉 | 完形 | ４墳 17 | 2.50 | 12.97 × 12.67 × 9.47 × 3.40 | 色調：灰白色・表面穿孔 |




第 29 図　七ツ石４号墳出土金環実測図

**出土遺物**（第 27 ～ 30 図）

**土器**（第 27 図）

４号墳の出土遺物は、石室玄室内出土品と前庭部・周溝内出土品に分けられる。前庭部出土品としては、玄門前西寄りに須恵器短頸壺の完形品が据え置かれていた。その他は前庭部に掻き出された礫と共に須恵器大甕の破片が多数出土した。大甕は３個が接合あるいは図上復元ができる遺物で、その他は破片である。

１・２は玄室内出土の土師器坏破片で図上復元したものである。

３は須恵器短頸壺で口径 8.9㎝、器高 8.8㎝である。口縁部は 2.4㎝、直立しナデ調整、体部上半はヘラミガキ、同下半はヘラケズリ調整である。

４・６～ 16 は須恵器甕・大甕で口縁部の数から大小合わせて７個体が確認できた。

５は土師器甕で底部は欠損しており、底部穿孔土器と考える。口径 21.7㎝、残存高 33.2㎝、最大幅 33.7㎝を測る。ほぼ口縁を上にして据え置かれていた。この土器の特徴は、底部から 5㎝は通常の橙色になる胎土であるが、その上 10㎝間は粘土を変えており、その上は底部と同じ粘土で橙色である。中間に入れられた粘土は密度が粗い土器となって焼け損ないのような質感となっている。このような土器をみるのは非常に珍しく土器の腰部分に位置しており、火に掛けた時に熱伝導を意識した土器と考えたい。

６の大甕の１点は底部から口縁部にかけて接合でき、大きさは口径 26.4㎝、器高 48.4 を測る。口縁部裏面にはヘラ書きで「寸」記号を描いている。口縁部には櫛による波状文が２条、頸から体部下半には幅３㎝、櫛描き横位文が７条平行に描かれている。最大の特徴は、この須恵器大甕製作時に内部にいた「ムカデ」があて目の青海波に１匹分全体が潰されてそのまま焼かれており、圧痕として残されていることである。

須恵器大甕を乾かし、あて具と叩き板で須恵器壁面を叩き締めている。須恵器大甕の成形が終わり、乾燥させて、湿気ている土器内部に潜んでいた「ムカデ」が叩き作業に入り、あて具に押し潰されて内面に圧痕として残

されていた。圧痕は現状で長さ 2.5㎝である。但し、土器は乾燥・焼成すると約 15 ～ 20％縮小するので実際の大きさは長さ 3㎝位の「ムカデ」と考える。(PL.29 参照)

7 ～ 10 は須恵器甕口縁部破片である。7・9 は各部破片から復元実測したものである。

11 ～ 15 は、胴部破片で外面平行叩き、内面は青海波のあて目が施してある。16 は底部付近の破片である。

**石器**（第 28 図）

1 は滑石製臼玉である。大型の臼玉で直径 12.97 × 12.67㎜、厚さ 9.47㎜、孔径は 3.4㎜である。

**金属器**（第 29・30 図）

横穴式石室玄室から出土したものは次の通りである。

金環 10 点、銅製直刀柄鞘飾金具 2 点、直刀柄紐金具 1 点、直刀 2 振り（1 振り破損品）、小刀 1 振り、鍔 1 点、柄口金具・鞘口金具・柄金具各 1 点、鉄鏃 19 点（無頸鏃 2 点・矢先あり 8 点・関あり 8 点）である。

4 号墳の金環の出土状況は、石室北西部に 1 セット、石室北東部に 1 セット、石室東壁寄りに 1 セット、西壁寄りに 1 セットで、これらのセットは 30㎝前後で被葬者が耳飾りを装着していた状況に近いことを想定することが出来る。但し、最後の 2 点は石室東壁の南寄りに 1 点、石室中央やや北寄りで出土している。これが同一被葬者に装着していものと考えると 1.4 m と離れており、被葬者が追葬の際、掃除されたりして葬送時の状況が維持されていないものと考える。

11 は直刀である。柄口金具が装着したままのもので全長は 52.2㎝、刀身は 43.5㎝、棟は 0.66 ～ 0.8㎝、刃幅 E 部が一番太く刃幅 3.2㎝で刃部は内反りであり、ふくら切っ先である。関から柄部は長さ 8.8㎝、幅は関部で 2.15㎝、端部で 1.7㎝、厚さ 0.35 ～ 0.57㎜である。

12 は柄口金具で、装着時幅 0.13㎝、縦 3.12㎝、横 2.1㎝、鉄板の厚さは 0.2 ～ 0.34㎝である。

13・14・15 は銅地金鍍金の刀装具である。13・14 は鞘飾金具である。

13 は幅 0.31㎜の四角い銅線を卵形にしている。大きさは装着時幅 0.31㎜、縦 3.15㎝、横 2.24㎝である。

14 は大きさは装着時幅 0.73 ～ 0.71㎝、縦 3.94㎝、横 2.42㎝、銅板の厚みは 0.21 ～ 0.23㎝である。内側は内部に鴻曲しており、木質が見られる。

15 は柄部紐金具で、直径 0.6㎝の銅管で端部を丸く縁取りしたもので径 1.01 ～ 0.94㎝、残存高 0.56㎝である。

16 は鞘口金具で装着時幅 1.35㎝、縦 2.06㎝、横 1.25 ～ 1.37㎝、鉄板厚 0.14 ～ 0.19㎝で内面には木質が残る。

17 は鍔で縦 4.84㎝、横 3.36㎝、厚さ 0.44 ～ 0.49㎝、孔の大きさは縦 2.29㎝、横 1.39㎝である。

18 は鞘尻で幅 2.7㎝、長 4.49㎝であり、横 1.95㎝、鉄板は厚さ 0.35 ～ 0.4㎝で、内部に木質が残るが鞘尻の半分まで鞘が納められていたことが良く観察できる。

19・20 は装着状況である。

19 は柄金具で装着時幅 0.6㎝、縦 1.55㎝、鉄板の厚さは 0.13 ～ 0.15㎝で内面には木質が残されている。

20 は小刀である。全長は 13.75㎝、棟幅 0.55㎜、刃幅は 1.3 ～ 1.7㎝、刀身は 10.5㎝、刃中心部は研ぎ減りしているのか内反り刃になっている。

21 は刀身が途中で欠損している。残存長は 21.2㎝、刃幅は 2.5㎝、棟幅は 1.1㎜である。

22 ～ 40 は鉄鏃である。

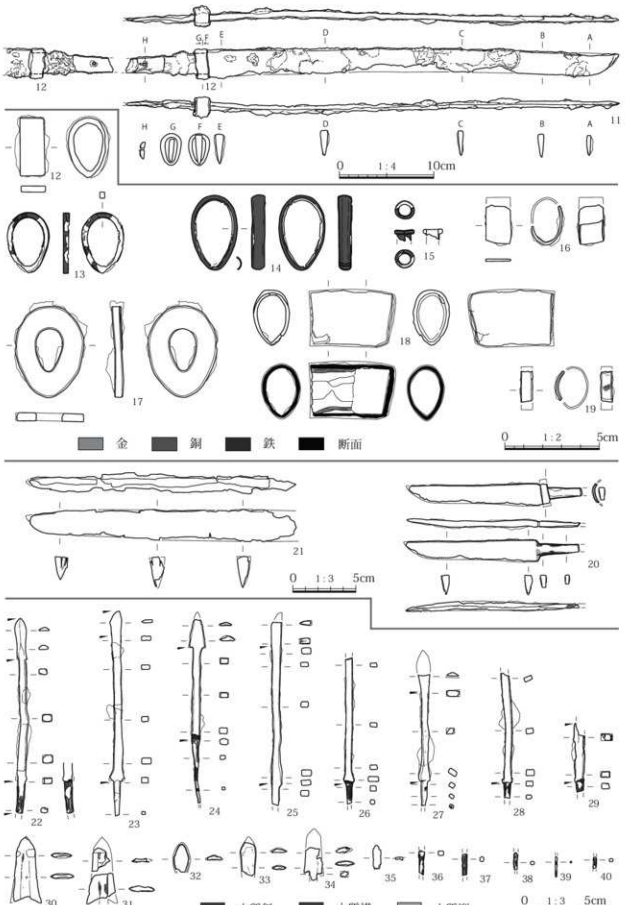
22・27 は長頸柳葉鉄鏃、23・25 は長頸片刃鉄鏃、24 は長頸三角形鏃、23 は先端が研ぎすぎか先端が退化したものか。22 ～ 25・27 は関から刃部が存在する。26・28・29 は刃部が欠損している。

30・31 は無頸鏃でほぼ同一規格であり、縦 5.2㎝、幅は 2.6㎝、厚さ 4 ㎜である。

32 ～ 34 は鉄鏃の刃部分である。34 は返しがある鉄鏃である。

35 は軸部分である。36 ～ 40 は根部分の破片である。

1 ～ 10・13 ～ 15 の銅の重量は 153.3 g である。11・12・16 ～ 40 の鉄重量の合計は 520.9 g である。その他、




第 30 図　七ツ石 4 号墳出土金属製品実測図

実測出来なかった鉄製品破片は、55.32 gを測り、鉄の合計は576.22 gである。銅と鉄の合計で729.5 gである。

※須恵器大甕（第27図6）のムカデは、触覚部分の先端が欠損しており、それ以外はほぼ残されている。左下に足1本が切断され圧痕となっている。ムカデは甕の内面を口縁に向かって進行中、第1打撃で全体をあて具で叩かれ足1本を欠損する。その後、連続して左にずらして第2撃目もムカデ全体をあて具で叩いている。粘土内に埋め込まれもがいた痕跡があるものの脱出することはできず、窯で焼成されている。この脱出を阻んだ内容の一つが乾燥による土器の収縮である。なお、足1本は本体から1.2cm離れた所に圧痕で検出している。

このような虫の圧痕としては、群馬県高崎市中尾遺跡の甕にカミキリムシが残されている例がある。

ムカデの2.5～3cmの幼虫は、5～6月頃に見られる大きさである。ムカデが1年で1度の卵を産む生態であることを前提でみれば、須恵器の大甕土器製作季節は5・6月と考えられる。

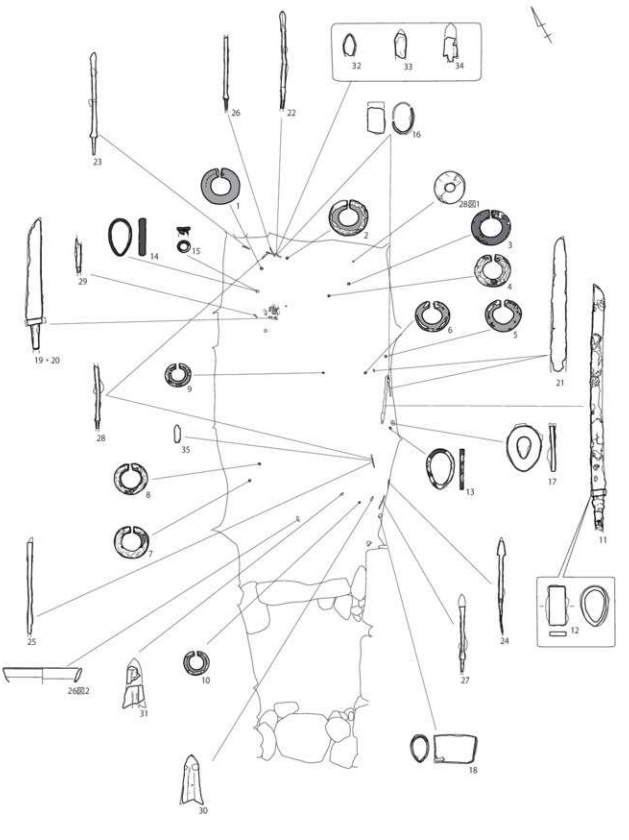
第7表　七ツ石4号墳　土器観察表

（ ）：推定　［ ］：遺存

| 掲図番号 | 番号 | 種類 | 器種 | 出土位置 | 残存 | 法量　単位 cm | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | |
| 27 | 1 | 土師器 | 坏 | 4墳覆土 | 破片 | (11.5) | — | [2.9] | 黒・白色砂粒 | 良好 | にぶい褐 | |
| 27 | 2 | 土師器 | 坏 | 4墳№1 | 破片 | (10.8) | (10.4) | [2.0] | 黒・白色砂粒 | 良好 | 橙 | |
| 27 | 3 | 須恵器 | 坩 | 4墳 | 一部欠損 | 8.9 | — | 8.8 | 黒色砂粒 | 良好 | 灰黄 | 最大径12.8 |
| 27 | 4 | 須恵器 | 甕 | 4墳 | 口縁部破片 | (13.6) | — | [4.5] | φ 2mm白色石粒・白色砂粒 | 緻密 | 暗灰 | |
| 27 | 5 | 土師器 | 甕 | 4墳南東周溝 | 一部欠損 | 21.7 | — | [33.2] | 2種あり φ 3mm白色石粒 | 緻密 | 橙 | 最大径33.7 |
| 27 | 6 | 須恵器 | 甕 | 4墳 | 4/5 | (26.4) | — | 48.4 | 黒・白色砂粒 | 良好 | にぶい黄橙 | 最大径47.4 |
| 27 | 7 | 須恵器 | 甕 | 覆土 | 口縁部破片 | (21.9) | — | — | 黒・白色砂粒 | やや軟 | にぶい黄橙 | 6点復元実測 |
| 27 | 8 | 須恵器 | 甕 | 4墳 | 口縁部破片 | (23.4) | — | [9.8] | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | 緻密 | 暗灰 | |
| 27 | 9 | 須恵器 | 甕 | 覆土 | 口縁部破片 | (25.0) | — | [13.0] | 白色砂粒 | 緻密 | 灰 | 2点復元実測 |
| 27 | 10 | 須恵器 | 甕 | 4墳覆土 | 頸部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 5mm白色石粒 | 緻密 | 黒 | |
| 27 | 11 | 須恵器 | 甕 | 4墳覆土 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 3mm白色石粒 | 緻密 | 灰 | |
| 27 | 12 | 須恵器 | 甕 | 覆土 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | やや軟 | 灰 | |
| 27 | 13 | 須恵器 | 甕 | 4墳覆土 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | 緻密 | 灰 | |
| 27 | 14 | 須恵器 | 甕 | 4墳覆土 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | 緻密 | 灰 | |
| 27 | 15 | 須恵器 | 甕 | 4墳 | 体部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | やや軟 | 灰 | |
| 27 | 16 | 須恵器 | 甕 | 4墳覆土 | 底部破片 | — | — | — | 白色砂粒含有 φ 2mm白色石粒 | 緻密 | 灰 | |

第8表　七ツ石4号墳　金環観察表

| 掲図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 法量　単位 mm | | | | | 重さ g | 地金 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 外径縦 | 外径横 | 内径縦 | 内径横 | 厚み（幅×高） | | | |
| 29 | 1 | 金環 | 完全　金の残り良 | 28.1 | 30.71 | 13.72 | 15.58 | 7.46 × 7.95 | 23.03 | 銅 | 緑青で被覆　表面は滑らかでない　金は白っぽい色 |
| 29 | 2 | 金環 | 完全　金の残り不良 | 28.09 | 31.07 | 13.98 | 16.08 | 7.27 × 8.17 | 21.94 | 銅 | 緑青で覆われ地金までの剥離多い　金は白っぽい色 |
| 29 | 3 | 金環 | 完全　金の残り不良 | 27.98 | 31.3 | 15.1 | 17.4 | 6.85 × 7.14 | 20.56 | 銅 | 表面腐食し膨らむ　剥離あり　金は無い |
| 29 | 4 | 金環 | 完全　金の残り不良 | 25.71 | 28.5 | 14.56 | 16.2 | 6.20 × 6.32 | 12.45 | 銅 | 表面腐食し膨らむ　剥離あり　金は微量 |
| 29 | 5 | 金環 | 完全　金の残り良 | 25.38 | 28.12 | 13.4 | 16.23 | 6.05 × 7.54 | 15.53 | 銅 | 金の残りは良いが表面内部で腐食が進み剥離あり　金は白っぽい色 |
| 29 | 6 | 金環 | 完全　金の残り良 | 24.5 | 27.3 | 13.21 | 15.11 | 6.03 × 7.7 | 15.69 | 銅 | 表面腐食し膨らみと剥離あり　金は白っぽい色 |
| 29 | 7 | 金環 | 完全　金の残り不良 | 25.48 | 27.52 | 14.68 | 15.8 | 5.88 × 5.96 | 12.86 | 銅 | 腐食が著しく金は剥落か |
| 29 | 8 | 金環 | 完全　金の残り不良 | 24.61 | 26.48 | 14.68 | 15.77 | 4.88 × 5.66 | 10.63 | 銅 | 腐食が著しく金は剥落か |
| 29 | 9 | 金環 | 完全　金の残り良 | 18.93 | 20.82 | 9.86 | 11.64 | 4.65 × 7.66 | 8.35 | 銅 | 腐食が進むものの金は残る |
| 29 | 10 | 金環 | 完全　金の残り良 | 19.14 | 20.55 | 11.06 | 11.92 | 4.37 × 6.88 | 7.61 | 銅 | 腐食が進むものの金は残る　金は白っぽい色 |




第 31 図　七ツ石 4 号墳石室遺物出土状況詳細図

## 第9表　七ツ石4号墳　直刀・刀装飾具観察表

( )：遺存

| 挿図番号 | 図版番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 cm | 刃長 cm | 刃幅 cm | 刃厚 cm | 茎長 cm | 茎幅 cm | 茎背厚 cm | 茎腹厚 cm | 目釘穴径 cm | 目釘長 cm | 目釘厚 cm | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30 | 11 | 直刀 | 刃～茎 | (52.2) | 43.5 | 2.42～3.03 | 0.66～0.8 | (8.8) | 1.7～2.15 | 0.35～0.57 | 0.43～0.48 | 0.37×0.46 | — | — | (258.65) | 錆・割れ・剥離が著しい |
| 30 | 20 | 小刀 | 刃～茎 | (13.75) | 10.5 | 1.3～1.7 | 0.55 | (3.5) | 1.6～0.63 | 0.35～0.44 | 0.27～0.29 | — | — | — | (23.43) | 刀身は痩せつつあるが茎は原形をとどめる |
| 30 | 21 | 刀 | 切先 | (21.2) | (21.2) | 2.5 | (1.1) | — | — | — | — | — | — | — | (92.75) | 錆・割れ・剥離が著しい |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 口径mm | | 口の厚 mm | 筒長 mm | 筒径 mm | 板厚 mm | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 外径（縦横） | 内径（縦横） | | | | | | |
| 30 | 15 | 太刀柄紐金具 | 1/2残存 | 9.4×10.1 | 5.57×6.09 | 1.79～2.73 | (5.6) | 6.99×7.37 | 0.6 | 0.43 | 銅製品で表面に金が微量残る　調査時に木も確認 |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 装着時幅 cm | 装着時長 cm | 厚cm | 環の断面形 | 外径 cm | | | 内径 cm | | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 形 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | | |
| 30 | 12 | 直刀柄口金具 | 完形 | 0.13 | 3.12 | 0.2～0.34 | 板状 0.34×1.41 | 卵形 | 2.1 | 3.12 | 1.66 | 2.46 | | 鉄製で錆進行　11の装着品 |
| 30 | 13 | 直刀鞘飾金具 | 完形 | 0.31 | 3.15 | 0.24～0.28 | 四角 0.27×0.31 | 卵形 | 2.24 | 3.15 | 1.67 | 2.54 | 1.76 | 銅地金で渡金　金の残存は少ない　銅の腐蝕大 |
| 30 | 14 | 直刀鞘飾金具 | 完形 | 0.73～0.71 | 3.94 | 0.21～0.23 | 逆U字板厚 0.77mm | 卵形 | 2.42 | 3.94 | 1.97 | 3.48 | 2.56 | 銅地金で渡金か　銅の腐蝕進む |
| 30 | 16 | 鞘口金具（はばき?） | 2/3残存 | 1.35 | (2.06) | 0.14～0.19 | 板状 | 卵形 | 1.25～1.37 | (2.06) | 1.35 | 2.28 | 2.94 | 鉄製で錆進行 |
| 30 | 17 | 鍔 | 完形 | — | — | 0.44～0.49 | 板状 | 卵形 | 3.36 | 4.84 | 1.39 | 2.29 | 21.88 | 鉄製で錆進行 |
| 30 | 19 | 直刀柄金具 | 1/4残存 | 0.6 | (1.55) | 0.13～0.15 | 板状 | 卵形 | — | (1.55) | — | — | 0.57 | 20の装着品　鉄製で錆進行　内側には木質痕あり |

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 長 cm | 幅 cm | 厚 cm | 口径 cm | | | 尻径 cm | | 底板厚み cm | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 形 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | | | |
| 30 | 18 | 鞘尻（石突） | 完形 | 4.49 | 2.7 | 0.35～0.4 | 卵形 | 1.95 | 2.83 | 1.83 | 2.7 | 0.3～0.4 | 25.18 | 鉄製で錆進行　外面剥離が目立つ　内面には木質の繊維痕　尻は卵形に切った鉄板を接合　内部奥は空洞状態か |

## 第10表　七ツ石4号墳　鉄鏃観察表

( )：残存

| 挿図番号 | 番号 | 種類 | 残存状態 | 全長 cm | 刃部 | | | | 箆部 | | 茎部 | | | | 茎部の留め | | 重さ g | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 形状 | 刃部長 cm | 幅 mm | 厚み mm | 箆部長 cm | 縦×横 mm | 茎部長 cm | 縦×横 mm | 径 mm | 厚み調整 | 形状 | 縦×横 mm | | |
| 30 | 22 | 長頸柳葉鉄鏃 | 刃部～茎部 | (15.45) | 両刃片面研ぎ | 3.3 | 8.82 | 2.7 | 9.65 | 4.73×6.62 | (2.5) | 4.33×6.19 | — | — | 突起状? | — | 14.5 | 茎に木質痕 |
| 30 | 23 | 長頸片刃 | 刃部～茎部 | (16.2) | 片刃両面研ぎ | 2.0 | 8.68 | 2.55 | 11.5 | 4.42×5.72 | (2.7) | 4.66×5.22 | 2.78×3.11 | — | 箆部の裾広がり | 5.36×11.99 | 13.1 | |
| 30 | 24 | 長頸三角 | 刃部～茎部 | (14.5) | 両刃両面研ぎ | (2.2) | 11.74 | 4.04 | 7.3 | (4.62)×(6.48) | (5.0) | 5.15×6.87 | 2.51×2.45 | 有 | 不明 | — | 9.2 | |
| 30 | 25 | 長頸片刃 | 刃部～茎部 | (14.5) | 片刃両面研ぎ | (1.9) | 8.06 | 3.14 | 10.85 | 4.48×6.49 | (1.75) | 4.51×6.36 | × | — | 箆部の裾広がり? | 4.71×8.66 | 12.0 | |
| 30 | 26 | 長頸不明 | 箆部～茎部 | (11.6) | — | — | — | — | (10.0) | 2.89×4.71 | (1.6) | 4.35×4.86 | 3.95×3.89 | — | 箆部の裾広がり | 4.02×8.67 | 7.2 | |
| 30 | 27 | 長頸柳葉鉄鏃 | 刃部～茎部 | (10.35) | 両刃片面研ぎ | (0.14) | 9.21 | 2.81 | 7.15 | 4.4×5.69 | (1.85) | 3.0×4.5 | — | — | 箆部の裾広がり | 4.0×6.64 | 8.9 | |
| 30 | 28 | 長頸不明 | 箆部～茎部 | (9.88) | — | — | — | — | (8.7) | 3.88×5.06 | (1.7) | 4.06×5.62 | — | — | 突起状 | 3.5×8.0 | 10.7 | |
| 30 | 29 | 長頸不明 | 箆部～茎部 | (5.4) | — | — | — | — | (4.62) | 4.93×6.69 | (0.78) | 4.97×5.8 | — | — | 突起状 | 5.12×7.57 | 4.4 | |
| 30 | 30 | 無茎鏃 | 刃部 | (5.2) | 両刃両面研ぎ | (5.2) | 17.42 | 3.87 | — | — | — | — | — | — | — | — | 5.1 | 7mm幅の木質 |
| 30 | 31 | 無茎鏃 | 刃部 | (5.3) | 両刃両面研ぎ | (5.3) | 20.16 | 4.5 | — | — | — | — | — | — | — | — | 3.5 | 7mm幅の木質 |
| 30 | 32 | 長頸三角 | 刃部 | (2.2) | 両刃片面研ぎ | (2.2) | 11.65 | 3.27 | — | — | — | — | — | — | — | — | 1.2 | |
| 30 | 33 | 長頸柳葉 | 刃部 | (2.65) | 両刃片面研ぎ | (2.65) | 11.54 | 2.89 | — | — | — | — | — | — | — | — | 1.6 | |
| 30 | 34 | 柳葉 | 刃部～箆部 | (2.6) | 両刃両面研ぎ | (2.6) | 13.61 | 4.61 | (0.35) | 4.18×6.0 | — | — | — | — | — | — | 2.7 | |
| 30 | 35 | 鉄鏃箆部破片 | 箆部 | (1.85) | — | — | — | — | (1.85) | (2.29)×(6.09) | — | — | — | — | — | — | — | |
| 30 | 36 | 鉄鏃茎部破片 | 茎部 | (1.9) | — | — | — | — | — | — | (1.9) | 3.92×4.66 | — | — | — | — | 0.5 | 表面木質の繊維痕あり |
| 30 | 37 | 鉄鏃茎部破片 | 茎部 | (1.7) | — | — | — | — | — | — | (1.7) | — | 3.62×4.22 | — | — | — | 0.5 | 表面木質の繊維痕あり |
| 30 | 38 | 鉄鏃茎部破片 | 茎部 | (1.35) | — | — | — | — | — | — | (1.35) | — | 2.88×3.24 | — | — | — | 0.2 | 表面木質の繊維痕あり |
| 30 | 39 | 鉄鏃茎部破片 | 茎部 | (1.6) | — | — | — | — | — | — | (1.6) | — | 1.69×1.76 | 有 | — | — | 0.1 | 表面には木質、横巻きの繊維痕があり |
| 30 | 40 | 鉄鏃茎部破片 | 茎部 | (0.9) | — | — | — | — | — | — | (0.9) | — | 2.96×3.0 | — | — | — | 0.1 | 表面木質の繊維痕あり |

**七ツ石５号墳**（第 32・33 図）

本墳は、３号墳の主体部の東側で墳丘と周溝の間のいわゆる二段築成一段目のテラス部に位置している。

古墳は竪穴式石室の幼児埋葬施設である。

天井石は残されており、未盗掘であった。

天井石は４石でその隙間を埋めるため扁平な小礫を石と石の間に置き、白色粘土で目地詰めしている。

石室の大きさは、東西 122㎝、南北 78㎝である。掘り方は東西 170㎝、南北 90㎝、深さ 48㎝である。

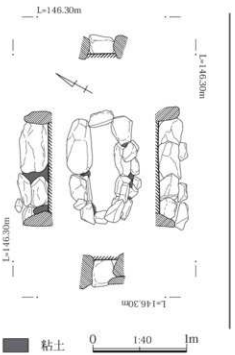
石室の主軸はＮ―61°―Ｅで東西方向で頭位は東方向である。

石室内部の規格は東西 90㎝、南北幅は東端 27㎝、中央で 27㎝、西端 17㎝、高さは 20㎝である。

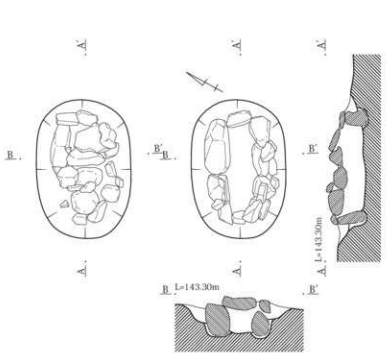
床は土面で敷石はない。旧地表から蓋石上部までの高さは 16㎝である。頭位は東側、足方向は西側である。

墳丘が存在していたかは不明であるがこの石室には簡単な土盛りがあったものと考える。

出土遺物はなかった。




第 32 図　七ツ石５号墳石室展開図




第 33 図　七ツ石５号墳石室実測図

**七ツ石６号墳**（第 34 図）

３号墳の南東周溝の外側 30㎝に隣接して位置している。調査した周溝の外側に本来みつかっている周溝外側立ち上がりラインの間に位置している。主軸はＮ―63°―Ｅである。

この古墳は、二段堀の土壙墓である。頭位は東側、足方向は西側である。

上段の平面形は楕円形で大きさは、東西方向に 2.25 m、南北 90㎝、深さは 20㎝の皿状の窪みである。

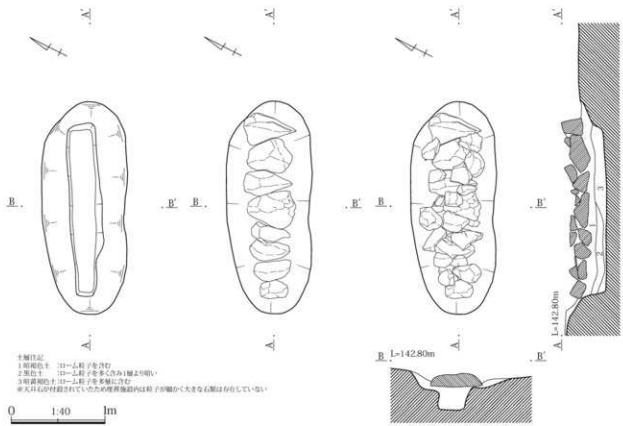
二段目の平面形は長方形で土壙墓は下場で東側が 23㎝、西側が 15㎝と細くなっている。

上場規模は東西 1.82 m、南北幅東端で 32㎝、西端 20㎝、深さは 20㎝である。

この長方形土坑に被葬者を葬った後、上の皿状くぼみに直接蓋石８石並べ、土壙に直葬の構造をとっている。

天井石８石の蓋石の石と石の間には、隙間を埋める手法として南側と北側から１石ずつ隙間を埋める石が置かれている。

被葬者は、土坑の長軸長さが 1.82 mを超えていることから、成人と考えられる。但し、肩幅が 30㎝以下とい




第 34 図　七ツ石 6 号墳実測図

うことから長軸長がすべてが人の身長ということはないかもしれない。

出土遺物はなかった。

土壙墓の上に小石郷のような形で天井石が設置され、蓋石をした事例は非常に珍しいものである。

**七ツ石 7 号墳**（第 35・36 図）

3 号墳主体部の西側墳丘裾部で周溝との間でいわゆる二段築成の一段目に位置している。

3 号墳との前後関係は、周溝を掘る段階で 7 号墳が存在していた場合石室は壊れていたものであり、3 号墳構築の後に 7 号墳が設置されたと考える。その場合、周溝がある程度埋まった段階で 7 号墳はつくられたものと考える。

主軸はN―22°―Eである。石室の石はすべて山石である。

天井石は 5 石あったが、南端の 1 石は外されており、4 石が現状で残されていた。

天井石の大きさは北側の 2 石が大きく、北側で東西 76㎝、南北 48㎝、厚さ 18㎝、東西 78㎝、南北 56㎝、厚さ 19㎝である。

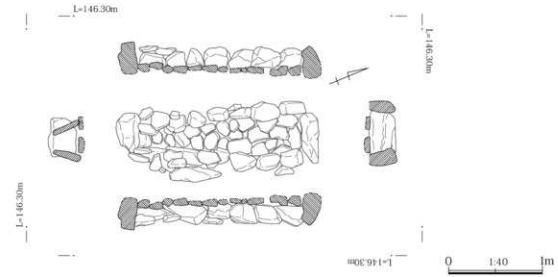
石室の大きさは東西 78㎝、南北 2.14 mである。掘り方は東西 1.5 m、南北 3.05 m、深さ 48㎝である。

頭位は北側、足方向は南側である。

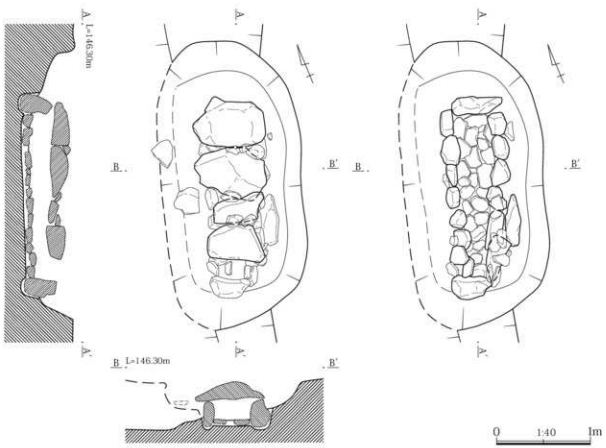
石室内部の規格は、南北 1.74 m、東西幅は北端で 35㎝、中央で 30㎝、西端 17㎝、高さ 20㎝である。

石室南端には、白色粘土で目地詰めしてある。

出土遺物はなかった。




第 35 図　七ツ石 7 号墳石室展開図




第 36 図　七ツ石 7 号墳石室実測図

## 第２節　弥生時代

弥生時代の遺構の存在は確認されなかったが、３号墳南東周溝内において弥生土器の破片が一括出土した。

**出土遺物**（第 37 図）

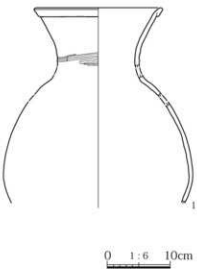
１は弥生時代の壺形土器である。壺は口縁部と頸部・胴部破片があり、接合はできない一括個体で一つの壺形土器である。総点数 25 点の同一一括個体であるが接合ができなかった為、図上復元した。

大きさは、口径 20.4㎝、頸部頚 13.0㎝、胴部最大径 30.0㎝、残存高約 31.0㎝を測る。胴部最大径は胴部中央下半である。

口脣部は折り返し口縁で、口縁から頸部にかけてヘラ磨きで丁寧に調整している。頸部には簾状文が２条施されている。

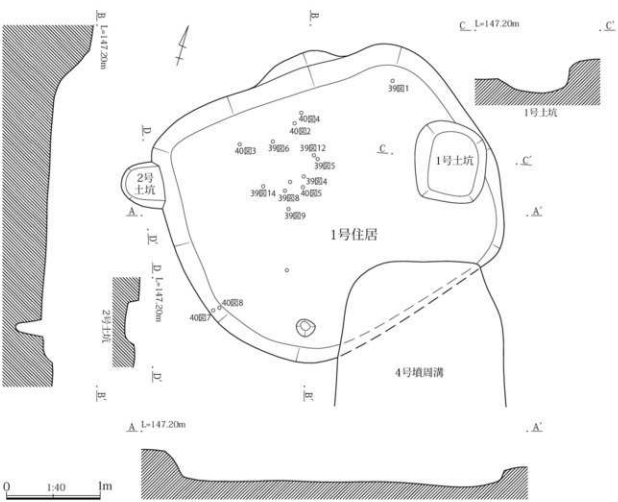
土器の焼成は良好で胎土は砂粒を混入している。色調は、表面は白橙色、内面も白橙色である。

一括個体の出土であるため出土位置付近に遺構の可能性があり、調査したが弥生時代の遺構は発見されなかった。




第 37 図　弥生土器復元実測図

## 第３節　縄文時代




第 38 図　１号住居実測図

縄文時代の概要としては撚糸文期の竪穴式住居が１軒発見された。

１号住居は４号墳の東側周溝に位置し、周溝調査時に縄文土器・石器が出土していた。縄文時代の出土土器・石器は住居出土のものと周辺遺構外出土のものがある。

**１号住居**（第 38 図）

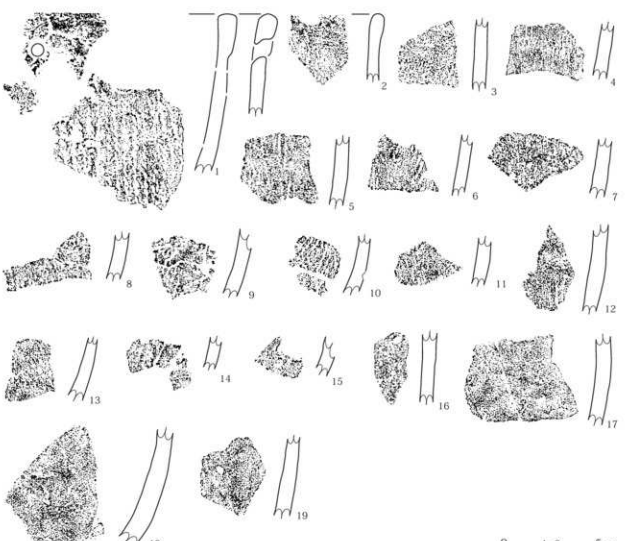
住居の平面形は隅丸不整長方形で、規模は東西 3.5 m、南北 3.3 m、壁高は 40㎝である。床面は平坦面であるが、南東側に傾斜が認められる。傾斜角度は 3°である。

小穴は南西コーナー壁際に１穴が存在する。平面形は円形で、大きさは 18㎝× 20㎝、深さ 30㎝、断面はペン先のように先すぼまりとなっている。柱穴ではないと考える。

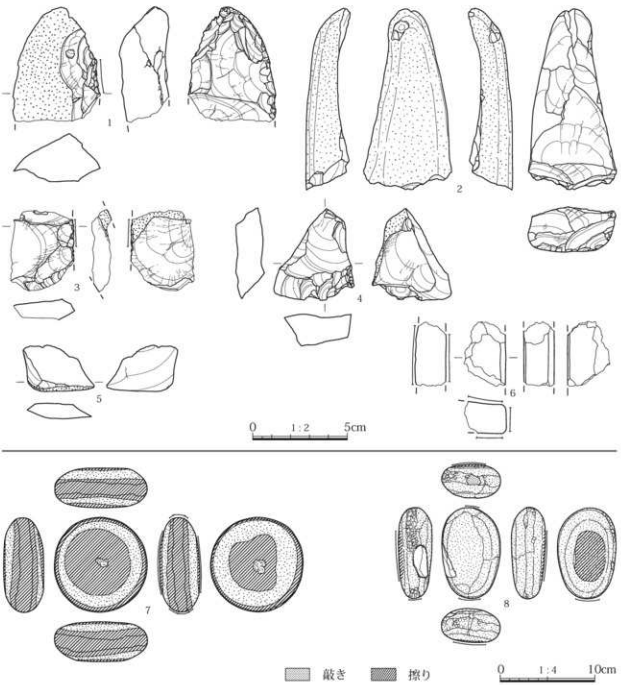
その他住居東端に１号土坑が存在する。西壁上に２号土坑が存在する。いずれの土坑も住居内の土と変わらないため新旧関係は不明である。

住居内は炉はなかった。

覆土は黒色土層で締まりが極端に強くあり、白色粒子・黄色粒子を若干混入。周辺の自然堆積層の地層と変化が認められず、周辺の土と住居の中の覆土は全く同じである。但し、４号墳周溝の内側壁面には１号住居の上部地層が残っており、 縄文早期の住居に特徴的な非常に締まった地層である。




第 39 図　１号住居及び周辺出土土器実測図




第 40 図　1 号住居出土石器実測図

出土遺物は、住居の西半部に分布している。

**土器**（第 39 図）

1 ～ 12 は撚り糸文土器である。すべて単節 R 縄文である。

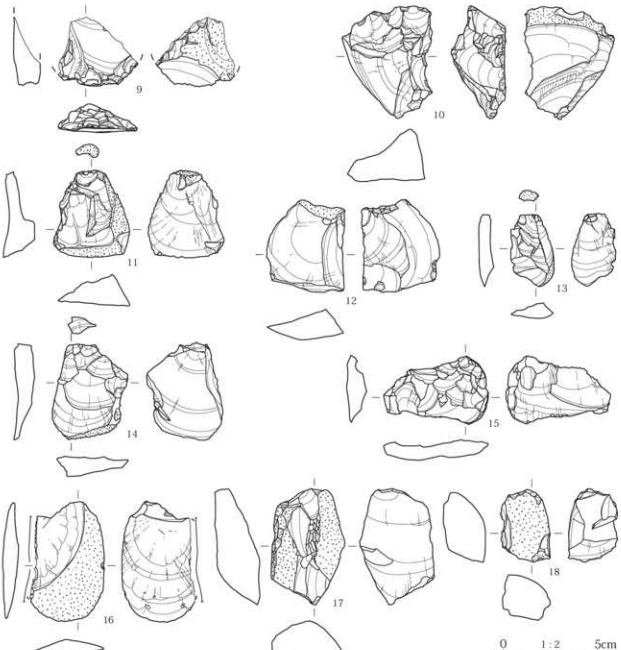
1 は土器の状況は脆く木工用ボンドを水で薄めて保存処置をした。口縁部破片で口縁部は肉厚な口縁になっている。口縁部下部から撚り糸文が施文されている。口縁部下部に補修孔がある。補修孔は表裏側から円錐状の擦り面となり、断面形は逆算盤玉形で孔の表外径 1.6㎝、裏外径は 1.4㎝、貫通円孔は 0.8㎝である。

2 は口縁部破片、3 ～ 12 は撚り糸文土器体部である。

13 ～ 19 は無文土器である。

18 は丸底土器の底部近くの破片で器厚は他破片に比べて厚い。

19 は唯一胎土・色調が異なっている。色調は茶褐色で、胎土に雲母片岩粒子を多量に含有する。ヘラミガキ




第41図　1号住居及び周辺出土石器実測図（1）

は丁寧に施されている。

本遺跡出土の擂り糸文土器は縄文早期稲荷台式期の所産と考えられる。

**石器**（第40・41図）

出土石器は剥片石器と礫石器に分けられる。

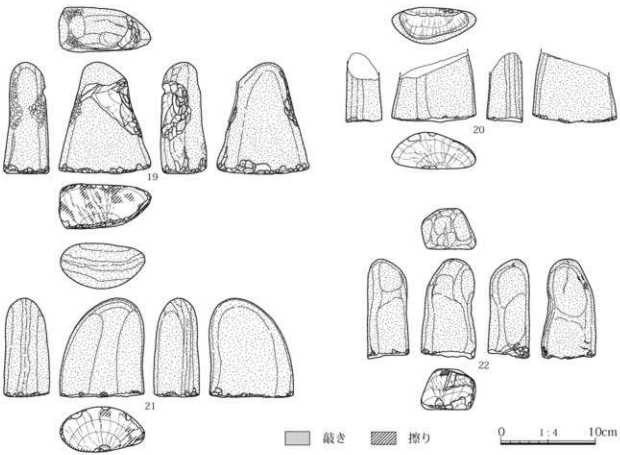
剥片石器は、典型的な石器は存在していないが、打製石器、掻器、削器が認められる。

1～5・9～18は剥片である。

剥片について、礫面を残すものが多い。礫面を打面・打点として連続して剥片を作出している。剥がされた剥片は簡単簡易な削器として使用しているものと考える。また、本遺跡では出土品がないものの礫面から調整剥片を採る例が、スタンプ形石器と同じ時期で存在する三角錐形石器に調整剥片を採った剥片と似ている。

礫石器は、砥石、擦り石、叩き石、スタンプ形石器などがある。

6は砥石で、3辺が残っているが他辺は破損している。3辺の状況からは扁平に擦られており、1辺は直線的




第 42 図　1 号住居及び周辺出土石器実測図（2）

に辺を整えている。砂岩は粒子が粗いもので固い素材である。

7・8は擦り石で、平坦面を擦るものと周辺部を擦っているものがある。周縁部は幅 1 ㎝前後で帯状に擦れ 3 帯が認められる。

**スタンプ形（凡字型）石器**（第 42 図）

19 ～ 22 はスタンプ形石器である。細長い礫の先端を長さ 10 ～ 12㎝で叩き割り、作業面の割れ口が平坦で礫の主軸に対して 90°位になったものを素材としている。

19 は礫を割って作業面（底面）を作出している。割れ口を叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある。作業面の擦れは全面に認められる。持ち手部分の一部を一定方向の剥離加工を施している。

側辺の 2 カ所に叩き痕が顕著に集中して残っている。

20 は礫を割って作業面(底面)を作出している。叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある。作業面の擦れは認められない。上半を欠損し、欠損面も叩き石として若干使用してる。

21 は礫を割って作業面(底面)を作出している。叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある。作業面の擦れは全面的に認められる。礫面周囲は擦れ痕がある。擦り石の周縁部と酷似している。

22 は礫を割って作業面(底面)を作出している。叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある。作業面の擦れは一部に認められる。頂部に叩き痕が残る。

住居内からは、擦り石・叩き石が存在するが、住居周辺からはスタンプ形石器が確認されている。撚り糸文土器の時期の所産であり、同時期と考える。また、スタンプ形石器は住居内ではなく、住居周辺の屋外で使われていたことが推測される。

第 11 表　縄文石器観察表

| 図版 | 番号 | 種類 | 出土位置 | 残存% | 寸法 単位 cm 縦 | 横 | 厚さ | 重量 g | 石材 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | 1 | 打製石器 | 1 住 | 50 | 6.1 | 4.6 | 2.5 | 72.9 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 40 | 2 | 掻器 | 1 住 No. 14 | 100 | 9.5 | 4.7 | 2.3 | 113.1 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 40 | 3 | 加工痕ある石器 | 1 住 No. 3 | 100 | 4.2 | 3.3 | 1.1 | 14.2 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 40 | 4 | 剥片 | 1 住 No. 13 | 100 | 4.8 | 4.2 | 1.6 | 32.9 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 40 | 5 | 剥片 | 1 住 No. 9 | — | 2.4 | 3.9 | 0.8 | 6.1 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 40 | 6 | 砥石 | 1 住 | — | 3.4 | 2.2 | 1.5 | 14.5 | 砂岩 | 3 面が擦られている |
| 40 | 7 | 擦り石 | 1 住 No. 1 | 100 | 10.1 | 9.9 | 4.2 | 664.1 | 安山岩 | 側面全面擦っている　表裏面平坦部擦っている　表裏中央叩き痕跡で窪み痕跡あり |
| 40 | 8 | 擦り石 | 1 住 No. 2 | 100 | 9.5 | 6.3 | 3.6 | 319.3 | 安山岩 | 火受けヒビ入り |
| 41 | 9 | 加工痕ある石器 | — | — | 3.6 | 4.1 | 1.5 | 16.4 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 10 | 加工痕ある石器 | — | 100 | 6.0 | 4.7 | 2.9 | 63.6 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 11 | 剥片 | — | 100 | 4.6 | 4 | 1.7 | 26.0 | — | 礫面あり |
| 41 | 12 | 剥片 | — | 100 | 4.9 | 4.1 | 1.6 | 34.3 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 13 | 剥片 | — | 100 | 3.8 | 2.3 | 0.85 | 6.9 | 黒色頁岩 | 礫面を打点にしている　礫面あり |
| 41 | 14 | 剥片 | — | 100 | 5.1 | 4.0 | 1.1 | 20.1 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 15 | 剥片 | — | 100 | 3.6 | 5.5 | 1.1 | 17.9 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 16 | 剥片 | — | 95 | 6.4 | 3.9 | 0.9 | 20.1 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 17 | 剥片 | — | 100 | 6.1 | 3.9 | 2.3 | 57.9 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 41 | 18 | 剥片 | — | 100 | 3.8 | 2.6 | 2.4 | 29.4 | 黒色頁岩 | 礫面あり |
| 42 | 19 | スタンプ形石器 | — | 100 | 11.8 | 9.8 | 4.8 | 736.2 | 安山岩 | 礫を割って作業面（底面）を作出している　叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある　作業面の擦れは全面に認められる　持ち手部分の一部を剥離加工している　側辺の 2 カ所に叩き痕が顕著に残っている |
| 42 | 20 | スタンプ形石器 | — | 70 | 7.4 | 9.0 | 3.9 | 334.9 | 安山岩 | 礫を割って作業面（底面）を作出している　叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある　作業面の擦れは認められない　上半を欠損し、欠損面も叩き石として使用してる |
| 42 | 21 | スタンプ形石器 | — | 100 | 10.5 | 8.9 | 4.8 | 675.8 | 安山岩 | 礫を割って作業面（底面）を作出している　叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある　作業面の擦れ全面的に認められる　礫面周囲は擦れ痕がある |
| 42 | 22 | スタンプ形石器 | — | 100 | 10.6 | 5.8 | 4.3 | 427.5 | 安山岩 | 礫を割って作業面（底面）を作出している　叩き石として使用し、底面の周囲礫面に小さなはじけ痕がある　作業面の擦れは一部に認められる　頂部に叩き痕が残る |

**1 号土坑**（第 38 図）

1 号土坑は 1 号住居内の東端に位置している。

住居内土坑平面形は不整円形で大きさは南北 96㎝、東西 75㎝、深さ 30㎝である。出土遺物はない。

ローム層は上面から 7 ㎝、その下の厚さ 7 ㎝がＹＰ層である。

浅間Ｃ軽石下に黒色土層 20㎝、茶褐色土層 35㎝、黒色土層 50㎝が標準土層である。

**2 号土坑**（第 38 図）

住居内の西側に 2 号土坑が重複関係にある。土坑の規模は平面形は楕円形で規模は南北 47㎝、残存する東西 60㎝、深さ 12㎝である。床面は平坦である。遺構確認面はローム漸移層で黒色土層の覆土を確認、住居との前後関係は不明である。出土遺物はない。

# 第３章　七ツ石３・４号墳出土の人骨・歯

宮崎重雄

七ツ石３・４号墳横穴式石室玄室部から、鉄製品類などの出土遺物と一緒に被葬者の人骨・歯の出土があったので同定を行った。

**七ツ石３号墳**

合計９本の歯が出土している。（第 12 表）

このうち、第一大臼歯は上顎２本、下顎１本、計３本の出土である。上顎の２本では、一部咬頭にわずかにエナメル質の咬耗があるだけであるが、下顎の第一大臼歯では、各咬頭に咬耗があり、そのうちの２咬頭には点状の象牙質の露出が見られる。

また、（Matsumura、1995）の示す東日本古墳時代人歯の計測値に照らすと、上顎の２本の第一大臼歯は女性に相当し、下顎第一臼歯は男性相当である。したがって、上顎第一大臼歯と下顎第一大臼歯は別個体に属する可能性が高く、咬耗度で見ると前者は少年期後期から青年期前期の年齢が、後者は青年期の年齢が推定される。

この他に、各咬頭のエナメル質に咬耗のある右下顎第三大臼歯が１本出土している。下顎第三大臼歯は、19～20 才頃に萌出するとされ（松井、1965）、この歯ではすでに各咬頭にエナメル質の咬耗があり、年齢はすでに壮年期に達していると思われる。なお、性別は困難である。

また別に、青年期の女性と思われる歯（左下顎第二大臼歯）が存在する。

以上をまとめると、出土歯牙は少なくても３個体に由来し、第一個体は少年期後期から青年期前期の女性、第二個体は青年期の男性、第三個体は性別不明の壮年期である可能性が考えられる。

大部分の歯には歯石の付着が認められる。齲蝕は観察されない。

他に大腿骨片と椎骨、橈骨近位部と思われる骨片の出土があるが、大部分は部位判定が困難である。

**七ツ石４号墳**

５本の歯が出土している。（第 13 表）

第一大臼歯は６～７才に萌出する歯（松井、1965）でありながら、その咬耗度が９才から 14 才に萌出するとされる第一小臼歯と第二小臼歯とほぼ程度である。萌出年齢が異なる歯でありながら、咬耗度が同程度ということである。

また、第一大臼歯は大きさが（Matsumura、1995）の示す東日本古墳時代人歯の男性に相当するのに対して、上記の２本の小臼歯および犬歯はいずれも女性相当の大きさである。

以上の理由によって、４号墳の５個の歯は２個体に由来すると考えられ、少年期後期～青年期前期の男性と、もう１個体は青年期の女性の可能性が最も高いと考えられる。

なお、これらの歯がおおよそ直径 20㎝程の範囲内に埋存していたことや、歯の色調がよく似ていることを考慮すると、一個体である可能性が全くないわけではない。

すべての歯に歯石の付着が観察される。齲蝕は観察されない。

歯の他に大腿骨片など小骨片の出土があるが、大部分は部位判定が困難である。

第 12 表　七ツ石 3 号墳出土人歯記録表

切歯

単位 mm

| 挿図 | 番号 | 歯種 | | | 近遠心径 | 唇舌径 | 歯冠長 | | 歯石 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 1 | 上顎 | 右 | 1 | 7.4+ | 1.7+ | 11.0 | 舌側の歯冠部のみが残ったものである。 | なし |

大臼歯

単位 mm

| 挿図 | 番号 | 歯種 | | | 近遠心径 | 唇舌径 | 歯冠長 | 咬耗のようす | 歯石 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 2 | 上顎 | 右 | 3 | 8.1 | 10.4 | 6.6 | 咬耗が全く認められない。 | なし |
| 44 | 3 | | | 2 | 8.4+ | 11.0+ | 7.0 | 歯冠頬側部を欠損する。咬耗は認められない。 | なし |
| 44 | 4 | | | 1 | 10.0 | 10.5+ | 4.2+ | 近心頬側咬頭を欠損する。近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭にわずかにエナメル質の咬耗がある。 | あり |
| 44 | 5 | | 左 | 1 | 10.2 | 11.3 | 5.2 | 近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭にわずかにエナメル質の咬耗がある。 | あり |
| 44 | 6 | 下顎 | 右 | 3 | 11.4 | 10.2 | 5.1 | 各咬頭にエナメル質の咬耗がある。 | あり |
| 44 | 7 | | 左 | 1 | 11.8 | 10.8+ | 5.4 | 各咬頭に咬耗があり、近心舌側咬頭、遠心咬頭にはごく小さい点状の象牙質の露出がある。 | あり |
| 44 | 8 | | | 2 | 10.7 | 10.0+ | 5.1 | 近心歯冠部を一部欠損する。各咬頭にエナメル質の咬耗がある。 | あり |
| 44 | 9 | | | 2 | 11.0 | 10.1 | 5.4 | 近心頬側咬頭、遠心頬側咬頭にエナメル質の咬耗がある。 | あり |

第 13 表　七ツ石 4 号墳出土人歯記録表

犬歯

単位 mm

| 挿図 | 番号 | 歯種 | | 近遠心径 | 唇舌径 | 歯冠長 | 咬耗のようす | 歯石 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 1 | 下顎 | 右 | 6.0+ | 4.4+ | 7.2+ | 尖頭部に咬耗による点状の象牙質が露出する。 | なし |
| 44 | 2 | | 左 | 6.3 | 7.3 | 6.9+ | 尖頭部に咬耗による点状の象牙質が露出する。 | あり |

小臼歯

単位 mm

| 挿図 | 挿図 | 歯種 | | | 近遠心径 | 唇舌径 | 歯冠長 | 咬耗のようす | 歯石 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 3 | 下顎 | 左 | 1 | 6.7 | 7.2 | 8.1 | 頬側咬頭と咬合面隆起にエナメル質の咬耗がある。 | あり |
| 44 | 4 | | | 2 | 7.1 | 7.7 | 7.2 | 頬側咬頭にごくわずかのエナメル質の咬耗がある。 | あり |

大臼歯

単位 mm

| 挿図 | 挿図 | 歯種 | | | 近遠心径 | 唇舌径 | 歯冠長 | 咬耗のようす | 歯石 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 5 | 下顎 | 右 | 1 | 11.9 | 10.9 | 5.5 | 頬側の三つの咬頭にわずかのエナメル質の咬耗がある。 | あり |


主な参考・引用文献

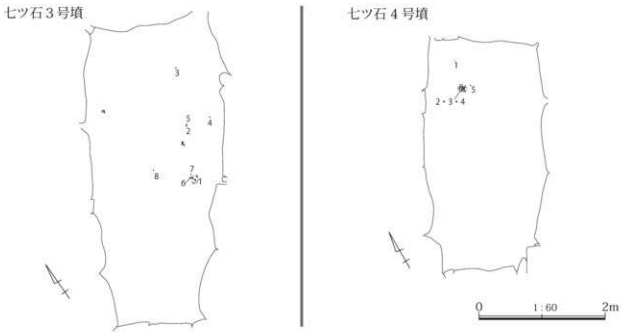
藤田恒太郎・桐野忠太（1991）「歯の解剖学 -21 版」、金原出版

北村宗一（1942）歯牙萌出時期及び順序に関する研究。歯科学報、47，274-287，352-368.

松井隆弘（1965）「新編口腔組織学歯牙編」。永末書店。

Matsumura.Hirofumi（1995）A Microevolutional History of the Japanese People as Viewed from Dental Morphology. National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum, Tokyo.

栃原　博（1957）、日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌、31.607 － 656.




第 43 図　七ツ石３・４号墳人骨・歯出土状況図

七ツ石３号墳出土人歯

七ツ石４号墳出土人歯

第 44 図　七ツ石３・４号墳出土人歯写真

# 第４章　まとめ

**【低墳丘二段築成古墳について】**

七ツ石３・４号墳は低墳丘二段築成の古墳である。下段（１段目）は地山（旧地表面）をほとんど成形せずそのままの地形を巧みに利用し、幅の広い下段テラスを有する。盛り土・切土は行っていない。上段（２段目）は、周溝の掘削した土を横穴式石室奥壁辺を中心に盛り土を用いて造成され、墳丘の高さは２～３m、墳丘２段目の墳丘規模は直径 15 ～ 16 m前後と、小規模な墳丘を構築している。荒砥 68・70 号墳のように周溝で掘り上げた土を周溝内に盛り上げる形とは全く異なった古墳構築方法である。３・４号墳については、葺石・埴輪の樹立はなかった。

本古墳の築造年代は、４号墳が６世紀末、３号墳が７世紀初頭と考えられる。

この低墳丘二段成古墳については大室古墳群の小二子古墳が良く知られている。低墳丘の古墳を断面模式図にすると次のようになる。（第 45 図）参照。

**【墓道を持つ古墳について】**（第 46 図）

墓道については、大室古墳群の前方後円墳である後二子古墳・前二子古墳が良く知られているが、今回の七ツ石３号墳発掘調査で円墳などにも墓道が存在することを再認識することとなった。

後二子古墳・前二子古墳は前方後円墳で石室は後円部に存在する６世紀の古墳である。

①後二子古墳の墓道は石室が基壇面を掘り込んで作出されているため、石室入り口から周堀まで溝状に開削された墓道を検出した。墓道の長さは 11.41 mであり、方位はN－17°―Wにとっている。幅は 1.75 ～ 2.7 mであり、深さは 0.8 ～ 0.9 mである。断面は緩やかな立ち上がりの箱形を呈し、地山の地層を掘り込んで、底面はハードローム層上にほぼ平坦に造られていた。底面の造作は一旦素掘りを行い、入り口付近では粘土や小礫の混じるローム土を用い、その他ではロームブロックを主体にした土で敷き均しが施され竪緻面となっていた。また、この敷き均しの上部にも硬化面が存在していたことから、一定期間をおいての使用が考えられる。主軸線上での断面をみると石室天井石の端から約１m南が最も高くなり、それより 2m の間が下り勾配となっている。それより南は平坦で周堀へと連続している素掘りの墓道である。

②前二子古墳は石室入り口に通じる現状の墓道は、古墳構築当初に開削されたものであるか、わずかな情報であるが、石室前面の西側の石積みは構築当初のものであることが、土層から判明し、東側は後世の積み替えであることがわかった。遺物の出土状況から現在の墓道状の掘り割りは、当初から設定されたものと考えている。

七ツ石３号墳と同じ円墳に墓道を持つ古墳があるかを前橋市内で確認したところ、本遺跡の北東１km の長岡遺跡Ｂ―１号墳、ならびに南西 300 mの小稲荷遺跡３号墳が類似資料の可能性があるので見てみたい。

③長岡遺跡Ｂ―１号古墳

古墳は径 6.3 m程の円墳と想定している。

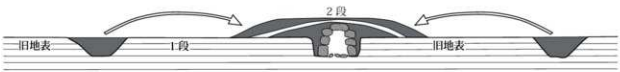
横穴式無袖形石室の前庭部について「石室正面には長さ 5.55 m、幅 2.5 mの墓道が掘り込まれている。」と報告している。

掘り方幅と同じ幅で石室南側に墳丘規模は直径７m位、周溝外周直径で 11 mを測る。周溝外まで掘られている。

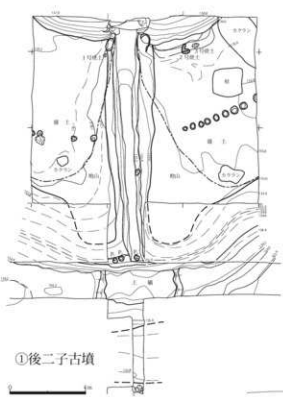
但し、墓域である周溝外まで設置している。

④小稲荷遺跡３号墳（荒砥 89 号墳）

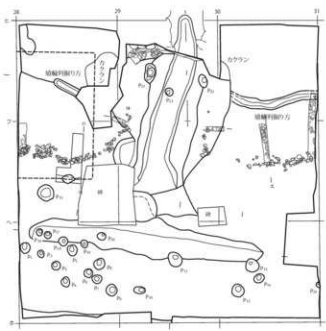
古墳は不正円形で規模は墳丘直径 30 m、周溝外縁までの規模は 37 mでを測る主体部は横穴式石室である。「石室前には階段状の前庭が付設されている」と報告されている。羨門から幅４mの石室掘り方掘削で長さ 7.8 mで、周溝まで幅 2.5 m、深さ 60 ～ 80㎝の溝が繋がっている。




第 45 図　低墳丘二段築成古墳断面模式図

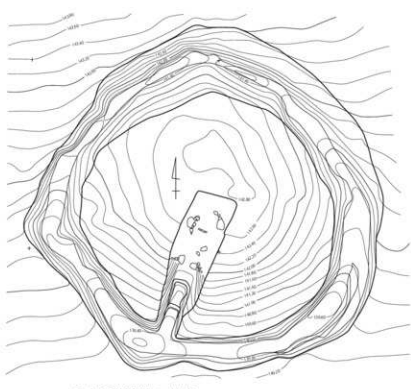


①後二子古墳



② 前二子古墳

③長岡遺跡Ｂ－１号古墳



④小稲荷遺跡３号墳

第 46 図　墓道を持つ群馬の古墳集成図

羨門から 1.5 mは斜度を持ったテラス状で周溝までの間に２段の掘り込みがある。１段目が幅 2.1 m、長さ 2.8 m、段さ 30 ～ 40㎝で、２段目が幅 2.5 m、長さ 3.6 m、段さ 20 ～ 30㎝であり、周溝底と同じ高さになっている。

小稲荷遺跡３号墳は、前庭から周溝にかけて細い溝が直線的にのびており、墓道のある古墳である。

円墳における特別な事例であるが、小稲荷遺跡３号墳（荒砥 89 号墳）、長岡遺跡Ｂ－１号古墳の２基の古墳が墓道を付けている。この墓道を持つ古墳は大室古墳群を含めた直径 1.9㎞の範囲内の事例であることがわかり、今後の事例の増加を待ちたい。

墓道のある古墳は栃木県に多く見られており、近年報告書が刊行された栃木県壬生町に所在する桃花原古墳は「前庭」から周溝に続く間に墓道を持つ古墳である。前庭から墓道まで床も含めて葺石並びに敷石されているとても丁寧なつくりの古墳である。前庭・墓道の構造は七ツ石３号墳の前庭・墓道と非常に似通っていて、素掘りと石葺き・敷石があるかの違いである。

二段築成の低墳丘の古墳に関する内容と墓道を伴う古墳については、栃木県の古墳との関連が指摘できるものと考える。

**【竪穴式小石槨】**

３号墳には竪穴式の石室・土壙墓が３基存在している。３号墳の構築後に作られた竪穴系石室古墳は、粘土で蓋石及び石室を目地詰めしている。一つの古墳で３基の竪穴式石室を持つ例は少ない。

特徴のあるのは七ツ石６号墳で土壙墓を二段掘りしたところに小石槨のように蓋石で完全に塞ぐ特異な形の埋葬施設であり、「土壙蓋石墳」とでもいうもので小石槨の部類と考える。

**【石材の供給について】**

本古墳の位置する旧地形は、赤城山山体崩壊によって形成された「流れ山」の南斜面上である。古墳石室石材については、先の流れ山に安山岩の大石がまとまっている個所「石山」が近所にいくつかあり、そこの石を持ってきて石室を構築している。

また、七ツ石という地名についてもこの石山が７個所存在していることから地名となったものと思われる。

石室裏込めもこの安山岩を使っているが、その間の土についても石を掘りだした際の土（赤い土砂）を使っていたものと考える。

玄室の床敷石に敷かれていた軽石玉石は榛名山噴出降下軽石であり、敷石に使われる例は非常に珍しいものである。

**【角閃石安山岩を玄室床敷石に使った古墳】**

七ツ石３号墳と同じような軽石で、石室玄室床を敷き詰めた事例は数が少ない。確認できたのは、西大室丸山遺跡１号墳（前橋市）、オブ塚古墳（前橋市）、石山南古墳群赤堀村 104 号墳（伊勢崎市）、多田山 19 号墳（伊勢崎市）、下佐野３号墳（佐野村 41 号墳）（高崎市）の５基で、七ツ石３号墳を合わせて６基である。

西大室丸山遺跡１号墳は石室敷石写真（ＰＬ５－３）から軽石を確認し、報文中に山石と軽石が敷かれている。その他の古墳は報告書に玄室敷石は軽石と書かれている。なお、隣接する荒砥 72 号墳は、玄室の敷石を写真で見ると、気泡のある玉石に見え、軽石による敷石の可能性がある。

主要な角閃石安山岩削石積石室が広瀬川（旧利根川）に沿って分布している。この分布域の外側に玄室軽石による敷石古墳の分布が認められる。

軽石床敷石の古墳分布は広瀬川（旧利根川）の北側でオブ塚古墳が 4.1㎞、西大室丸山１号墳は 4.8㎞、石山南古墳は 4.5㎞、多田山 19 号墳は 5.8㎞、七ツ石３号墳は 7.1㎞と北側に分布している。利根川の南西にも下佐

野３号墳が 10.4㎞に１例存在している。軽石玄室床敷石古墳の分布は前橋を主体に南北 16㎞、東西 20㎞の範囲に存在する。

６世紀の中頃に榛名山の噴火で大量の軽石（角閃石安山岩）を東北東方向に噴き上げている。その軽石は渋川・子持地域に厚く堆積している。吾妻川・利根川にも多量の軽石が降下堆積し、それらは下流の広瀬川（旧利根川）に流れ下った。

軽石が流れ下る中で角が擦れて丸くなって、流れが緩くなったところに軽石は溜まったものと考えられる。

この軽石を玄室床に敷き詰めている。

角閃石安山岩削石積石室の分布は右島氏（1994）の研究があるが、今回のように石室床面敷石に角閃石安山岩の拳大の円礫だけで敷き並べた古墳については七ツ石３号墳、西大室丸山１号墳、石山南古墳群赤堀村 104 号墳、下佐野３号墳、多田山 19 号墳の６基を確認している。この分布については、角閃石安山岩削石積石室の分布域の北側、南側と外側に分布していることがわかる。

石山南古墳群（赤堀村 104 号墳）

「床面には角閃石安山岩の玉石と輝石安山岩の亜円礫が敷かれており、表面で見る限りでは 90％は角閃石安山岩の玉石という印象であった。」と報告している。

多田山 19 号墳

「玄室の床は、全面に渡り直径２～ 10㎝の角閃石安山岩の円礫が敷き詰められていた。一方、羨道の床面は、北 2/3 程度には同じく２～ 10㎝の角閃石安山岩の円礫の存在は認められていたが、南 1/3 程度の範囲には礫の存在は認められなかった。」と報告している。羨道内に礫が敷き詰められていたものと考えられる。

西大室丸山遺跡（１号墳）

「床面は、根石を据えた後、整形のために埋め土をして、その上に山石と榛名山二ツ岳の軽石が混入した小石を敷いている。」と報告している。山石と榛名山二ツ岳軽石の混入とあるが、第１床面が軽石敷、第２床面が山石敷であり、攪乱を受けていると思われる。

オブ塚古墳（芳賀第 48 号墳）

「床面には径 10㎝以内の粒のそろった浮石が一面に敷きつめられていた。その厚さは約 15㎝ぐらいで、黄白色の美しいものであった。この例もまたきわめて少なく、珍しいものである。この浮石は丸く、転石とみられる。二ツ岳噴出によるものである。」と報告している。

このように軽石を石室床面に敷き詰める例は、調査済の古墳報告書の石室遺物出土写真や敷石写真などを再検証することが必要と考える。

**【玄室内敷石の量について】**

３号墳の玄室内敷石は榛名山噴出の軽石でいわゆるＦＰ、Hr－ＦＰである。

この敷石に使われた軽石をすべて古墳外に運び出してみた。籠（バイスケ上径 38㎝×下径 30㎝×高さ 15㎝）45 籠分で総重量 491.6kg である。

１籠は平均 10.9kg である。大き目の軽石の入った籠で 106 個、小さ目の軽石の籠で 188 個が入っている。

最大の軽石で 11㎝× 9.5㎝× 5㎝、最小の軽石で 3㎝× 2.5㎝× 1.5㎝である。

当時の石を運ぶ籠あるいは袋はどの様な大きさの品物か不明であるが、一つの単位として今回は籠を提示したものである。

比較資料として４号墳の玄室敷石の河原石についても、古墳外に運び出してみた。籠（バイスケ）16 籠分で総重量は 259.1kg である。１籠は平均 16.2kg である。河原石の最大は 10㎝× 11㎝× 5㎝、最小は 4㎝× 3.5㎝× 2.5㎝である。

籠の数の違いは玄室の広さが大きな原因であり、敷石の石の厚さに関係している。

3号墳の約 500kg の軽石、4 号墳の約 260kg の河原石を運ぶ手段を考えると、人力、馬、舟などが考えられる。一番近い個所で石採集が出来たとして、広瀬川（旧利根川）まで最短距離で 7.1km である。

**【漆土玉について】**

漆土玉の出土事例を群馬県内でみてみると白藤古墳（前橋市：旧粕川村）、今井神社古墳（前橋市）、川井稲荷山古墳（玉村町）、神田・三本木古墳群 六反支群（藤岡市）、七ツ石3号墳（前橋市）5 古墳群で確認されている。

古墳数では、白藤古墳 2 基、今井神社古墳群で 1 基、玉村町川井稲荷山古墳 1 基、神田・三本木古墳群 六反支群 4 基である。七ツ石遺跡 3 号墳の 1 基で合計 9 古墳の出土である。

七ツ石 3 号墳 23 点を含めて、5 古墳群 9 古墳で合計 523 点が発見されている。

※白藤古墳群

A 1 号墳は墳丘直径 14 m、周溝規模約 18 mの円墳で、主体部に竪穴式石室 2 基を持つ。時期は 6 世紀後半。

漆土玉は 314 点出土で周溝内出土で担当者は、土師器坏 3 点に玉が入れられていたものと考えている。

V 8 号墳は小石槨で 7 点の出土である。2 基の古墳出土漆土玉数は合計 321 点である。

※今井神社古墳群 2 号墳は直径約 40 mの円墳で、主体部は両袖式横穴式石室である。時期は 6 世紀末頃。

漆土玉は 38 点で玄室中央東よりにまとまって出土している。

※川井古墳群の川井稲荷山古墳（芝根村第 7 号墳）は前方後円墳で墳丘長 35 m、後円部径約 25 mで三角縁神獣鏡 1 面の出土があり、著名古墳である。時期は 6 世紀初頭である。

漆土玉は 34 点で一覧表に計測値・写真がのっているが実測図がのせられていない。写真で観察すると臼玉状の形態である。大きさの平均は直径 7 ～ 8 ㎜、厚みは 4 ～ 6 ㎜、重さ 0.27 ～ 0.44 g である。

※神田・三本木古墳群 六反支群

K 2 号墳は周溝内径は推定 20 mの円墳で漆土玉は 4 点出土している。

K 11 号墳は直径 12.5 mの円墳で漆土玉は 99 点出土している。

K 13 号墳は直径 8.1 mの円墳で漆土玉は 1 点出土している。

K 14 号墳は直径 10 mの円墳で漆土玉は 3 点出土している。

4 基の古墳で漆土玉は合計 107 点である。大きさは平均 8㎜、厚さ 4 ㎜、平均 0.35 g である。

時期を見てみると白藤古墳は 6 世紀後半、今井神社古墳は 6 世紀末頃、川井古墳群　川井稲荷山古墳は 6 世紀初頭、神田・三本木古墳群 六反支群はＴＫ 43 期、7 世紀初頭、七ツ石 3 号墳は 7 世紀初頭頃のものある。6 世紀初頭から 7 世紀初頭の約 100 年の所産であることがわかる。

漆土玉出土の古墳を見てみると前方後円墳（川井稲荷山古墳）墳丘長 35 m、円墳（今井神社古墳直径 40 m）、（神田・三本木古墳群 六反支群 4 基の規模は 8 ～ 20 m）、（白藤古墳Ａ1 号墳は直径 14 m）、七ツ石 3 号墳（不整円墳直径 48 m）・小石槨（白藤古墳Ｖ8 号墳）などで、墳形、規模などに特徴は認められない。

今井神社古墳の漆土玉は径 7 ～ 8 ㎜で、厚さ 4 ～ 5 ㎜位を計る。中央に 1 ～ 2 ㎜の孔を穿ち、連接面は平面または凹面を呈する。「表面は光沢のある黒褐色を呈し、断面は灰褐色を呈する。製作技法は以下の如くと考えることができる。焼成前の素地を成形、穿孔して、乾燥後研磨を加える。焼成は窯窯を使用して還元焼成し、過還元して表面を黒色処理したと考えられる」とあり、白藤古墳群出土例を除いて同様な内容である。

白藤古墳出土の漆土玉は、形状が球体で断面形が円形であり、他の古墳出土の漆土玉の断面臼玉の形状とは作りが異なっている。

漆土玉の大きさを見てみると七ツ石 3 号墳出土の漆土玉は、他古墳出土の漆土玉と比較して、やや小ぶりである。七ツ石 3 号墳の漆土玉は、大きさが平均径 5.5㎜位、厚さ 3.8 位、平均 0.1 g であり、他資料と比べて直

径が２㎜小さく、重さで 1/3 の 0.1 ｇ少ないのである。

漆土玉という遺物の漆をいかに証明するかという手順を考えた。漆を証明するために科学分析を依頼したところ漆部分をきれいにクリーニングすることは、今の現状を破壊する可能性がある。汚れた土などが塗膜を保護しており、クリーニングはできない。蛍光エックス線で漆部分だけを分析することは周辺にある土も含めて分析してしまうため分析は不可能であると結論付けられた。但し、非破壊を前提としてである。

漆土玉を漆と断定した根拠を示した事例は無いように思う。この漆土玉の製作についてミニ実験考古学を行い証明方法を考えた。

この実験考古学は、石井克己氏の趣味である漆工芸の知識を基に行われた。

作業工程

①泥粘土団子をつくる。（丸めている時乾燥が早まるので手早く。）

②土玉に孔を空ける。（竹串・針等で行うが含まれる鉱物に当たる事が多く土玉が壊れやすい。）

③土玉乾燥する。

④土玉を焼く。（焚火程度で可能。）

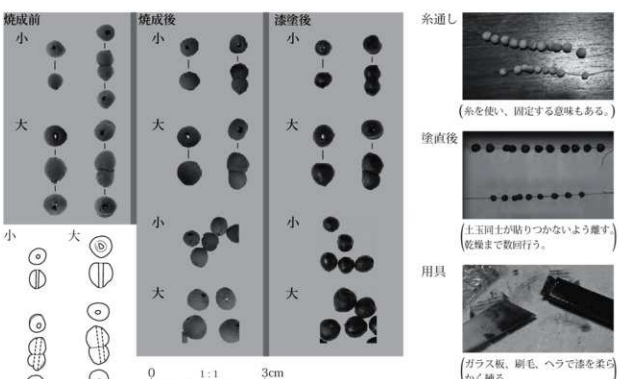
⑤土玉に糸もしくは繊維紐を通す。

⑥糸に通したまま漆を塗る。（単品で塗ったりすると孔内を漆で塞ぐことになる。このためハケ塗とした。）

この時当遺跡で出土した２ケ合体の土玉がある。

⑦漆の乾燥。特に乾燥中は玉を僅かに移動を数日行った。紐に漆が付着し、土玉を糸ごとくっつけてしまう。

※最後に土玉の焼きが甘くても漆によりコーティングされ、強度は増す。なお、黒漆は黒色を使わず生漆（茶褐色）で行った。以上のような事から漆土玉を作れることを証明した。




第 47 図　漆土玉製作実験考古学

※　下郷古墳群 71 号墳（東吾妻町）の玄室内から土玉２点の出土があったが色調は橙色であり、漆土玉の漆塗膜だけが剥げ落ちてしまったものか、その形状がそのまま出来上がりの品物かは不明である。

漆土玉・土玉は、今後資料の増加が考えられる。

**【横穴式石室の左壁崩壊石室について】**

七ツ石３号墳・４号墳とも、石室左壁の中央部の側壁の基礎石等が極端に石室内部に倒れ込んでいる。４号墳の側壁石は通常の石室面にあるが内面に約 50°以上傾いている。そのため、周辺の石及び上部の石がすべてズレてしまっている。３号墳も同じく、側壁２段目の石は通常の石室面にあるが内側に約 25°以上傾いており、周辺の石及び上部の石がすべてズレてしまっている。

横穴式石室の左壁崩壊石室の原因として尾崎喜左雄氏は『横穴式石室の研究』のまとめの中で石室の左壁方向で起こった榛名山の二ツ岳爆裂にその原因を求めている。この尾崎氏の調査は赤城山南麓地帯横穴式古墳の古墳を資料化して西方向で起きた榛名山の噴火に伴う衝撃と結びつけ西側側壁が崩壊したものと考えている。

これに対して、本調査で確認された七ツ石４号墳が６世紀末期、七ツ石３号墳が７世紀初頭という時期であり、榛名山の噴火が起きた５世紀最終末と６世紀中頃の噴火後の事例で西壁崩壊古墳を確認できたことから、古墳時代に起きた榛名山の噴火にその原因を求めるのは困難である。

そのため、横穴式石室左壁崩壊古墳の原因は、榛名山の噴火ではなく、弘仁９年（818）の巨大地震にその原因を求めたい。

**【古墳の被葬者数について】**

人骨・人歯の鑑定では３号墳は３人分、４号墳は２人分の被葬者の人数が鑑定された。

古墳被葬者の人数を把握する方法として考古学的遺物で耳環（金環）があり、両耳に一つずつ２点で一人分と数えられる。（但し、一人２個と限定した場合）３号墳は耳環が８点であることから、４人分と考えられる。４号墳は耳環が 10 点あることから５人分が葬られていると考えられる。

人骨による人数把握と耳環数値からの人数把握に差があるが、被葬者のマックスを耳環から導き出すと耳環を装着していた人は男性成人・女性成人などは確定としている。

３号墳は青年期の男性、少年期後期～青年期前期の女性、青年期後期から壮年期の性別不明の個体である。

４号墳は少年期後期～青年期前期の男性、青年期の女性の個体である。

耳環を付ける被葬者が青年期の男性、少年期後期～青年期前期の女性、青年期後期～壮年期の性別不明、小年期の男子、青年期の女性などがすべて、装着していたとする前提にたってのことである。

耳環を付けるのは、少年期の人は含まないと考えると被葬者の数はさらに増えることとなる。古墳被葬者数の研究は、今後検討していく必要がある課題である。

**【縄文時代早期稲荷台式期住居について】**

縄文早期稲荷台式期の住居の発見は、基本的に調査事例は少ないのが実態である。前橋市内の発見事例は２例目で、上細井中島遺跡で９号住居、１軒が調査されている。近隣では旧笠懸町（現みどり市）の清水北口遺跡で竪穴住居１軒、旧北橘村（現渋川市北橘町）の城山遺跡で６軒の調査がある。赤城山南麓での撚り糸文土器の出土する遺跡は散見されるが、住居調査は非常に限られた軒数である。

住居出土の石器で剥片に礫面が残されていることは、先に報告した通りである。小さな剥片を作出してその場で使う程度削器として使用するのではないかと考える。住居内からは、擦り石・叩き石が存在するが、住居周辺からはスタンプ形石器が確認されている。撚り糸文土器の時期の所産であり、同時期と考える。また、スタンプ形石器は住居内ではなく、住居周辺の屋外で使われていたことが推測される。ただし、住居出土の擦り石・叩き石は確認面の高さであり、住居外で使用したものと考える。

参考文献

前原　豊 1992『大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概要Ⅰ 後二子古墳　小二子古墳』前橋市教育委員会
前原　豊 1993『大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概要Ⅱ　前二子古墳』前橋市教育委員会
前原　豊 1995『大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概要Ⅲ　中二子古墳』前橋市教育委員会
前原　豊 1997『大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概要Ⅳ　小二子古墳』前橋市教育委員会
福田紀雄他 1980『西大室遺跡群』『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会
松本浩一他 1981『西大室遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会
三浦茂三郎 1995『舞台遺跡』群馬県教育委員会
松田　猛 1997『西大室丸山遺跡』群馬県教育委員会
関口功一 2003『中屋敷Ⅰ遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡』群馬県教育委員会
群馬縣史蹟名称天然記念物調査報告書 1936『上毛古墳綜覧』群馬県
群馬県教育委員会 2017『群馬県古墳総覧』
亀井健太郎 2016『E 25 神田・三本木古墳群 六反支群』群馬県藤岡市教育委員会
右島和夫・賀来孝代 2009『川井古墳群川井稲荷山古墳（芝根村第７号墳）』『川井・茂木古墳群』群馬県佐波郡玉村町教育委員会
細野雅男 1986「今井神社古墳群」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　第 53 集
小島純一 1989『白藤古墳群』群馬郡勢多郡粕川村教育委員会
大塚昌彦 2016『下郷古墳群 71 号墳』東吾妻町教育委員会　東吾妻町埋蔵文化財発掘調査報告書第 24 集
右島和夫 1994「角閃石安山岩削石積石室の諸特徴」『東国古墳時代の研究』学生社
永井智教 2016「赤堀村 104 号墳」『石山南古墳群』山下工業株式会社・伊勢崎市教育委員会
山本良知 1960「高崎市下佐野古墳群調査概要」『コイノスⅩⅦ』
尾崎喜左雄 1971「オブ塚古墳」『前橋市史』１　前橋市
深澤敦仁 2004「19 号墳」『多田山古墳群 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡 古墳時代編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　第 328 集
君島利行 2006『桃花原古墳』壬生町教育委員会　壬生町埋蔵文化財調査報告書　第 21 集
小森哲也 2009「下野における前方後円墳築造終焉にかかわる研究史の整理と展望」『東国における前方後円墳の消滅』東国古墳研究会
小森哲也 2015『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房
星　克典 1994『長岡遺跡』群馬県勢多郡粕川村教育委員会
新井順二 1987『小福荷遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
谷藤保彦 2013『上細井中島遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　第 576 集
尾崎喜左雄 1966「第二篇　第三章　赤城山南麓地帯横穴式古墳左壁前壁石室の研究」『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
小菅将夫 1995「清水北口遺跡」『笠懸町内遺跡Ⅱ』群馬県新田郡笠懸町教育委員会
富澤敏弘 1989『城山遺跡』北橘村教育委員会
小田静夫 1983「スタンプ形石器」『縄文文化の研究』７　雄山閣
石坂　茂・岩崎泰一 1988「燃糸文土器文化における石器群の一様相　－スタンプ形石器と三角錐形石器を中心として－」『研究紀要５』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 写　真　図　版

七ツ石3・4号墳全景俯瞰写真

七ツ石3・4号墳全景俯瞰写真

七ツ石３号墳全景（上から）（石室北側の石は取り外した天井石）

七ツ石３号墳石室全景（上から）

七ツ石３号墳全景石室前の前庭・墓道（南西から）

七ツ石３号墳石室裏込め（東から）

PL. 4

七ツ石3号墳（南西から）

七ツ石3・4号溝（南東から）

七ツ石3号墳幅広周溝（南から）

七ツ石4号墳（南東から）

七ツ石4号墳・荒砥70号墳（北から）

七ツ石4号墳北周溝（西から）

七ツ石3号墳（南西から）手前荒砥70号墳土橋

荒砥70号墳（北から）

七ツ石３号墳天井石（北西から）

七ツ石３号墳天井石（西から）

七ツ石３号墳天井石（南西から）

七ツ石３号墳天井石（南から）

七ツ石３号墳天井石（南西から）

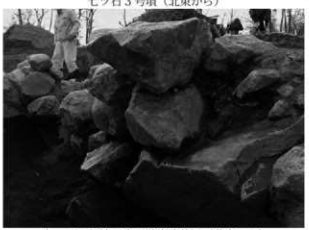
七ツ石３号墳天井石（北から）

七ツ石３号墳天井石（南西から）

PL. 6

七ツ石３号墳（北東から）

七ツ石３号墳（北東から）



七ツ石３号墳石室西壁崩壊状況（北東から）

七ツ石３号墳石室西壁崩壊状況（南から）

七ツ石３号墳（北西から）

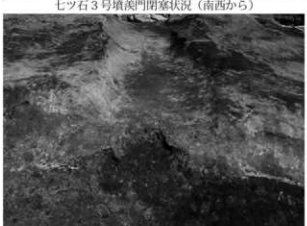
七ツ石３号墳羨道閉塞石前の立石蓋石

七ツ石３号墳羨道閉塞石前の立石蓋石（東から）

七ツ石３号墳羨門閉塞状況正面

七ツ石３号墳羨道閉塞石の量

七ツ石３号墳羨門閉塞状況（南西から）


七ツ石３号墳墓道周溝交差部の穴

七ツ石３号墳前庭・墓道（南から）

PL. 8

七ツ石３号墳玄門蓋石

七ツ石３号墳玄門閉塞蓋石状況（玄室から）

七ツ石３号墳玄門閉塞状況（羨道側から）

七ツ石３号墳玄門閉塞状況（上から）

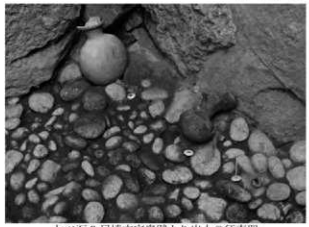
七ツ石３号墳羨門から玄室を望む

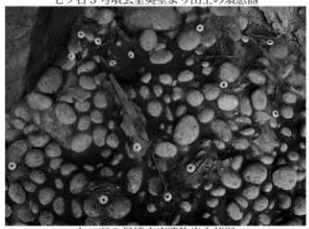
七ツ石３号墳羨道敷石（上から）

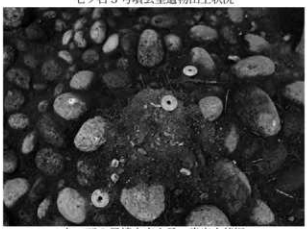
七ツ石３号墳羨道１面敷石（玄室から）

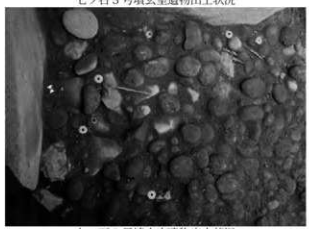
七ツ石３号墳羨道２面敷石（羨門から）

七ツ石３号墳玄室遺物出土状況


七ツ石３号墳玄室奥壁より出土の須恵器

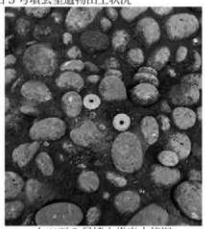

七ツ石３号墳玄室遺物出土状況

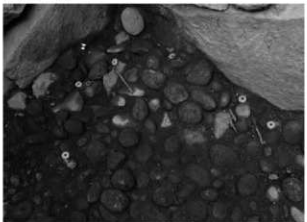

七ツ石３号墳玄室人骨・歯出土状況


七ツ石３号墳玄室遺物出土状況

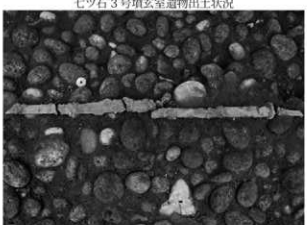
七ツ石３号墳玄室釣り手金具出土状況

七ツ石３号墳鏃出土状況


七ツ石３号墳人歯出土状況



七ツ石３号墳玄室遺物出土状況



七ツ石３号墳直刀出土状況

七ツ石３号墳金環出土状況

七ツ石３号墳鉄鏃出土状況・軽石床敷石

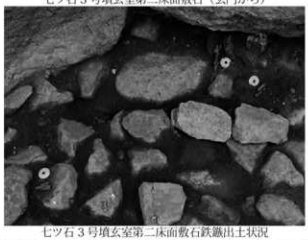
七ツ石３号墳第一床面敷石状況（玄門から）

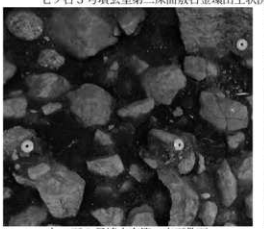
七ツ石３号墳第二床面敷石（奥壁から）

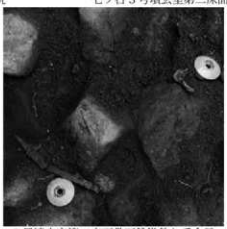
七ツ石３号墳玄室第二床面敷石（奥壁から）

七ツ石３号墳玄室第二床面敷石（玄門から）

七ツ石３号墳玄室第二床面敷石金環出土状況


七ツ石３号墳玄室第二床面敷石鉄鏃出土状況


七ツ石３号墳玄室第二床面敷石


３号墳玄室第二床面敷石鉄鏃釣り手金具

３号墳玄室鉄鏃出土状況

玄室第二床面金環出土状況

玄室第二床面銅製鞘飾り

玄室第二床面金環

玄室第二床面鏃出土状況

PL. 12

七ツ石３号墳２面散石除去（玄門から）

七ツ石３号墳石室散石（ＦＰ軽石）

七ツ石３号墳軽石の大小

七ツ石３号墳東壁（西から）

七ツ石３号墳軽石重量測定状況

ドローン空中写真撮影状況

七ツ石３号墳（石室内土師作業）

七ツ石３号墳北側南北土層断面（東から）

七ツ石３号墳東側東西土層断面（北から）

七ツ石３号墳西側東西土層断面（北から）

七ツ石３号墳西側東西土層断面（南から）

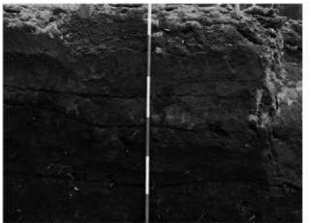
七ツ石３号墳石室東壁裏込め（東から）

七ツ石３号墳石室東壁裏込め・墳丘断面（南東から）

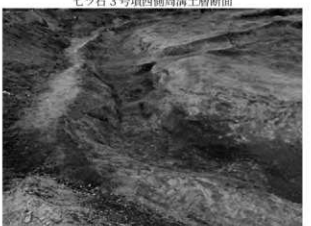
七ツ石３号墳奥壁裏込め（北から）

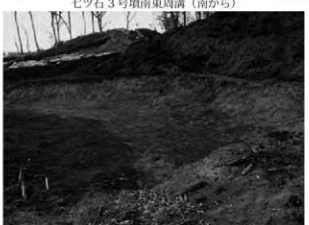
七ツ石３号墳西壁裏込め（西から）

七ツ石３号墳西側周溝土層断面（南から）

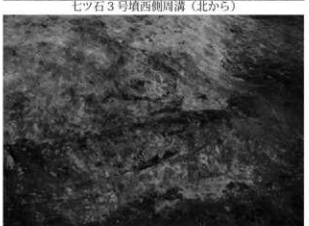

七ツ石３号墳西側周溝土層断面

七ツ石３号墳南東周溝（南から）


七ツ石３号墳南側周溝（西から）

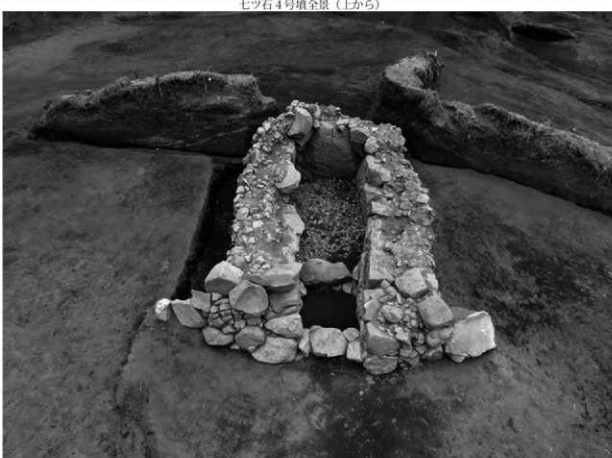

七ツ石３号墳西側周溝（北から）

七ツ石３号墳西側周溝（南から）


七ツ石３号墳墓道から南周溝内を人が歩いた道

七ツ石３号墳南周溝（北から）

七ツ石４号墳全景（上から）



七ツ石４号墳全景（南西から）

七ツ石４号墳前庭正面

七ツ石４号墳（南西から）

七ツ石４号墳羨道部閉塞石

七ツ石４号墳羨道閉塞石（北から）

七ツ石４号墳前庭に掻き出された礫（南から）

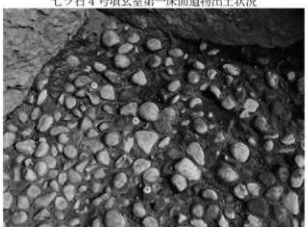
七ツ石４号墳羨道部玄門仕切石前敷石３個

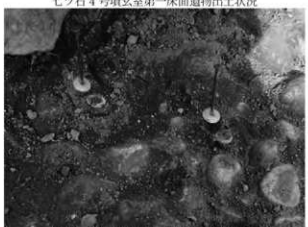
七ツ石４号墳前庭須恵器短頸壺出土状況

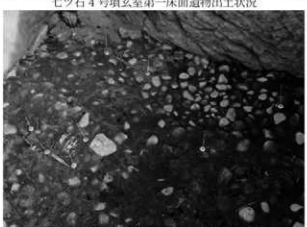
七ツ石４号墳前庭部須恵器甕出土状況

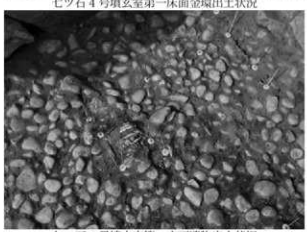
七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況

七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況

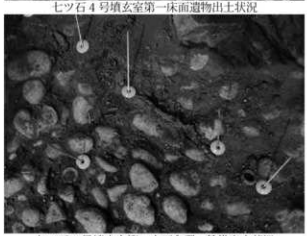

七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況


七ツ石４号墳玄室第一床面金環出土状況

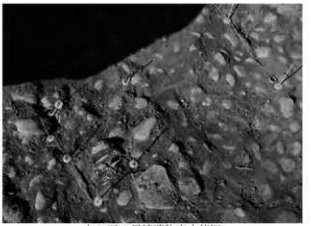

七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況


七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況

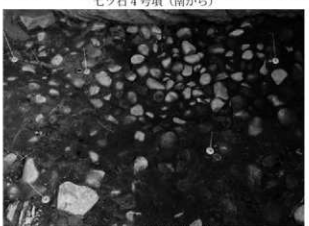
七ツ石４号墳玄室第一床面遺物出土状況

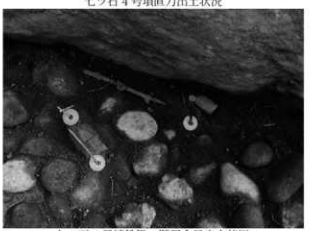

七ツ石４号墳玄室第一床面金環・鉄鏃出土状況

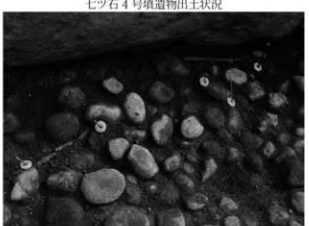
七ツ石４号墳（南から）


七ツ石４号墳遺物出土状況

七ツ石４号墳直刀出土状況

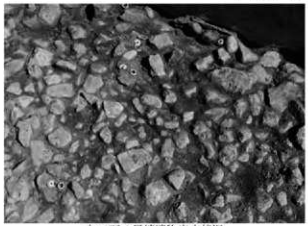

七ツ石４号墳遺物出土状況

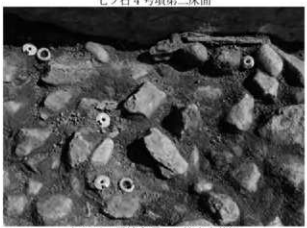

七ツ石４号墳鉄鏃・鞘尻金具出土状況


七ツ石４号墳鉄鏃出土状況

七ツ石４号墳遺物出土状況

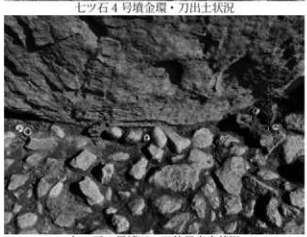
七ツ石４号墳第二床面

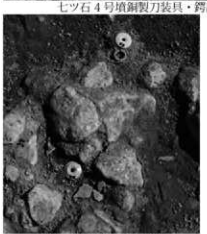

七ツ石４号墳遺物出土状況

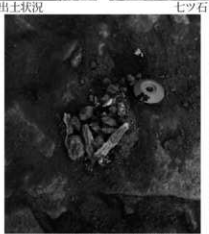

七ツ石４号墳金環・刀等出土状況

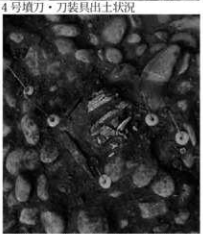
七ツ石４号墳金環・刀出土状況

七ツ石４号墳銅製刀装具・鍔出土状況


七ツ石４号墳刀・刀装具出土状況

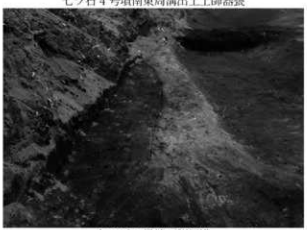

七ツ石４号墳金環出土状況


七ツ石４号墳人骨出土状況


七ツ石４号墳小刀・人骨・歯出土状況

七ツ石４号墳南東周溝出土土師器甕

七ツ石４号墳堀残し土橋と西側周溝（北から）


七ツ石４号墳西側周溝

七ツ石４号墳堀残し土橋（北西から）

七ツ石４号墳東側周溝・墳丘断面（南東から）

七ツ石４号墳玄室２面敷石除去（羨道から）

七ツ石４号墳北側南北墳丘断面（西から）

七ツ石４号墳西側墳丘東西（南から）

七ツ石４号墳石室奥壁裏込め（北から）

七ツ石４号墳石室裏込め（北西から）

七ツ石４号墳石室裏込め（北西から）

七ツ石４号墳石室裏込め（西から）

七ツ石４号墳石室裏込め（南東から）

七ツ石４号墳石室裏込め（南東から）

七ツ石４号墳玄室内上面敷石量

七ツ石４号墳玄室内上面敷石量 16 籠

七ツ石５号墳（北から）天井石粘土目地詰め

七ツ石５号墳（南から）

七ツ石５号墳（南東から）

七ツ石５号墳（北から）

七ツ石７号墳（北から）

七ツ石７号墳天井石（西から）

七ツ石７号墳（西から）

七ツ石６号墳（北から）

七ツ石６号墳（西から）

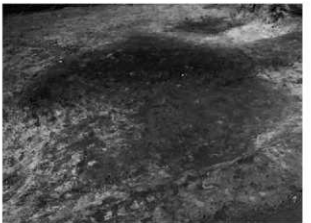
七ツ石６号墳（西から）

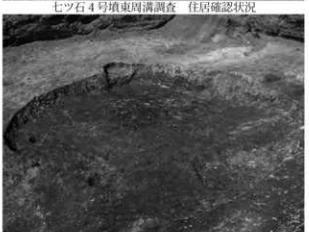
七ツ石６号墳（西から）

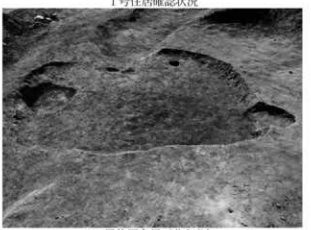
七ツ石６号墳（北から）

七ツ石６号墳（北から）

七ツ石４号墳東周溝調査　住居確認状況


１号住居確認状況


１号住居全景（南東から）


１号住居全景（北から）

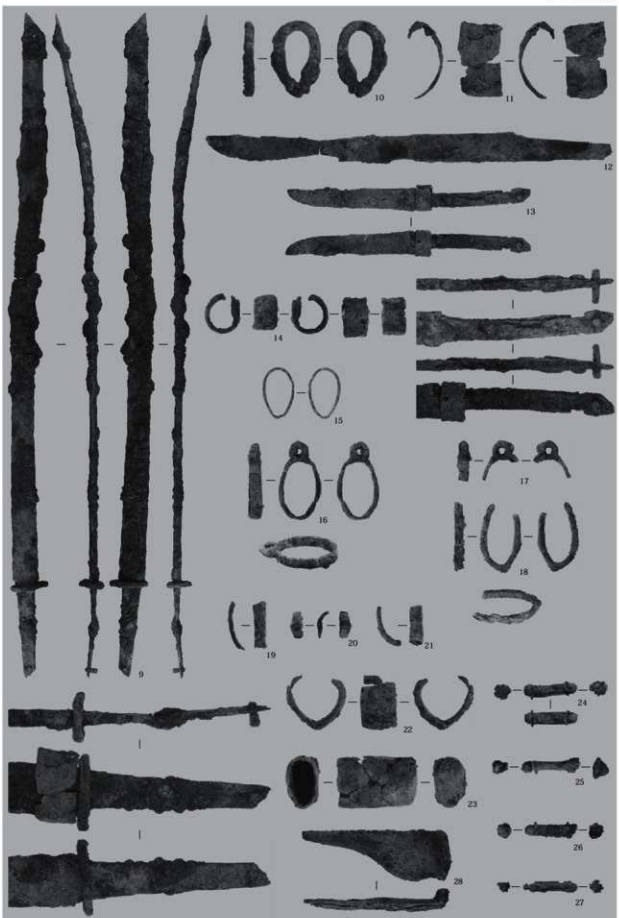
１号住居遺物出土状況（南から）

１号住居遺物出土状況

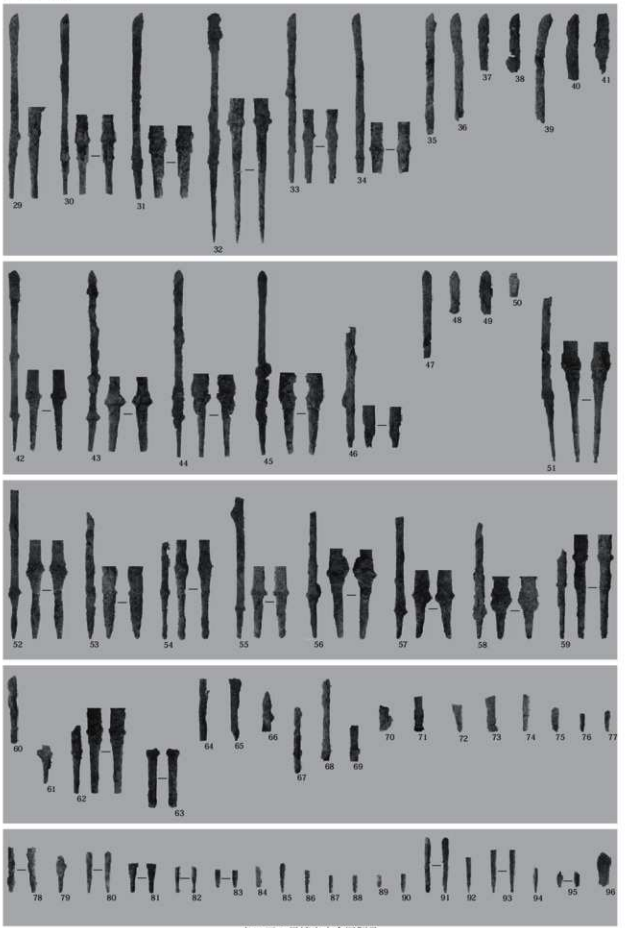
補修孔のある土器口縁

１号住居石器出土状況

１号土坑（南から）

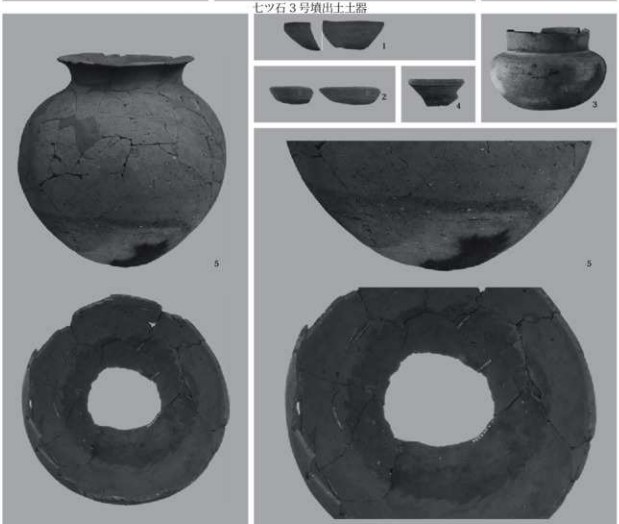



七ツ石３号墳出土金属製品



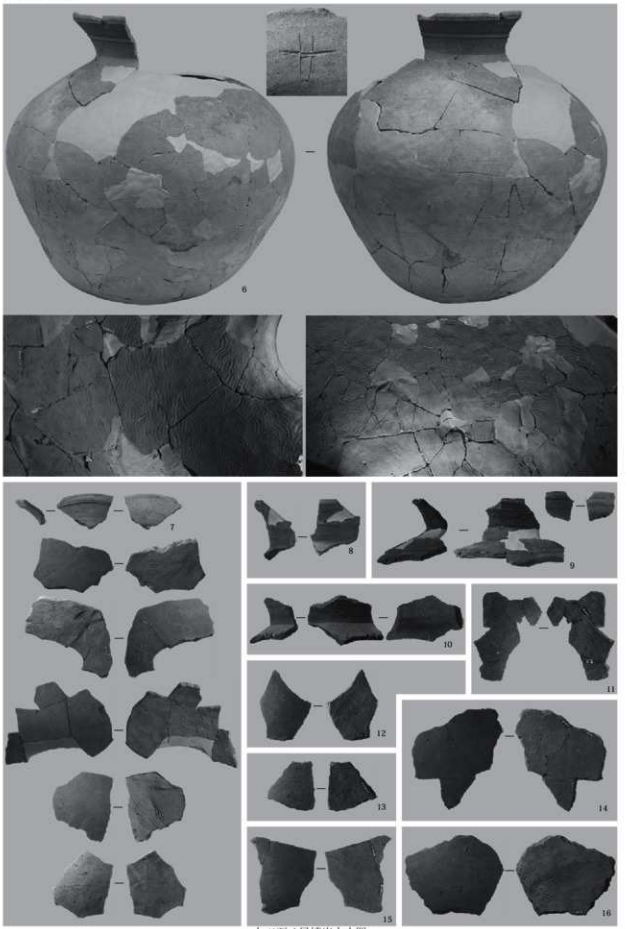

七ツ石３号墳出土金属製品

七ツ石３号墳出土土器

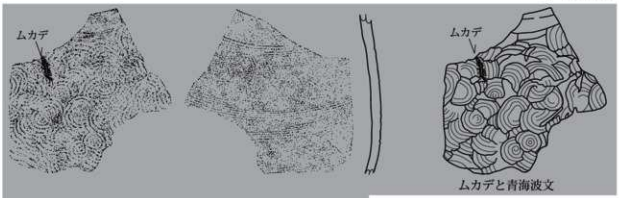



七ツ石４号墳出土土器

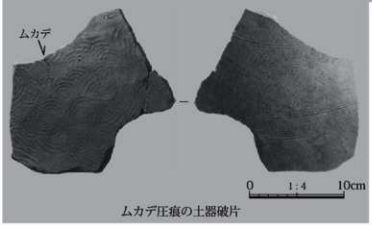
PL. 28



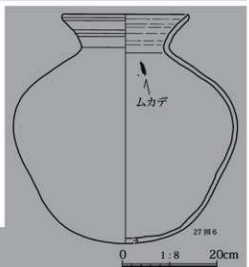

七ツ石4号墳出土土器



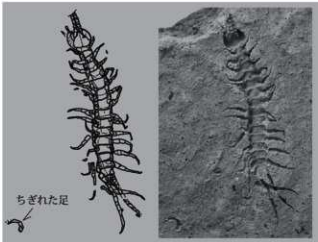
ムカデと青海波文



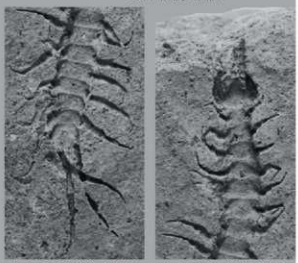
ムカデ圧痕の土器破片



ムカデ圧痕の位置



ムカデ圧痕の全身図（２倍図）


ムカデの下半分（拡大）　ムカデの上半分（拡大）

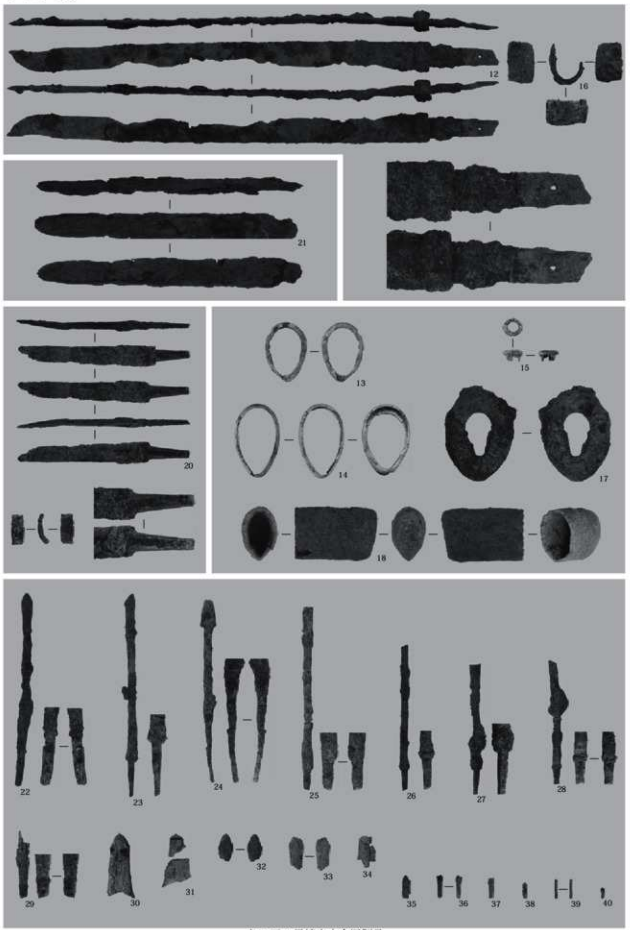
ムカデ圧痕の右側面（２倍図）

ムカデ足圧痕の左側面（２倍図）

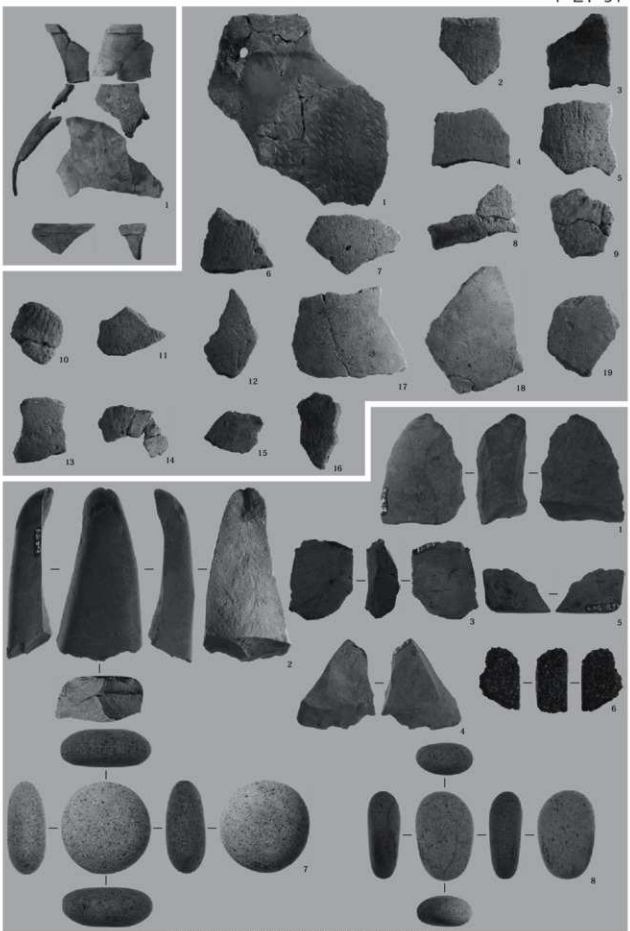
ムカデの頭（拡大）　ちぎれた足の先端（拡大）

七ツ石４号墳須恵器大甕ムカデ圧痕

PL. 30

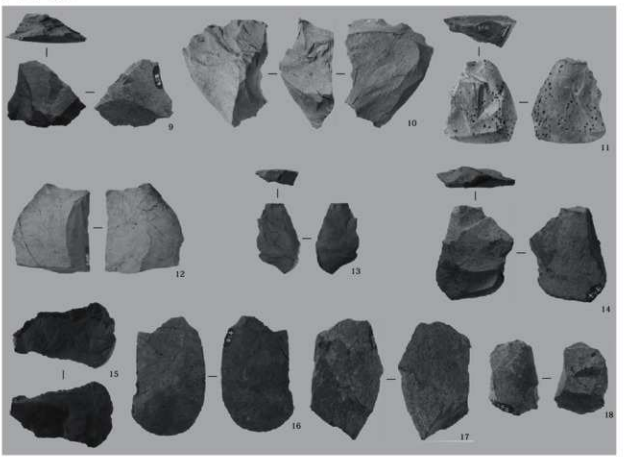


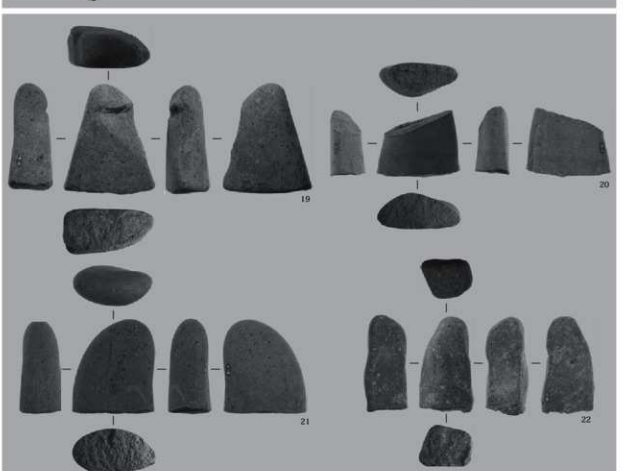

七ツ石４号墳出土金属製品



弥生土器・縄文早期稲荷台式撚り糸文・無紋土器・石器

PL. 32




縄文早期稲荷台式り糸文期の石器

# 発掘調査報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ことうかいせきぐん　にしおおむろななついしいせき |
| 書名 | 小稲荷遺跡群　西大室七ツ石遺跡 |
| 副書名 | 七ツ石３・４・５・６・７号墳　縄文早期稲荷台式住居<br>太陽光発電施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 大塚　昌彦　宮崎　重雄 |
| 発行機関 | 前橋市教育委員会 |
| 編集機関 | 株式会社　測　研　（文化財研究室） |
| 所在地 | 〒370-3517　群馬県高崎市引間町 712-2 |
| 発行年月日 | 2018年（平成30年）7月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| こもろかいせきぐん<br>小稲荷遺跡群<br>にしおおむろななついし<br>西大室七ツ石<br>いせき<br>遺跡 | ぐんまけんまえばしし<br>群馬県前橋市<br>にしおおむろ<br>西大室 421・<br>422-2 番地 | 10201 | 0218 | 36° 39′ 78″ | 139° 18′ 52″ | 2018.1.21 ～<br>2018.3.27 | 2,200 | 太陽光発電<br>施設建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小稲荷遺跡群<br>西大室七ツ石遺跡 | 古墳 | 古墳 | ５基 | 金環・直刀・刀子・小刀・鞘吊手金具・鉄鏃・曲刃鎌、漆玉・須恵器提瓶・甕・短頸壺・大甕、土師器坏・甕 | ３号墳は、多角形墳で横穴式石室前庭部から墓道が存在。<br>小石槨等の３古墳が１古墳の中に存在。内１基は土壙に蓋石を設置した珍しいもの。<br>石室出土遺物で出土例の少ない漆玉玉３点、鎌（農具）が副葬品に収められている。<br>石室玄室床敷石に軽石のみが敷かれている。<br>４号墳は、須恵器大甕内部に厶カデ一匹の圧痕。 |
| | 集落 | 縄文 | 竪穴住居１軒<br>土坑２基 | 早期稲荷台式撚り糸文の土器・スタンプ形石器・擦り石 | 縄文時代早期稲荷台式期の竪穴住居１軒・土器補修孔。 |

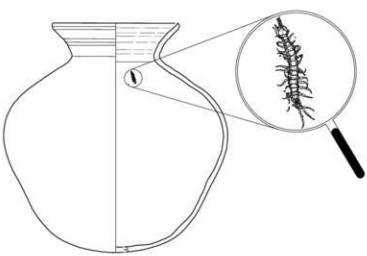
小稲荷遺跡群　西大室七ツ石遺跡

# － 七ツ石3・4・5・6・7号墳　縄文早期稲荷台式住居 －

太陽光発電施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 30 年 7 月 31 日　印刷
平成 30 年 7 月 31 日　発行

編　集／株式会社　測　研（文化財研究室）
〒370-3517　群馬県高崎市引間町712-2
TEL.027-372-6464
発　行／前 橋 市 教 育 委 員 会
印　刷／朝日印刷工業株式会社



七ツ石４号墳出土須恵器大甕内面ムカデ圧痕